

3904
H68

武士根性



陸軍少將

春日重三郎



始



390.4
H68

性根武士

陸軍少將

三重日年



鶴書房刊

957
7
E

序に代へて

題して武士根性と云ふ。過去三十餘年の軍隊生活に於て、各級部隊長、幕僚、學校配屬將校、聯隊區司令官として、其間特に感銘した事柄を、古き記憶をたどりて、唯漫然と書き下した云はゞ、私の體驗談に過ぎぬ。素より今日から考へれば、世相も變り、人の心の動きも餘程違つて來てるから、現時の青年達の頭にはピンと來ぬ節が多々あらうが、所謂老人の冷水として、何等かの得る所があれば筆者の満足する所である。

昭和十六年冬

於船橋寓居

平田生

目次

武士根性	一
スバルタ式	一
親孝行	二
今に見よ	三
やろうつ	六
出帥表	七
石黒閣下	七
忘れんぞ	八
黒鳩公	二
少しは嘗る	三
美味ぞ	四
初陣	五

チヤンス	一七
勇と怯	一八
信仰	二〇
二食主義	二三
三脈之法	二六
戦場の紫煙	二八
報告	三〇
寶丹の功德	三二
輕重本末	三六
姑息の機轉	三九
慰問袋	四三
非人情	四四
除隊悲話	四七
黄州林檎	五〇

不良	五三
用意周到	五六
非實戰的	六〇
職責觀念	六三
善意に解せ	六六
名譽射撃	六九
斷髮と粗食	七一
男の意氣地	七三
母性愛	七七
義理と人情	八一
山川先生	八三
果し状	八九
百萬長者の香奠	九七
八甲田山弔行軍	一〇〇

軍隊と胸膜炎	……	二二
軍隊慰問の今昔	……	二六
實戰談	……	三三
味覺	……	三六
上の好む所	……	三三
長所と短所	……	三六
一步の明	……	四三
金溜め道樂	……	四〇
悪伯樂	……	四五
不平	……	五二
鈴木大將と郷土愛	……	六一
父と母	……	六七

武士根性

筆者が、陸軍地方幼年學校第一期生として、仙臺の學校に入つた頃の生徒監に大越兼吉と云ふ大尉が居られた、後に日露戰役に、橋中佐と併び稱せられた軍神大越中佐その人である。恩威兼備の名生徒監で、生徒には鬼の様に恐がられ、同時に親の様に慕はれてゐた。大尉は殆んど口癖に「武士根性」を連發された。賞める時も、叱られる時も、結末はすべて武士根性だ。「ソナ事は武士根性が許さんぞッ」「ソレが武士根性だ。よくできた〜」萬事この調子だ。武士根性とは「死を恐るるな」「名節を汚すな」と云ふ訓であつた。我々の耳朶には今もこの裂帛の武士根性の生徒監の言葉が強く殘つて居る。

スパルタ式

「冷々。温い」同じく大越生徒監の箴語だ。生徒監の教育方針は所謂「スパルタ

教育」で盡きる。生徒と云つても、十四、五歳の腕白盛りだ。それに間食の如きは全く支給されぬ。だから生徒は一週一日の日曜の外出は、さながら餓鬼の如く、菓子を鱈腹食ふ事が何よりの楽しみだつた。シャツや靴下の洗濯は一さい自分でする。宮城野原頭寒風骨を刺す極寒の時でも、起床と同時に、生徒に率先して冷水浴だ。すべてがこの調子、如何なる寒さでも決して「寒い」と云はせぬ。玉なす汗を流しても、決して「暑い」とは云はせぬ。この二つの言葉は全く嚴禁だ。アア冷々する。ア、温いと云ふのだ。今時の青年は、なーんだ。馬鹿々々しいと笑ふだらうが、當時の我々には、眞劍だつたのだ。

親 孝 行

大越生徒監の第一に最も鼓吹された事は孝道であつた。孝は人徳の基であると云ふ信念を、懸命に生徒に吹きこまれた。蓋し生徒監の眞意は、軍人勅諭五ヶ條の精神は唯一誠心に歸す。この誠心の養成手段として親に對する義務即ち孝道を

知得せしむるを捷徑と信ぜられたからであつた。その現れの一つは、生徒の寢室へ備へつけられた手箱には、必ず両親の寫眞を飾らせ、朝夕必ず之に禮拜させられた。私はこの訓を無條件に倣つて家庭を離れた子女には、必ず之を實行せしめた。

今に見よ

我々仙臺地方幼年學校第一期生が、中央幼年學校に進んだ入校當初の素養試験には、仙臺出身者は悉く成績香しくなく、仙臺の奴は、石頭だと云ふ評判が高かつたさうだ。偶々大越大尉が、何かの御用で上京せられ、一日學校に我々を訪ねられた。一同は定めし不成績を叱られるんだと、ビク／＼して生徒監の許に集つた。ところが例の温顔、一言も我々の豫期した點には觸れず、ニコ／＼一點張りでお別れした。後で某先輩に聞くと、大越君は大威張りで、「今に見ろ、おれの育てた生徒が、必ず日本陸軍を背負つて起つぞ」と豪語せられたと聞いて、冷汗三斗だつた。星霜こゝに三十年、支那事變の最高潮に、曰く多田駿參謀次長、曰く

板垣陸軍大臣……地下の生徒監定めし快心の笑みを洩らされたであらう！

附記 大越大尉は間もなく教育總監部員に拔擢せられ、日露戦争には軍神橋中佐の下に第二軍管理部副官として出征、轉じて名古屋の第六聯隊——大隊長として、奉天會戦に参加、彼の李官堡（三軒屋）に於て十數倍の敵の必死の逆襲をうけ、聯隊長以下死傷續出苦戦惡闘を繰りかへし、戦況は刻一刻と危険に瀕した、聯隊長の意圖をくみ、創身を包んで從卒唯一人とともに、南部旅團長の許に報告に赴く途中、再び敵彈をうけ、終に又立つ能はざるを知るや詳細なる復命書を認め、從卒に後事を託し、從容として自盡せられた。この絶筆は通信紙に鉛筆で認められ、言々眞に血と涙。

軍神大越中佐の偉容は、郷里福島縣中村に銅像として、幾多後輩崇拜の的となり、遺芳洵に千載に高い。沈思瞑目すれば師の溫容儼として眼前に彷彿する。我々には永へに忘るゝ事の出來ぬ血の復命書は次の通りである。

三月七日午後六時三十分於李官堡南方無名部落西方畑地

大越少佐

南部少將殿

述懐書

- 一、聯隊長及ヒ他ノ大隊長ト行動ヲ共ニセス獨リ陣地ヲ退キタルハ聯隊長ノ依托ヲ受ケ實況ヲ旅團長閣下ニ報セントセシニアリキ
 - 二、途中ノ危険ヲ顧慮セサルニハアラサルハ勿論ナリシモ聯隊長以下同僚及ヒ部下兵卒ノ苦境ニ陥リツツアリシヲ見ルニ忍ヒス死ヲ決シテ旅團長ニ會シ實況ヲ報告シ之ヲ救フノ策ヲ講シ再ヒ陣地ニ引キ返ヘシ前諸官及ヒ部下ト枕ヲ並ヘテ死セントセシニアリキ然ルニ殘念ナカラ途中ニ於テ負傷シ此目的ヲ達スル能ハサリシハ返ヘスノモ遺憾ノ極ミナリ仍テ負傷後自ラ死シテ聯隊長及同僚並ニ部下ト共ニ地下ニ會セントセリ然ルニ右手負傷刀ヲ執ルニ堪ヘス仍テ拳銃ヲ以テ自刃ス
- 閣下微衷ヲ察セヨ

茲ニ多年來ノ御厚愷ヲ謝シ衷情ヲ述フルコト右ノ如シ
終リニ閣下ノ御武運長久ヲ祈ル

三、身體疲勞シ筆ヲ執ルニ困難ナリ仍テ概況ヲ述フ

やらうッ

中央幼年學校の一年生の時、兼々他中隊の上級生徒の御機嫌に觸れて居つたのが、不圖した事から爆發して正面衝突の情勢となり、殺氣紛々、我々は、自習室に集り態度に就いて相談をした。穩健説もあれば、悲歌慷慨の硬論も飛び、議中に纏らず、甲論乙駁の中途に、突如一生徒があつて、机上に突立ち上り「ヨシやらうよ」仰ぎ見れば、中村と云ふ平素は誠に溫良恭儉、思慮圓熟老成の風格を備へ苟も他人と事を構へるやうな風は寸分もない模範的優等生だ。百蟬忽然として鳴り静め、瞬間期せずして一決、敢然上級生と大喧嘩をして世人を驚かした。原因は軍紀風紀に超越した血氣の青年の意氣地の爆發で大した深い理由はなかつ

た。云はば若氣の誤りであつたが、之がためあたら青葉の數名の犠牲者を出したのは誠に氣の毒であつた。

出 師 表

漢文に川田と云ふ教授があつた。後の高千穂學校長で、帝大出の少壯教授、漢字を教へると云ふよりは、裂帛の語氣を以て悲歌する。一度出師表を講じ、託孤の一節に至れば、熱調その極に達し、潜然として唯流涕あるのみ、室内寂として微かに高鳴る心臓の鼓動を感じるのみ、感激性に溢るゝ若き武學生の血管に何物を注入せられたかは、想像に餘りあらう。

石 黒 閣 下

學生の時に、上級生に連れられて、屢々郷黨の大先輩であられた石黒軍醫總監閣下のお宅を訪問したものだ。閣下は、御多忙の裡にも拘らず、色々と有益な御話

を後輩に示され御馳走に預かつた。その内で今尙強く耳に残つてゐることは、閣下の日常行事の一節で閣下は毎朝必ず各方面から來た手紙に對しそれ／＼返事を親しく認めになる。これだけは萬障を排しても一度も缺かした事は無いと、何んでもないことのやうだが、實行するには中々のことだ。省みて今なほ冷汗三斗。

忘れんぞツ

學友に筑後出身の一熱血兒があつた。熊襲その者の様な純眞な感激家で、偶々校規に觸れて退校を命ぜられた。家計に恵まれず、郷里の貸費生であつたから、その儘學資の綱が切れた。彼は神田の下宿屋に一室を借りて苦學の途を選ぶより途はなかつたのだ。次の休日に早速彼を訪ねた、昨日の凜々しい軍服姿に代る洗ひざらしの單衣、ビール箱の机の上には、何やら講義録らしき古本二、三冊、而も意氣昂然たるものがあつた。彼がちよつと座を立つた隙に小遣ひの全部と云つてもその額は勿論お恥づかしき程度だが、當時の自分には全財産であつた。それを

ツツリ机の下に忍ばせて素知らぬ顔で、やがて暇をこうた。入口まで送つてきた彼は、唯一言「忘れんぞツ」と堅く私の手を握つた。彼の手は火のやうだつた。

時は流れて十有餘年、滿洲に大隊長として赴任するや一番に訪問を受けたのが彼氏だつた。その語るところによれば、あの時から間もなく大陸に志を立て、先づ滿洲に入り、七轉八起、數奇の運命の波にゆられて東奔西馳、今は撫順に居を定め〇〇洋行の看板を掲げ、郷里より妻を迎へ、生活は安定してゐる云々と。

秋になつて大隊五泊行軍を統べて日露戦争の奉天追撃の古戦場を探ねつゝ鐵嶺より、羊腸たる山路を踏破して彼の住む撫順に二泊した。勿論、彼は遙々と三里位の所まで支那馬に跨つて迎へに來てくれた。彼は心から我々を歓迎し、酒だ、麥酒だ、菓子だ、果物だと山と積んで大隊の將兵に洩れなく犒うてくれ、更に大隊の將校を一堂に招待して支那料理の馳走に預かつた。私は勿論二夜とも彼の家庭の珍客として夫婦の心からの待遇に語り明かした。

この鐵嶺時代に將校乗馬の制度が變つて、今まで自馬であつたのが、官から貸

與せらるゝ事となつて、自分の乗馬を自分で處分せよとの命令だ。勿論將校乗馬として役に立つものは軍隊で買上げた。自分の愛馬は沼宮號と云ふ南部の内國産サラブレット種栗毛二白流星、馬品の良い輕快温順な名馬で、元某騎兵旅團長の愛馬で、天覽の光榮に浴した事もあつた。少佐に進級する際拂ひ下げをうけ、以來正馬として愛撫今日に及んだが、何分老齡で遠からず廢馬の運命にあつたので、滿洲で處分せば勿論乗合馬車で酷使されて斃れるのが當然で、自分には忍び難きものだつた。方々へ照會して、若し乗馬として飼ひ殺す篤志家があつたら、無料で進呈するといふ條件で探したが、何分乗馬は經費が澤山要するので希望者も見當らず、焦慮して居たが、ふと撫順の彼氏を思ひ出して手紙をやつたら、早速彼自身鐵嶺に飛んで來て是非譲つてくれとのこと、私も大喜び、なほ鞍も、馬丁も一緒に引取りたしとのことにて、馬丁も滿洲生活を希望して居つたので、二つ返事で萬事解決した。

彼は直ちに屋敷内に煉瓦造りの堂々たる厩舎を新築し、夫婦の間に不幸にして

兒が無かつた故もあつたらう、夫婦ともく愛撫の限りをつくし、彼は愛馬沼宮に跨がり毎日意氣揚々と乗廻してゐることだつた。その時彼は「馬の代價は幾許？」私は別に金を貰ふ意志も無かつたが當時は内地歸還の期も近づき、部下の後始末に金を必要として居つたので、そんなら貴公の生活が差支へなかつたら、之を始末して呉れと云つて、數名分の債權者の請求書を一束にして渡してやつた。

若干日を経てから、大隊副官が鹿爪らしい顔をして「大隊長殿、皆が御禮に來て居ます」と、自分は何の事やら合點が行かなかつたが、行つて見ると三、四名の將校が集つて「有難うござりました。お蔭で大手を振つて歸れます」と、一切は判明した。彼氏の義氣が、老馬を救い、若干人を一時苦境から免れしめたのであつた。

時は三轉して滿洲事變當時混成旅團長として山海關に着任したとき、發送人不明の三鞭酒一ダースが届いた。色々と探査の結果、當時喉頭癌を病んで奉天病院に入院中の彼の誠意の贈物だつた。軍旅多端、彼の病床を見舞ふ機會を逸してゐ

る間に福岡大學病院にて永逝したとの、夫人よりの訃に接した。北支の下情に通曉し、熱血にして實行力に富む彼が今日まで長らへたら、今次事變に必ずや何か大なる貢獻を爲したであらうと確信してゐる自分には、一層惜しまれてならぬ。

彼氏の名は、名聞を好まなかつた彼氏の意を汲んで暫く胸底に秘す。が我の友達及び滿洲時代の戦友が讀んだらア、彼氏かと思ひ出さるゝであらう。

黒^{クロ}鳩^{トビ}公^{キン}

日露の國交緊迫し、國論囂々たる眞最中に、露國の大立物陸軍大臣黒鳩公大將が、突然視察の名を藉りて來朝、一日市ヶ谷臺を參觀された。生徒隊の教練が視察課目の一つで、最後が四百の歩兵生徒の密集突撃だつた。突撃目標は云はずと知れた玄關入口正面、壇上の主賓黒鳩公將軍！ 明日の相手の敵國陸相！ 四百の肉弾、迸る敵愾の熱火、今に見よ日東男兒の意氣、指揮官の指揮刀一閃「突込メ」ワアツと叫ぶ喊聲、我等はブル／＼と武者振ひして、黒鳩公目がけて、眞劍

その物の氣合諸共突き込んだ。さすがの黒鳩公も、鳩が豆鐵砲を喰つたやうに目をパチクリ、思はずタデ／＼と數歩下つたさうだ。今なほその時の熱叫が、老いの鼓動を感じさせる。

少しは嘗める

日露の風雲を前にし、士官學校を卒業原隊へ復歸した見習士官、打ち揃うて聯隊長の私宅を訪れた。座敷へ通されて待つ間に、女中が茶をはこんだ。口にすると之はしたり冷酒、互に顔見合はせて、さて飲んでよいものか、悪いものかと躊躇してゐる間もなく、聯隊長が現れ、どつかと大胡坐、シロリと一同を見わたして「見習士官は酒はいけるか」誰も返事なし、たゞみかけて「どうぢや、酒位飲めぬ奴は補充隊に残すぞ」と呵々哄笑、サア事だ。將に一生の大事、殘されては大變、期せずして互に目を見合はず、福島出身の某「少しは嘗めます」と「何ッ少しは嘗めると之は面白い嘗めて見よ」とばかり例の茶碗で冷酒合戦、聯隊長は

愉快氣に御自分も満を引いて酒戰愈々酣、巨鯨の如し。段々に盃が重なり、某は忽ちグツと大振舞と云ふ醜體、そのまゝ倒るゝ者、青息吐息殆んど座に堪へぬ者、二、三の豪傑組は平然として、ペロリく。

これが聯隊長との初對面の幕、今にして思へば、随分亂暴な話だが、聯隊長の胸中蓋し別に期する所ありしにあらざる？

美味ぞ

妻の父が、老境に入りて中風にかゝり、靜養年餘、病漸く輕快となりしも、主治醫より盃を執ることを許されず、當人また敢て要求もせず、ある時母が「達者になられても、お酒を召上るお氣持にはならないでせう」と云へば「馬鹿なことを申すなほれば美味ぞ」と「なほれば美味い！」片言なんだが名僧の禪語を聞くが如く、獨歩の歌を味ふやうな氣がする。蓋し酒の仙にあらざれば能はざるべし。

初陣

我々が内心最も心配だったのは、初陣に生ずるてふ心理的諸現象であつた。常山紀談等には古武士の初陣に就いて、胴震ひ即ち武者振ひをするとか、一時顔が蒼白になるとか、矢丸に御辭儀をする―ヒョット頭を下げる―等々が色々記されてあるので、若し戦場で部下の前で、かゝる醜體を演じては大變だと思つて、先輩に御尋ねしたりしたが、腑に落ちぬ。歴戦の老大隊長に伺ふと例の如く呵々大笑「心配せんでもよい、己は隊長だと云ふ誇を以て部下を睨むんだ」だが、何んとなく氣がかりだ、胴震ひや、御辭儀は仕方がないが、顔が蒼くなるものなら紅でもつけたら胡魔化せたらうと考へて、祕かに口紅を買つてポケットに忍ばせた。

愈々今日は初めて露助にお目にかゝられるんだ。部下小隊を提げて大隊主力に先行して其要點奪取の命令に、欣喜雀躍、張切つてゐる部下に激勵の辭を與へ、

種々の注意を述べ、コッソリ口紅で薄く化粧して、中隊長以下に送られて飛出した。

大隊主力が到着する迄は何んとも思はなかつたが、愈々散兵線に立つて攻撃を開始する時、前記の色々の初陣の話を思ひ出した。別にガタ／＼震へても居らぬ。ビュツと弾丸が来ても頭も下らない、唯氣にかゝるのが顔だ。鏡なんか持合はせもない、ソット従卒を呼んで、「おれの顔色が平素と違つてゐるか」と聞いて見たら、怪訝の顔をして、のぞき込んで「少し赤くあります」とホット安堵した。つまらん事のやうだが實際こんな笑ひ話もあつたが、畢竟肚の修練が未熟であつたからだ。併し白晝は如何に、銃砲弾が雨注しても、頭を下げた覚えはなかつたが、唯一度眞暗な晩に、歩哨線を巡察中、不意にグリーンと一發頭上をかすめたとき思はず頭を下げた。ハツと思うて四邊を見廻し、誰も見て居らぬ—勿論暗黒だ—のでホツとしたことがあつた。つまり心のゆるみだ。出征前老大隊長が、將校たるの誇を持つて、部下を睨めよと云はれたのはこゝだなと思つた。

チヤンス

某所の戦闘に於て中隊は某部落に添うた壕の中に散開、第一線の小隊長たる筆者は、軍扇を右手に今や「前へ」の號令を下さんとしたが、目ざす前面部落との間は一物もなき坦々たる畠地、しかも右側面よりは、敵の機關銃小銃のつるべ打ち、眞に物凄い位、散兵は龜の子のやうに、崖の下に縮まりて否しがみついで動かす、コレデハいかんと、ジツと前進の機會を窺つた。

「ヤラレタツ」と叫びながら、轉ぶやうに後方から散兵線に飛込んだ者がある。期せずして、「何うした／＼」と介抱せんとすれば、それは隣の中隊の看護兵で、シツカリと両手で股間を抑へ「大變だ／＼」と大聲あげて喚ぶ。近寄つて傷所をあらためんとせば、彼は益々堅く傷口？ を抑へて頓狂な聲を絞つて「去勢されました」と散兵共思はず吹き出す瞬間「駆歩前へツ」と壕を跳り越えて疾驅すれば、何の苦もなく散兵線は、勢ひよく一氣に前方の部落まで躍進した。某看護兵

が大事な局部をやられたと思ひ違ひして、思はず口走つた「去勢」の一言に今迄萎縮して居た兵卒が、ドツと笑ひ出した刹那を捕へた機轉、我ながら出来したと微笑した。後年に至り偶々この鎖事を回想して、事は單なる一散兵線の前進時期と云ふに過ぎぬが、戦鬪の玄妙幽遠の原理と敢へて異ならぬ一脈の相通するものあるを悟つた。實行部隊の意志を無視した命令、即ち上下の氣合の合致せぬ時は多くの場合不測の無理が伴ふ事がそれだ。反對にシツクリ一致すれば最小限度の犠牲を以て必ず成功すると云ふ事だ。之は決して戦鬪ばかりに限らずすべてに通ずる法則である。

勇 と 怯

戦場に於ては勇者もなければ怯者もなし——日本軍人に於ては——、要はその時の環境と、指揮者の指揮振りに因るが如し。某戦鬪に於て、散兵壕に據つて近く露兵と對す、敵は數倍の優勢を恃んで、小癩にも包圍的にジリ／＼と攻めて來る、

我は散兵壕を利用し、百發百中を期し、泰然自若、偶々一兵あり、平時の成績は頗る良好、機敏にして理解力に富み、上司に囑目せらる。然るに小隊長たる予が彼を視る度に彼は常に装填の姿勢にある、最初は氣にも留めざりしが毎度の事に不思議を感じ、特に氣を着けてゐると彼は一度も胸墻の射撃位置に身を挺せず、終始散兵壕内に身を屈して、將に發射終りて次の装填をなす如く粧つてゐる事を看破した。卑怯な奴と叱咤せんと思ひしが、待て暫し、彼を呼び寄せ命じて曰く「中隊長殿の許にこの報告を傳達せよ」と當時中隊長は散兵線の後方約二百米の村落の圍壁の一角に位置せられあり、この地區は敵砲火の集中地帯であつた。眞に彈丸雨飛、直立不動心なしか稍々身震ひしつゝあつたが、決然復唱を終るや否や脱兎の如く散兵壕を驅け出した。命令はしたものの可愛い部下の生死の瀬戸際、第一線の指揮などソツチのけ、手に汗握つて彼の行手を見守つた、發止ッ敵の一砲彈の着發、爆煙濛々として彼の姿を呑んだ、シマッタと地團駄を踏んだ瞬間、砂煙の切れ間より一散に驅けて行く彼の姿を見出した時は、思はず手を合はせて神

佛を拜んだ。首尾よく任を果して、夕闇近くに凜然自若たる彼の復命を受けた。爾來彼は生れ變つた如き勇敢無比の一勇士として隊中の模範と仰がれた。チャンスだ、勇怯の境目は紙一枚の差に過ぎぬ。勇者と讃へらるゝも卑怯者と蔑まれるも、煎じつむればその境地如何に依るもの多し、將たるもの、常に心すべき所ならざるべけんやだ。

信 仰

日露戦役當時予が部下に沼崎菊松と云ふ兵があつた。見習士官時代の初年兵で極めて實直な無口の兵だつた。自分が特に彼を知つたのは、或日同僚の某が「貴様の中隊の初年兵に沼崎と云ふのが居る？」と問はれた。「無論知つてゐるが、沼崎が何うかしたか」「イヤ僕が朝夕の點呼報告に行く途中常に炊事場の側に、一心に東方に向つて禮拜してゐる兵を見る、感心な心がけと思つて名を問うたら十中隊の沼崎だと答へた」云々と、早速班長を呼んで彼の性行を質した處が、班長も彼が朝夕金刀比羅神社を遙拜する事を知つて居たので、その夜沼崎を呼んでその理由を聞くと次の如き答へであつた。

彼は陸中宮古町附近の漁師で、三度生死の巷に彷徨うた、第一は沖合出漁中暴風雨に襲はれ、將に激浪に吞まれんとした時、平素信仰せる金刀比羅大明神が示現し、招かるゝが儘に必死に櫓を握り、終に某港に避難が出来た、次は同じく難破船の一人となり、板一枚を命の綱に浪のまに／＼漂流し、身心共に疲れ切つて朦朧たる時、はつきり明神様の御手にすがつて助けられた、三度目は脚氣にかゝり、醫師から見放されしが、一心に金刀比羅様を念じて治つた。爾來朝夕缺かさず遙かに讃岐の空に御禮を申し上げてゐる云々と。

若者には感心な心がけだと特に目をかけてやつた。之が戦役當時の予の従卒である。彼の信仰は愈々堅く常に戦友に傲語？して、曰く「予の生死には必ず金刀比羅様の御告げがある」と堅く信じ、どんな危険も彼には何等の不安もなく平然として一切は信仰より生ずる信念に頼り淡々たるものであつた。知らぬ者は無神

經だと思つてゐた位であつた。或時中隊が直ちに敵を急追すべく、懸河の勢にて、進發せんとする際、突如沼崎從卒は「小隊長殿沼崎は今行くに死にますから後から追着きます」と澄まし込んで前進を拒んだ。何事だ攻撃前進は否やだと云ふ如き軍人があるものかと怒鳴りつけるが當然だが、平素の彼を熟知してゐる自分は、「ヨシ後から来い」

中隊は一氣呵成に急追又急追某部落を占據して暫く停つた。正午頃後續部隊でも來ぬかと不圖後方に望遠鏡を向けると、遙か彼方の畠の中に一人の日本兵が悠悠と此方へ向つて來る、呑氣な傳令だなど思つてその儘氣にも留めなかつたが、暫く經て又彼方を眺める、先の兵ならん早や二籽位の邊まで來て、依然緩慢なる歩調を續けてゐる、若しやと思つて熟視するとまがふ方なき沼崎だ。何處からともなく流れ弾がクーンと所々砂煙を上げる、「危ッ駈歩」と怒鳴つても勿論先方には通ぜぬ、「早く呼べ、旗を振れ」と命じたが氣が氣でない、聲を限りに沼崎と叫んだ。漸く通じたらしく、彼は銃を振上げて合圖をしたが、矢張り駈けようとせぬ、

先には神の御告げにより戰鬪に参加しないと頑張つた彼が、今この彈雨の中に、何處を風が吹くかと云つた大膽不敵の振舞、怯と云ふか勇と云ふべきか。程なく小隊長の面前に一禮した彼は、平然として「神のお告げが解けました」と、何んだか彼の五體から御光がさすやうに見え、信仰の力の偉大さに感嘆之を久しうした。

二 食主義

同じく忠實なる沼崎從卒の思出。

黒溝臺會戰の三日目二十七日の正午頃、一舉三尖泡より、五家子を奪還した中隊は、大隊の豫備となつて同部落の後端に待機、やがて晝食の頃なりけん沼崎は例の如く飯盒を持つて來て呉れた。大して腹も空いてゐなかつたが、蓋を開けてまさに箸をつけんとしたら、イキナリ背後から「誰だッ飯を喰つてる奴は」と喚きながら、肩越しに予の飯盒を取上げた狼藉者。何奴かと振向けば「如何、先輩の某旅團副官殿「貰つて行くぞ」とばかり飯盒を抱きて一目散、ポカンとした

自分は、狐につままれたやうに何が何だか譯が判らん、亂暴な人だと思つた位で忘れて仕舞つた頃、旅團副官今度はニコ／＼とウキスキーの小瓶を片手に「失敬、お禮に一盃全く一盃だけだが閣下からだ」と注いでくれた。

ミシチエンコ騎兵團の爲めに、全く背後連絡線を蹂躪されて補給が断たれ、糧食は勿論辛うじて彈藥は決死隊に依つて若干補充された。旅團長閣下も昨日の晝食から重焼パンばかり、かゝる場合にブーンと云ふ米の匂を當てに探しに來たのが先刻の騒ぎだつたのだ。

私の頭にブーンと來た、中隊長も同様パンを嚙り、沼崎はどうして米を持つてゐるだらう。考へて見れば携帯口糧は未だ使用を許されて居らぬ筈だ。若しや禁を破つてゐるのではないかと早速彼を呼び「携帯口糧を使つたか」と叱責的に訊問すれば彼はキョトンとして唯一言「使ひません」と併し疑ひは解けぬ。背囊は彈藥その他で餘分の米など容る筈はなし、雜囊なら知れたもの、ハテ怪しやと分隊長に命じて彼をそれとなく監視せしめた。

夜半頃うつらく／＼として居ると、先に分隊長が「小隊長殿分りました」と。

戰場は夜と共に靜寂に代り、犬の遠吠えに交つて時々銃聲を聞くのみ、今友軍の歩哨線を越えて、腹匍ひしつゝ敵方に忍び寄る一日本兵、匍しては窺ひ、伏しては四方に心を配る、歩一步、此所は彼我對峙の中間地帯、會戦の前々日警備中の後備隊の一部が突然砲を有する數倍の敵に急襲され、この附近には友軍の屍が未だ收容されずに横たはつてゐるのだ、やがて戦友の屍に近寄つた彼は、ソツとその背囊を漁つて米袋を探し當て、徐かに再び匍伏しつゝ味方の陣營に、何喰はん顔をして歸つて來た。

嗚呼、知らざりし知らなかつた。毎食温き飯盒飯は、何んぞ計らん、上官を思ふ彼が、決死の獲物であつたとは、思はず目頭が熱くなり、心の内で沼崎を拜み、その日以来斷然二食主義に更め、今日に至つた由來は右の通り。

星霜移りて爰に三十幾歳、昭和十四年の夏、筆者は軍刀報國の旅で、久し振りに岩手縣下を巡歴する事になつたので、沼崎の事を思ひ出し不覺彼の住所は忘れ

だが、宮古町附近には間違ひないので、分會長や警察署長に豫め依頼して宮古町で面會の願望を彼に傳へて貰つた。やがてその日が來た、昔の面影その儘の彼は水産學校に在學中の長男を伴なつて十里の道を訪れた。互に暫くは言葉もなく、夜更くるまで盃を交はして語り合つた。實に百振の軍刀よりも、筆者にしてはこの再會が千金の値であつた。波安かれ三陸の海、幸多かれ宮古の灣、心から彼の前途を祈つた。

三 脈 之 法

某少佐は熊本の士、奇矯の名全軍に高く、就中大の悪食家？「世界に食用にならぬものは蜘蛛のみ、蓋し彼は腹中に網を張るが故」と、かうした調子で、黒溝臺會戰前は兵站司令官として待命中であつたが、戦がしたくて矢も楯も堪らず、煙臺の總軍司令部に赴き、縷々當面の情況を報告し、更に進言して曰く、予に砲二門を與へよ、背後連絡線は絶對安全なりと、果して實行されたか否やは知らぬ

が、陣中の一つ話だつた。少佐は間もなく第一線の大隊長として、先に屢々述べた老大隊長が、蘇摩堡で壯烈なる戦死をせられた後任として漸く本望を遂げた、少佐の身邊は傳家の愛刀以外は悉く露軍よりの分捕品のみだつた。軍馬・鞍・外套は云ふ迄もなく、圖囊・水筒・長靴悉く然りであつた。大隊長となりて渾河を隔てて近く敵と相對するや、我歩哨と敵歩哨の交歡が始つた。某高地あり、晝間は我軍之を守り、夜は撤退して露軍の歩哨と代る。最初は繪葉書・新聞・終には露助が置手紙して煙草の無心、某日少佐は豫て敵と約束やありけん、自ら出馬、某砲兵大尉を兵卒に化けさせて之を隨へ、彼の將校と會見せし事すらあつたが、後から師團から禁止せられたとか、兎に角風變りの古武士で、名を揚げなくとも、當時の陸軍に勤務せし位の人なら、ア、彼かと、誰でも分る程有名の奇行家であつた。自ら一刀流の劍客と稱し、勇敢無比、彈丸雨飛の散兵線をノコノコと平時の檢閲官の如く見廻つて、神色自若、部下悉くその豪膽に服す。蓋し少佐は夙に禪門に歸依して毎朝三脈の法を行ふ。三脈とは、頭と頸と手首の動脈に指を當て

て脈をはかり、三脈その調子が同じければ、絶対に傷つかずとの堅き信念を有つて居られたのだ。だから朝の三脈に異状なき限り、少佐は死に對する何等の危懼を感じられなかつた譯だ。

奉天會戰に例の如く、悠々戦線を指揮中、一彈少佐の大腿部に盲管す。傷は大した重傷と云ふ程でなかつたさうだが、寸前までは鬼神を凌ぎし大勇者とは打つて變つて、顔色蒼白、死せるが如し、餘りの差異に人々皆怪しむ。蓋し少佐にとつて傷手の苦痛や生命の如きは問題でなく、絶対に信じて居つた三脈の覆へされた、信念の動搖であつたらう。沼崎從卒の金比羅明神のお告げと相對照して信念の前に不可思議の力を感ぜずには居られなかつた。

戦場の紫煙

師團は愈々出征、約一ヶ月大阪に滞在、日夜腕を撫して心は滿洲に、閑があれば、日清戦争の老武者から種々の武邊談を楽しみに夜を更かした。某大隊長は名

だたる勇將、胸間には憧れの殊勳甲の功四級、千軍萬馬の古武士、一言一句金科玉條、その内に「煙草好きは必ず葉巻を携行せよ」と、その何の故たるを怪しみながら、四、五本の葉巻煙草を背囊に入れた。

時は一月二十七日、黒溝臺大會戰の最左翼五家子北端の散兵線、僅かの畠の畦を利用し、約八百米を距てて頭泡の既設陣地に據る敵と對す。この日朔風時に飛雪を交へ、可なり寒かりしも、時々時間に日向ぼつこ然として、ポツン／＼と射撃を交換す。而も敵砲兵はこの方面に友軍砲兵の配置なしと見て傍若無人の跳梁、戦況毫も進展せず、所在なさの小隊長、煙草を出してマッチを擦れども中々點火せず、少し焦れ氣味になりつゝあるや、傍の從卒氣をきかして擦り寄り兩人協力してヤット一服の甘さ、だが一本ばかりの紙巻、忽ちに吸ひ盡きんとして、不圖思ひ出したは背囊の葉巻、「之れだッ」と叫んで急ぎ取出して再び之に吸ひ付けてフーツと紫煙一朵、悠然たり?!。之を眺めし部下の氣持はどんなだらう。「戦鬪悲惨ノ場合ニハ指揮官ヲ仰ギ見ルベシ」とは當時の歩兵操典にある一句、葉巻

を手にして、紫煙ゆらく、内心は兎も角、外形上の悠々たる態度は、如何に力強さを部下に與へしやは、小隊長自らも、時々、不動山の如き我中隊長の泰然たる指揮振りを仰ぎ見て、非常に心強かりしと思ひ合はせて、出征前の老大隊長の用意の周到さに敬服させられた。

報 告

斯くして黒溝臺大會戦が切つておとされたのであつた。時は明治三十八年一月二十四日の夜、支那の舊正月を樂しみに、オンドルの温さに夢圓かなる夜半過ぎ、大隊本部の傳令に起されて、目を擦りく、大隊長の許に行くと、本部は何んだかザワ／＼と大混雜、例の閻魔のやうな目をギロリとさせ口早に「中尉任務を與へる」と息を切つて、偕て「黄蠟蛇子は薄暮敵に占領せられた、大隊は同方に出動する、中尉の小隊は可成早く出發して五家子を占領して主力の前進を掩護せよ」と云ふ趣旨で、更に黄蠟蛇子を守備せる友軍は或は全滅したかも知れんと附け加へられた。

直に警急集合して、一足お先に、この獨立任務に欣び勇み雪を蹴つて修二堡の宿舍を出發したのは午前三時頃であつたらう。一氣に五家子に到着した頃は、ほの／＼と明けて、漸く視界も利いた。望遠鏡で遙か彼方の渾河河畔を望めば斑雪點々人馬の影もなし、命令は五家子とあるが、この情況では寧ろ黄蠟蛇子の中間にある頭泡を保持するが有利と判断して一分隊を主力との連絡を兼ねて前五家子を守備せしめ主力は頭泡に進入した。この部落には以前我後備隊が居つたので部落の四圍には立派な散兵壕が築かれ、絶好の據點を成して居る。先づ一と息と頭泡占領の第一の報告を送り、朝食をすました。が當面の敵情は一向不明だ。この附近は屢々地形測圖をしたので、云はば熟地であつた。そこで自ら黄蠟蛇子方面の敵情ヒョツとしたら友軍と連絡が出来るかと考へて、主力を最も信頼せる某軍曹に託し、五、六名を連れて同村差して一直線に畑の中を急いだ。約一里も行くと前方より我騎兵が唯一騎駆歩で通り過ぎんとしたので、呼び止めて情況を聞いたが奴さん餘程急いでゐると見えて、「味方は全滅、前には敵が居るぞ」と云ひ捨てて疾驅

し去つた。呆氣にとられて、急ぎ望遠鏡を取り出して目の先の黄蠟蛇子を見ると、
コハ如何に敵の砲門が一ツ二ツ三ツ四ツ、ズラリと砲口を我に向けて布陣してゐる、距離は僅々千米位、素破大變、五、六名の部下を大間隔に散らせ、心を静めて凝視すれば、部落内には相當の露兵が右往左往するのがよく見える。更に目を左右に轉ずれば、渾河河床には大部隊が充滿してゐる、最早之れ迄と、直ちに踵を返して頭泡へ一目散、ホツと一息あと振返れば、敵は未だ前進の模様なし、大隊長は五家子に到着して居るとの事で、大急ぎに駆けつけた、大隊長は關帝廟の土壁の上から、各中隊長を集めて作戦を練つて居られた。鬼の首でも取つた氣勢で、「黄蠟蛇子は少くも砲四門を有する敵の大部隊に依つて占領せらる」と息せき込んで報告すると大隊長は語氣を荒げて「大部隊では判らん、野外要務令を知らぬか」と大喝された。野外要務令—今の作戦要務令—ニハ敵ノ兵力ハ千トカ二千トカ數字ヲ以テ現ハス事ヲ示シテアル。ぐつとツマつて二の句がつけぬ、脱兎は今や處女の如く、目をパチクリ、だが成程大部隊には相違無いが、大隊長から斯

く云はれてみれば頗る曖昧だ。苟も將校斥候として報告の體をなさぬ。が、如何せん、ズラリ並んだ砲門に先づ度膽を抜かれた形で、精確なる兵力の算定をする餘裕を持たず、又、實際數字的に數ふことは難事であつたが、辯解も出來ず、ハイと云つたきりで頭を下げた。すると大隊長は冷笑氣味で、「渾河の柳と間違つたんだらう」と皮肉の一言、思はず拳を握つて「ソナ事はナイ」と血走つた目で大隊長を睨んだ。その時傍で一心に望遠鏡を以つて視察して居つた某中隊長が「居る居る」

一同ドヤ／＼と大尉の指す方を凝視すれば、ぼんやりと薄黒く一連の柳の木と思はれた影の隙間が、だん／＼東の方へ移つて行くのが全將校の目に映じた。居るぞ居るぞと皆片唾を飲んで目を張つた。紛ふかたなき雲霞の大軍だ。この時位嬉しい事はなかつた、周章者と罵られた時の無念に引換へ、何んと朗かであつたらう。すかさず「大隊長殿、兵力何千ですか」と流石の大隊長も、ウーンとばかりムニヤ／＼……。

第八師團の黒溝臺攻撃最初の命令に……混成一旅團を下らざる敵は……これが大隊長の報告の敵兵力判断其の儘だったのだ。

寶丹の功德

黒溝臺會戰の序幕一月廿五日の夜の出来事だ。大隊は師團命令に基き頭泡を撤退して、舊駐の修二堡に歸還する事になつて、予の小隊は、三尖泡に止まつて敵と接觸を保持すべき任務を受けて途中に残された。夕闇に乗じて渾河を渡つた敵は續々と前方の五家子に進入して、やがて炊爨も始つたらしく、その斥候も頻繁に出没した。小隊は敵若し優勢を恃んで夜襲でもやつて來たら、一泡吹かして呉れんと村の端の土壁を高くめぐらした一獨立家屋を占據し、門を閉し、圍壁に銃眼を穿ち、死なば諸共と、決死の臍を定め、嚴重なる守備を堅め、斥候を放つて一意五家子の敵情を偵察したが、敵の兵力判断がつかなくつた。蓋し敵の警戒頗る嚴重、部落に侵入するのが至難だったのだ。從卒の眞心籠めた夕食を食べてる

ると、巡察から歸つて來た某軍曹が、部落の中央邊の一家屋に支那人が残つて居ると告げた。三尖包の部落は四、五十戸もある可なりの部落だが、住民は悉く他へ避難して空っぽだったが、之は怪しいと自らその軍曹を伴つてその家に行つた。成程奥の一間に人の氣配、戶外から傭々と呼んだら、稍してから暗闇から、一人の壯漢が恐る／＼出て來た。片言交りの怪し氣な會話が交されたが、結局母親が病氣の爲め逃げる事が叶はず、兄弟二人だけ残つて看病してゐると云ふ事が分つた。その部屋にツカ／＼入ると、成程一人の老婆が煎餅蒲團にくるまつてウーンと呻つてゐる。色々と話した結果、急に腹痛を起してゐるらしかつた。勿體振つた様子をして、天下の名醫氣取りで、脈を探り、額に手を當て熱を計りなど宜しくあつて、徐ろに傍に心配氣に見守つてゐる兄弟に「心配するな、今直ぐ神藥で治してやる」と恭々しく懷から取出した守田寶丹、水を容れた茶碗の中に、わざとらしく小首傾けつゝ極く少量を浮ばせて「之は日本の神藥だ、如何な難病でも立ち處に治る事疑ひなし、有難く服用せよ、夢疑ふ勿れ」と嚴かに云ひ聞か

せた。兄弟は双方から病人に勧めた、老婆はやがて苦し氣に少し起きあがつて、瞑目してグツと呑み下した、一分……二分……ジツと見守つてやるとアラ不思議神藥の利目は靦面、今迄呻いて居つた重病人はバチリと目を見開き謝々シツクといふ。腹痛が止つたのだ。

急造博士は徐ろに咳一咳「神藥の効果はこの通りだ、最早心配なし、此所は危険だから早速安全な地へ避難せよ。念の爲め若し又悪くなつたら之を與へよ」と少しばかりの寶丹を紙に包んで預けてやつた。兄弟は手を合はせて感謝の誠を面に表して「大人多謝々々、何か御禮を差上げたいが御覽の通り何も持たぬ許して呉れ」と心から詫び、「何んでも御用があつたら、兄弟の力で出来る事なら仰せ付け下さい」と頻りに有難がるのがいかにも眞實であつた。そこで不圖頭に浮んだのは五家子の敵情だ。

「さうか、折角だから云ふが何うかな五家子に行つて露助を見てこんか」と勧めると、二人は母と共に何やら頻りと相談して居つたが、やがて覺悟を決めたらし

く「行つて來ます。而し兎に角母を隣村の親類に頼んで來てから間違ひなく大人の許に行くから待つて居てくれ、決して嘘を申さぬ」と幾度も頭を下げて頼むのであつた。たつて今直ぐと云ふ譯にも行かぬし、さては奴等逃げるんだなど疑つたが、どうせ當てにもならん事だからその通りにさせた。然るに夜中にイン／＼二人が戻つて來たのだつた。私は思ひがけぬ彼等の正直に感心させられた。素より命がけの仕事だ、よく／＼恩に着たのであらうと思ふと不憚になつて、スパイに使ふ氣にならなかつたが、二人は誠意その物の如き様子で頻りに促すので、ソナナラと「然らば行つて呉れ」そして露軍の釜の數、兵は屋内にどの位入つてゐるか、露營してゐるか、大砲が在るか、馬の數等の數項目を示し、更に一杯の日本酒を振舞つた。勇躍した二人は、決心を眉宇に表しつゝ出かけた。約二、三時間も経つた頃二人とも元氣一ぱいで歸つて來たその報告は如何にも一々根拠があつた。自分は厚く待遇した、尙若干の金子を包んで與へようとしたが、頑として受取らうとせぬ。のみか、弟の方は御恩報じに今後も手許に置いて使つて呉

れとの熱望であつた。そんな事をするに及ばぬ、早く歸つて母に安心させよと諭しても、押し返して懇請するので、勿怪の幸とその儘弟は我等の陣中に止まつて、かひなくしく雑用に服しとても調法だつた。彼は引續き一ヶ月も「李々」と皆から可愛がられて、やがて厚く禮を述べつゝ母の許に歸つた。母を介抱して死の巷に止まつた孝子は、母の急病を治して貰つた恩に對し、身命を抛つに躊躇しなかつたのだ。嗚呼何んといふ尊さだ。惟ふに李兄弟は今も尙王道樂土の滿洲で天の恵みに幸多き世を送つてゐるであらう。

輕重本末

凱旋を前に我立見師團は、暫く遼河河畔に滞在して、歸還準備に忙しかつた。硝煙の匂から遠ざかり、而も休戰條約成立して將兵は、夢を故郷に走らせてゐる折だつたので、幾分氣分が弛み、師團の會報では、何時も軍紀風紀の緊張に關する小言ばかり絶えなかつた。憲兵の報告「何部隊の兵が、支那人から鶏を奪つた」

「西瓜畑を荒した」、「豚を買つて代金を拂はぬ」……初めの間は師團側も、かゝる報告を實例としてその都度警告を發し、處分を受けた兵も尠くなかつた。勿論火の無い煙は擧らないだらうが、支那人側の告訴をその儘に、針小棒大に類する事が多く、隊側では憲兵の態度に不快を感じたけれども、受身の悲しさで泣寝入り。得たり賢し？とばかり憲兵の摘發は愈々峻烈を昂め、中には凱旋を直前の勇士が、つまらぬ犯罪で、刑法處分になつた者も出來た。某會報があつた。例に依つて憲兵は微に入り細に互る摘發、黙つて聞いて居た由比參謀長は、隼の如き眼をかつと光らせて、堪り兼ねたと云つた風に、ジロリと憲兵を睨んで、大喝一聲「支那人大事か日本兵大切かッ」と集つた副官連中期せずして破顔「ザマ見ろ」薬も利き過ぎては毒、特に爲政者の參考に供したいと思ふ。

姑息の機轉

奉天會戰各師團にて、機關砲隊を臨時に特設した。今日の重機關銃隊である。

各部隊から特に歴戦の古兵を集成した諸兵種の混合で、一筋縄ではゆかぬ不敵者揃ひで、予は最新參の中尉で、士官學校で習つた兵器學が、未だ新しいと云ふ位の意味で、その小隊長となつた、分隊長は皆後備に近き老下士官、若輩には聊か重荷であつた。而も滞留長期に互り、間もなく平和克服、凱旋の待機、軍紀風紀の維持には各隊共中々の苦心であつた。

夜半將校宿舎に、支那人が何やら頻りとわめきつゝ訴へに及んだ。幸ひに同室の軍醫は日清戰爭に従軍した事のある老練の人で、隊中では一番支那語の達人、先生の通譯により、大體の輪廓は分つた。即ちその夜その支那人の家に日本兵が侵入して狼藉に及んだとの訴へである。被害者は是非大人に現場を視て呉れとせがまれるので、止むなく行つて見た。落花狼藉歴々、不幸にも檢證は之を認めぬ譯に行かぬが、自分は頑として、我隊の兵にあらず、多分別の部隊の者ならんと押付けんとしたが、支那人は明瞭に某軍曹及び某宿舎の誰々と指定して肯んぜぬ。某軍曹は山羊鬚の仇名を有する酒飲みの、ズベラを以て鳴る他の小隊の分隊長で、

この位の事は仕兼ねまじき男、犯人は十中十まで断定しても差支へなき程であつた。がさて、黒溝臺以來の勇士、凱旋も間近き今日、之を正々堂々と軍律を以て臨むべきや否やに突嗟の判斷を迷うたが、訴人の手前なんとか罎をつけねばならず、兎に角今より全兵員を不時呼集して取調べると申し渡して歸舎した。「中立國たる支那人に對する軍の面目」、「歴戦君國に功績を樹てた勇士」、さてどうしたもんだと思案投首、かゝる間に老軍醫はニコ／＼と外から歸つて來て早速獻策して曰く「早速不時呼集をなし、被害支那人に一々首實驗をなさしめて犯人を定めんと予は愕然として叫んだ。「駄目々々、指名されたら何んとする」落着き拂つた老軍醫は確信ありげに「マア／＼私に任せよ、仕上は流々」とばかり何やら支那人に説き聞かせ居つた。判斷のつかぬ未経験輩に名案の出る筈はなく、老練の軍醫の意見に任する事に有耶無耶の裡に黙認してしまつた。

夜暗の寂寞を破る不時呼集の喇叭に素破とばかりに夢驚かされて、何事ならんと集合場に驅けつけた兵、集合終るや愈々被害支那人の首實驗が始るのだ。自分

は目を閉ぢて、恐るべき悲しむべき事件の暴露を覺悟しつゝ、件の支那人を隨へ、一人々々提灯を突き付けて點檢した。ところがなんとした事か、山羊軍曹その他容疑者と目せらるゝ兵は、列中に見當らぬではないか、突嗟に自分は、老軍醫の工作の總てを合點した。サア斯うなると急に強くなる。支那人に向つて威猛高に成つた。

「犯人は居るか」支那人は何事か囁きつゝ、小首傾けて奇怪顔。

「貴様は不屈の奴だ、我隊には斷じてソナナ惡事を働く兵は居らん。多分他隊の者か、又は怪しき輩の所爲だらう。論より證據、貴様の見覚えがあると云ふ者は見付からんではないか、人騒がせをさせて怪しからん。以後慎め」とばかり突つ放した。事件はかくして結局被害者の泣寝入り、罪な話だ。

風紀上斷じて許すべからざる犯行を、唯歴戰の勇士を庇ふ姑息な愛情に依りて、見遁した隊長としての自分の處置は、軍隊統率の本義を紊る者として一言辯明の餘地はない。今日と雖も懺悔汗顔の念に堪へぬ。山羊軍曹はこの事ありて以來生

れ變つた如く、酒も慎み、素行も治まり、凱旋錦衣、立派に歸郷した事を附記して置く。

慰問袋

陣中の慰問袋の有難さ又楽しさは、恐らく一度經驗した者にとりては、一生忘れ難い思出であらう。今と違つて、日露戰爭當時は、その數が甚だ少かつたやうだが、戰鬥が一段落を告げ、次の會戰の準備中などは、誰でも首を長くして慰問袋に待ち焦るゝのであつた。確か奉天會戰後だつたと記憶する。久し振りで慰問袋にあり付いた。さて之を開く迄が又何んとも云へぬ楽しみ、東京市……島津千鶴子……どんな美しい令嬢だらう。歳は十八か二十か一人娘だらう？……何が入つてる？等々、それからそれへと、夢の如き憧憬を追うて徐ろに、袋を開けた。ハンケチ、紙、繪はがき、出た出た。乾鮑貝柱、海苔佃煮……最後に奉書の白紙に、丹念に包んだ中から、丁字油と、打粉―軍刀の手入道具―何んと云ふ奥床しい

贈物だらうか、その家庭も偲ばれて、氣高い清楚鶴の如き千鶴子姫を心に描きながら、早速愛刀關兼信の鞘を拂つて純白の奉書で一拭、丁字の香、心自ら淨きを覺えた。青森に凱旋してその後千鶴子の君を訪るゝ機會とて無かつたが、今頃は……。

非人情

敢て生還を期しなかつた衛戍地に、凱旋した翌日、暮夜に小隊長として、生死を共にと誓つた某特務曹長の遺族を訪れた。何んと慰めて良いか、唯モチ／＼するばかりだつた。生けるが如き英靈の寫眞を前に、二人の遺兒を擁する未亡人に、壯絶無比の戦死の状況を御傳へなどした。その後某日未亡人が來られた。要旨は、故人の賜金扶助料の問題だつた。

故人は秋田縣の出身で、徴兵より下士志願をして累進した者で、實家は父親夙に没し、長兄相續し、故人は勤務地に於て夫人を嫁りて別に一家を成し、經濟的に獨立し、出征前は長兄と意志合致せず、殆んど無交渉の状態であつたが、戶籍

は尙實家に在り、加之如何なる譯か、未亡人は正式に入籍の手續をせず、所謂内縁の妻となつて居た。處が秋田の實兄は名譽の戦死をした未亡人の切なる反對を押し切つて、郷里で本葬をなし、賜金扶助料は一切法規上の資格者たる實母が頂く事となり、未亡人には鏹一文も呉れぬ。サア困つたのは未亡人だ、素より蓄財とて少く、唯一の夫の俸給は戦死と共にピツタリ無くなり、二兒を抱いてその日に困つてゐる、と云ふのであつた。

尤も千萬な話、血に燃ゆる青年士官は、没道義の實家の措置に極度の義憤を感じ、前後の思慮もなく、唯一途に非人情なる實家の非行を糺弾すべく、日曜を利して秋田縣の田舎に赴き、早速戸主たる故人の實兄に面談し、單刀直入その不心得を責め、恩賜金扶助料の全部を未亡人に交付すべく、言葉荒らゝに勸告したものだ。ところが先方はテンデ相手にもせず、恩給法の規則一點張、空嘯いてコノ青二才がと云つた調子で、相撲にせず、サア斯うなると青年士官、振上げた拳のやり場がない、今日となつて見れば、何んとか妙案もあつたらうが、ソナ餘裕

などなく、今に見ろとばかり、憤然席を蹴つて、その足で村役場に至り村長に萬事を傳へて、哀れなる戦死者の遺族を、非道より救ふべく依頼したが、老練の村長一向要領を得させず最後には、その兄と云ふのが三百代言の様な男で、とても村長サンの手に負へず、加之恩給法に明文ある事なれば、親族間で處置するより策なしとの一言、萬事休焉。聯隊區司令部にでも頼んだらよかつたらうが、世間の事は何一つ知らぬ青年士官には、そんな智慧も出なかつたので、途方に呉れて仕舞つた。せめて當時の中隊長か、故參の小隊長でも居られたら、何の苦勞もなかつたのだが、生憎誰も相談すべき人もなく、氣の毒ながら氣をもむばかり、幸ひに同市の富豪の息で、一年志願出身の中尉が居つたので、その人に事情を具し援助方を懇請したところが、非常に同情せられ、同氏の貸家に引取り、何かと世話になる事になつてホット一と安心した。その後心に掛りながらも祿な面倒も出來ず、轉任又轉任、聞けばその後同市に居らず、他に轉住しその儘今日迄無消息だ。

この種の紛擾は敢へて珍しからぬさうだが、當時純眞なる青年士官は、この時は

ど義憤を感じ、實家の非人情制度の不備を啣つた事はなかつた。幸ひにその後恩も實情に合する如く改正せられ、この例の如き悲惨な遺族も無くなつた事は、心から欣幸とするが、併し今尙賜金をめぐつて目を掩はしむるやうな近親争ひがその跡を断たぬ事は眞に國家の爲め痛嘆に堪へぬ。何んとか方法がないもの？金が仇とは何んと淺ましき限りにあらずや。部下を戦場で失つた者には、これ程悲痛な悩みはない事は體驗者の均しく感ずる所であらう。

除隊悲話

今は昔、除隊兵は、満期歸郷の際、夫々多大の土産物を準備するの悪風が熾んで、當局は百方手段を講じて、之を是正せんとしたが、中々矯らず、果てはその筋の取締の目を免れんが爲め、衛戍地外に於て購入するにすら至つた。貧者も富者も夫々の悩みに、除隊兵の心を陰鬱にする事頗る多く、秋季演習後は、殆んど除隊兵は之に没頭するといふ風だつた。之には入營の節の餞別に對する仁儀も與

つて力あるので、之が廢止と併せ、市町村長に呼びかけ、郷黨の申し合せの形式で除隊兵に之が謝絶の文書を送つて來る迄に、色々の手段を運らしたが、根絶はむづかしかつた。筆者が、初めて中隊長として、朝鮮駐屯時代にも色々除隊兵にその惡風を一掃さすべく努力したが、一面絶對廢止と云ふ事は、却つて醇朴なる風習に背くやの懸念もあつたので、要するに餞別に對する返禮及び留守中に世話になつた方に報謝の意志表示が出来れば宜いといふ考へで、一切平等手拭一筋と云ふ制限を定めて、之が實行を要望した。が、東北地方の長い間の慣習は、容易に之が徹底は困難であつたが、先づ除隊兵中の家庭富有の兵を一々呼んで、率先範を垂れん事を訓諭した。蓋し一旦入隊せば貧者もなければ富者もない。本人の家庭を熟知してゐる者以外には、たとへ乞食の息子でも、一切不明なのだ。従つて人情の弱點として、誰でも貧乏人だとは自己宣傳をしない、だから甲は手拭を何百本準備したと云へば、自分は十本で澤山だと超然たり得る意志強固の者は尠い。之等の微妙な心理状態も手傳つて、軍隊の幹部も對策には腐心したものだ。

中隊では兵卒に來る手紙の數を統計的に作表して、訓育の一助として居つたし、殊に除隊前は色々の出來事が生じ易いので、殊更來信には注意を倍獲した。偶々中隊長が事務室に行くと、特務曹長が例の如く來信を調べて居たので、何心なく澤山の「はがき」を手にして點檢してゐる内に、赤貧洗ふが如き家庭に育ち、殆んど父兄より手紙など來た事の無い、某兵宛の一枚が目にとつた。小學校の生徒が代筆した様な金釘字の、父親からの便りで「除隊土産の金は〇〇(妹の名)を奉公にやつて送る」との意味であつた。瞬間中隊長の顔色が、ハツと變つた。その地方の方言で娘を奉公にやると云ふ事は、娼妓か、酌婦にすると云ふ意味なのだ。中隊長は一瞬奈落の底へ突き落された様に暗然とした。嗚呼何たる悲劇であらう。樂しき息子の除隊を迎ふる麗かなるべき家庭に、何んたる事だ。之は早速處置せねばならんと考へ、スグその兵を密かに中隊長室に呼んで、事情を訊いたら、彼は畏る／＼之を肯定した。今更叱る勇氣もない「お前の親から中隊長の所に爲替が届いた、入用の節は何時でもやるから安心せよ」と告げ、ハガキは秘して置いた。

早速郷里の村長に電報して、金は出来たから娘の奉公を止める様に依頼し、必要の金は特務曹長から、本人に渡させた。

嗟吁、娘を賣つて息子の除隊土産を買ふと云ふやうな事を、自分の部下から、マザ／＼と見せつけられた中隊長の心中は如何、何にも知らずにイン／＼と特務曹長から金を受取つて歸る彼の姿を見ると、憎いどころか、いぢらしさに眼を伏せず居られなかつた。

黄州 林檎

朝鮮は云ふに及ばず、内地でも、近年朝鮮林檎の進出が著しく目につく、その中心産地は實に京義線沿線平壤の南方の小邑、黄州附近である。明治の末期、筆者は弘前師團に勤務し、青森縣出身の部隊の中隊長として、實にこの黄州に二ヶ年間駐屯した。黄州は黄州郡の首都といふものの、微々たる一小邑に過ぎず、休日に兵卒の娛樂として何等の設備もなく、兵舎は勿論朝鮮家屋の改造した例の蟻塚式の

舎内で、蓄音機を聴く位が關の山であつた。某日同地の片倉組の農場支配人が來訪して休日に兵隊さんを貸して下さいと云ふ怪しからんことを申す、一體兵隊を貸して呉れとは何事だ。

支配人の語る所に依れば、片倉組で黄州附近に數百町歩の土地を所有し、數年前某技師から林檎栽培の好適地だと折紙附けられたので、早速之を實行したが、さて之に従事する人達は林檎の樹を見た事もなき者ばかりで、手入れもせずに今日に及び、若干宛は收穫がある程度に過ぎなかつた所が、兵の中には郷里に於て、實際林檎園を經營して居る者も澤山あるので、休日には久し振りに懐しい林檎の樹を眺めて思ひを故郷に走らせて、異郷の鬱散うさばらしといった氣持で、チヨイ／＼その林檎園を訪れて、何くれと栽培上の談議をするといふ事が判つた。ソコで支配人は之が指導を頼みに來たのであつた。之は面白い事だ。休日なら別に何等隊務に差支へないので、早速調査したら、相當見込があるとの事であつたから、決して酒色等の振舞をせぬ事と、結果に就きて何等の責任を負はぬとの條件付きで、之を

應諾し、適任者若干名を選んでこれに當らせる事にし、支配人は大喜びで歸つた。自分も時々散歩がてらに見に行つた。指導者は十二分の自信を持つて、先づ病樹を悉く伐倒して徹底的に消毒を施し、次いで枝の剪定をなし、肥料をやつたりして、全然面目一新程度に改良を斷行したのであつた。

春になつて、開花から、袋掛けなどに至る迄實際的に指導した効果は靦面、秋には今迄見た事もない累々たる美果が、支配人達を有頂天に満悦させた。これに氣を得て大擴張を企て、支配人の熱望を容れ除隊兵三名を管理人として、農場に服務さす事にした、これが實に今日黄州林檎の土臺をなしたのだ。黄州に残した兵もその後年々美果を送つて呉れたが、轉々の間今は何んとして居るやら。

朝鮮を旅行して、汽車の窓から、黄州附近一面の美事な林檎園を眺める毎に、なんとなく我事の様嬉しい感じがするのだ。昔野中兼山が土佐の蛤の親だつた事など思ひ浮べて、筆者の一世に、假りにも直接生産に役立つた事は恐らくこれが唯一の物であらう。と思ふと悪い氣持はせぬ。

不 良

その年入營する新兵の名簿が交付された、係の將校と特務曹長(今は准尉)とが、微に入り細に涉つて、調査をして、先づ入營以前に、大體の個人の身許を承知して、班の編成やら、助教、助手の配當やらその他萬般の準備を整ふるのだ。その内に〇〇といふ兵がある。青森市内の出身で、母一人の手に育ち、現在は荷馬車轆きとして、赤貧の家庭、而も若い癖に飲む、博つ、買ふの三拍子揃ひ、勿論警察の厄介になつた事も度々、町内の嫌はれ者で、母親もホト／＼持て餘しの不良兒と云ふ調査で、新兵係將校も呆れるばかり、ソコデ早速母親の許に、助教たる某軍曹を遣はし、色々と本人の將來に就いて相談させたが、母親は涙を流してただ申譯なしの一點張。軍曹は色々と隊の實情を話して、決して心配するな、必ず美事に改心させて立派な兵士にしてやると懇々と慰めて來た。

愈々十二月一日の入營日に、彼も流石に欽然として一同と共に愈々中隊の一員

となつたが、何處となく沈んで自棄的の氣配さへ窺はれた。加之身體検査の結果は、彼等のお定りの花柳病の持參だ。中隊長として係の者には決して入營前の彼の行狀等を口外せぬ事を命じ、一方脱營を警戒させ、先づ孝道を教へた。

第一期は事なく濟んだどころか、相當に緊張して眞面目に努力し、教官も助教もホツト安心の態だつた。やがて第二期に入るや、休日には必ず外出させて母親を訪ねさせた。僅かばかりの軍事救護より外にこれと云ふ収入が無いので、母親の手許は可なり窮乏してゐる事は明瞭だ。ソコで班長は、彼の受ける給料の内から若干なりと休日毎に母親に貢ぐ様に指導し、彼も酒は廢め、煙草も儉約して給料の大半は之に向ける事が出來た。中隊長は一日彼を私宅に招き、色々と訓諭をし、且つ好きな酒を遠慮なく振舞つて大いに激勵してやつた事もあつた。

彼の心には漸く改悛の萌がさして來た、ソコで休日には早朝より辨當携行で家に歸し、入營前の馬車轆きを働かせて家計を助けさせた。最初彼は軍服の手前聊か逡巡の様子だつたが、親孝行のための馬車轆きなら、軍服姿も決して恥ではな

い、堂々とやれ、但し帶劍は、馬車追ひには必要がないから遠慮せよ、若し萬一憲兵が咎めたら之を示せと許可證を與へ憲兵とも連繫をとつた。

母親は、僅かの田を小作して居た。班長は彼の戰友の有志を連れて、彼と共に田を耕し、田植を手傳つて、殆んど母親の手を煩はさずに終つた。田植の濟んだ夜であつた。偶々中隊長は週番司令として、營内に在つた。消燈後營内を見廻つて、某洗濯場に近づくと、誰か眞暗の中で、ゴック／＼洗濯をしてゐる兵があつた。よく見ると彼であつた、田植で汚れた衣物を班長、戰友の分まで、ソツト持出して洗つてゐるのであつた。中隊長の眼は濕んだ。直立不動の彼の肩を撫して「よくやつた、ソレこそ日本軍人だ。中隊長は嬉しいぞ」と。

除隊後の何かの便利になる様にと彼を靴工卒とした。そして中隊長の從卒として使つた。その頃の從卒といふのは一種の名譽であつて、品行方正勤務勉勵の優秀なる兵を充てるのが例であつた。中隊長の從卒にする様に特務曹長に命じた時に流石老練の特務曹長も目をバチつかせて「彼をですか？」と呆然とした程であ

った。

斯くして札付の不良兒も、立派に二年間の御奉公を済ましてめでたく満期除隊をする事になった。彼は新装の軍服を着て、その翌日母親と共に、尺餘の鯛を携へて中隊長を訪ね禮を述べた。母親はたゞ涙の挨拶であつた、心盡しの鮮魚の味に、その日の晩酌は、心ゆく迄中隊長を蕩然たらしめた、實に美味かつた。

用意周到

静岡の大火で思ひ出した、大正の初期青森市が殆んど全焼した事がある。

恰度一同は將校集會所で晝食を終り、部隊長から何か御話があつた時、衛兵司令から、唯今青森停車場方向に火災起りつゝありとの報告があつた。當日は西の風相當強く、火元が市街の西端とあつては、これは大火になると誰もが豫感された。早速消防中隊を急派し、その他は待機と云ふ事になった。火は烈風にあふられて白晝の事として、白煙黒煙の間から紅蓮の焰が低く猛烈の勢を以つて、東へくと

嘗め進む。部隊長は、決然として、大部の中隊に出動を命じ、自ら現場に乗り出した。途中まで行くと自轉車で隨行中の筆者に「官舎に行つて用算筒の古新聞を持參せよ、家内が承知してる筈」と今頃古新聞などチト變だと思ひながらその儘とつて返し、部隊長官舎に到りその旨部隊長夫人に取次ぐと、間もなく紙包の一封を渡された。部隊長は鐵道踏切附近に本部を設け、指揮に當つて居られたが、筆者の差出す紙包を取る手遅しと開封、中から大阪時事新報三、四葉、部隊長はジツと目を通して居られたが、やがて瞑想若干、構想に耽りつゝあるものの如く、我等は如何なる名案が出づるかと固唾をのんで見守つて居た。

西風は愈々猛威を昂め、紅蓮の炎は既に八方に擴がり、必死の消防も水道も既に用を爲さず、殆んど手の付けやうがなく、悲報頻々、群る避難者は、阿鼻叫喚の巷を右往左往、子の名を呼ぶ者、親と離れて呆然たる兒童、さながらこの世の地獄、劫火は惡魔の跳梁に任せ、今や市の大半を焼失し盡して止む所を知らなかつた。部隊長は決意を眉宇に漂はし大方針を示された。曰く「部隊は消火を中止

し全力を擧げて罹災者の救護に當るべし、但し縣廳及び師範學校は類焼せしむべからず」と。炎々燃え盛る焰を冷然と見送つて、次に來るべき事態に善處すべく斷乎消火主義を更め、決然として次から次へと何の澁滞もなく處理されて行く美事さ、傍にあつてこれを八方に傳達する筆者は、方に手が十本も欲しい繁忙裡に、恍惚として水際立つた部隊長の指揮振りに魅せらるゝのであつた。その處置の大要を紹介すれば

(一) 避難者の誘導、迷兒の保護、負傷者の陸軍病院收容、避難者に兵舎及び官舎の開放

(二) 炊出、施米、被服の貸與、被害地區の兵の休暇

(三) 通信網の恢復準備

これが爲めに斷乎全責任を以て戦用準備品を使用されたのである。この戦用準備品の使用の如きは極めて重大なる事で、餘程の決心と覺悟を要すべき問題に拘らず、部隊長は毅然として快刀を以て亂麻を斷つ概を示された。

さて本話題の核心は實に彼の紙包の古新聞にあるのだ。現れ出でた正體は果して何？ この古新聞は前年大阪未曾有の劫火の記事を載せてあつたのだ。火急の場合に臨み、部隊長はこの先例に依つて決心に有力なる資料を捉へられたのである。嗚呼この周到なる用意、綽々たる餘裕、まさに將たる所以はこゝにある。東郷元帥が常に「治而不忘亂」と訓へられた事を、今眼前に、敬愛する我部隊長から、實際に手本を示された譯で、百の戦術書を漁る以上に、適切なる修養であつた。

餘談、當時の上級兵團長もその日の夕方、漸く工兵隊を自ら率ゐて青森に來られたが、その時は驛―縣廳―市役所―部隊間の電話は、通信班の死物狂ひの努力に依つて、架設を終り、折角工兵科出身の上級團長の名案も聊か、案に相違の體で、部隊長が、獨斷戦用品を使用せし件を報告するや、語氣も荒々しく「何故認可受けぬか」と云はんばかりの見幕だつたが、電信・電話・汽車不通の状況中に、何の報告ぞ、冷徹透るが如き我部隊長はたゞ一言「責任は全部私にあります」と、傍に居る筆者の胸はスツと活々となつた程でまさに溜飲三斗といふ所だつた。果

然間もなく陸軍大臣から、大いに部隊長の機宜に適した處置を全面的に賞讃した電報が届いて大いに面目を施されたのであつた。

後年、筆者が滿洲事變に凱旋し、軍狀奏上の爲め東上の途中函館に在る時、偶々餘程火事に縁があると見えて、又しても夜半彼の函館の大火、暗黒の泥路を猛吹雪を冒して、重砲隊に驅けつけ、隊長にこの經驗談を傳へ、災禍に對する種々の進言、蓋し何等かの役に立つた事と思ふ。

非 實 戰 的

秋季演習も愈々兵團對抗に移つて、初日はお定りの遭遇戦に次いで我方の退却陣地占領と、統監部の計畫通りスラ／＼と進展して行く。演習の計畫は勿論極秘であるが、民間の宿舍準備や、觀兵式場の設備等々で、大體の輪廓位はほゞ推定せらるゝので、その夜は兩軍近く相對し、夜半乃至拂曉には、敵は退却を開始するだらう位の事は想像し得られた。當時我兵團長は演習開始以來、宿痾の胃酸過多症

で悩まれ、殊に二、三日前からは、激痛益々烈しく、我々は切に休養を御勧めしたが、頑として容れられず、依然指揮を續けられ、その夜も早く假の床に入られ時々呻吟の聲さへ洩らして居られた。そんな具合だから輔佐の任にある我々は、一層緊張努力し、今夜はきつと敵が退却するだらうとの假設の下に作戰を練り、いざといふ場合の追撃に關する命令案も出來、たゞ第一線からの報告を待つばかりの手配を整へ、準備オサ／＼怠りなしといつた有様で、電話機の傍でウツ／＼としてゐると眞夜中に、家人が電話ですと知らせに來たので、素破とばかりに受信器を耳にすると、某將校斥候長から、「敵は退却を始めその砲兵は唯今某市の中央を通過中にして、歩兵部隊も同時續々某街道を北進しあり」と云ふ豫想の如き明確なる報告、御座んなれとばかり、早速部隊に電話で取敢へず追撃を命じ、次いで筆記命令を下達せんと命令受領者を集めたところが隣室から將軍の聲「待テツ」今の報告は何處から來たと「實は斯く／＼で獨斷で追撃を區署した」と申し上げたら、「追撃命令は、取消せ」との嚴命、何が何やら不可解だつたが、止むな

く再び受話機を口にせんとしたら、反對に第一線の某部隊長から、その部隊は既に獨斷追撃に移つたとの報告があつたので、その儘取消さずに済み、部隊は戦機を逸する事なく追撃に移つた。

將軍は既に起きて居られ、嚴乎たる裡にも例の慈眼を以て惇々として「將校斥候の報告内容は將に殊勳に値する。併し傳達に公衆電話を利用したのは非實戰的だ」と流石は將軍と感服しつつも、自分の淺薄な處置に、頭から冷水を注がれた如く、頂門の一針深く、骨味に徹した。

軍隊の平時訓練には、隨分この種弊害が、色々あつたが、この時の非實戰の一言が、筆者のその後の長き軍人生活に、如何に戒になつたかは申す迄もない。軍人は云ふに及ばず、一時の功名に驅られて、手段を擇ばざるが如き輩には絶好の箴となるであらう。

職責觀念

よく上司の訓示に信賞必罰を諭さる、ところが賞罰の適用は、中々むづかしいもので、軍隊に在りては、軍紀風紀、勸善懲惡、統御等々の諸要件が附帶して生ずるので、警察令違反一點張式に簡單には行かぬ。各級部隊長には夫々その職域に應じて賞罰の權を附與されており、部隊長は自己の全責任を以て、行使すべきで、敢へて他の容喙を許すべきでないとも云つて仕舞へばそれ迄であるが、中々さう簡單には參らぬが實情だ。甚しきは一々上司の指示を俟つもの、又は反對にこれを強ひる上級者も皆無でない。こんな事では信賞必罰も空念佛に過ぎざるのみか統御上由々しき問題だ。

某部隊に一兵卒の刑法違反事件が惹起した。反則の動機は頗る單純で且つ充分情狀の酌量さるべきもので、珍しからぬ事件であつたが、兎も角も、犯罰は明確に陸軍刑法の條文に抵觸せず一點疑義を挟む餘地は無い。部隊長は一應檢舉處分の型通りにして、微罰處分―陸軍刑法の罰則を課せぬ意味―の意見を附して進達して來た。旅團長もこれに同意されて、その儘上司に移した。軍法會議もスラリ

と部隊長の意見を認め微罰處分の判決が下された。

そこで部隊では、更めて行政處分に附し、中隊長に於て輕營倉何日を申し渡しその報告がこれ亦スラ／＼と上司に進達された、問題はこれからだ。

筆者は參謀長に呼ばれ、「輕營倉は怪しからん。動機は兎も角苟も陸軍刑法該當法であるから、重營倉を適當とする」と意見で再考を求められた。自分はこれに對し「微罰處分の判決で、最早陸軍刑法の範圍を離れたのだから、その動機が故意でない事が明瞭である以上部隊長の考へ次第で、輕營倉も敢て不當と思はね」と抗辯したが參謀長は中々同意を與へぬから、その儘兵團長に顛末を報告した。將軍は平然として「自分は部隊長の處分を適當と認めたから進達した以上は、全責任はこちらにある。若し上司が微罰の適用を不適と認めたら、先づ自分に對し然るべく處分を加へ、然る後罰則の變更を命ずれば宜しい。苟も自己の與へられた職權を行使した以上之を取消すなど職責上斷じて出来ぬ。又兩者意見の相違點も、要するに、刑法の範圍を離れた以上は、行政處分の見解に依つて處斷する事

は決して不當でないと思ふ。これで上司が不可と裁斷せられたら、處罰者の職權行使が悪い事に歸着するから、この點を正すべきである。軍令上 大元帥陛下から與へられた部隊長の權限は、絶對神聖でなければならぬ云々」と頗る明快なる御意見で、筆者は兩者の板挟みの状態で、再三往復を重ねたが將軍は頑として説を變へない、困つたのは參謀長だ。こんな事理明晰の問題で、將軍以下各直屬部隊長を處分するにも行かず、その儘有耶無耶に葬り去られた時の上級團隊長は、何んとか関の大立物で軍政の第一人者を以て自負せられ、その辛辣と傲岸には團下一般が懾伏の状態にあつた時代として、堂々一步も譲らぬ將軍の毅然たる處置には、痛快を禁じ得なかつた。

斯くの如き牢固たる信念を以て、貴き職權を行使して初めて、信賞必罰の實が揚るのだ。無責任の言論を弄び、徒らに饒舌の雄を競ふ白亞大殿堂の百蛙は、將に三省すべしだ。

善意に解せ

某部隊に香しからぬ事件が発生し、具體的の報告が程經て進達された。僚友と共に仔細にこれを點檢して行く間に、どうも矛盾や、不自然の所が段々多くなり、檢討の結果、再調査を可とする意見に一致した。そこで兵團長に率直に、我々の所見を滔々と捲くし立て、一廉の輔佐振りを發揮した積りで裁決を請うた。處が黙つて聞いて居られた將軍は、「解つた、然し報告者の云ふ事を凡て善意に解釋して再檢討せよ」と命ぜられた。

案に相違して我々の意見を拒否せられたのだ。仕方が無いから將軍の意圖を體し、成るべく善意に善意にと考へつゝ再三再四熟讀し玩味して調査を進めると、成程部隊長の報告の裏面が、追々呑み込めて来るやうな氣がする。終には矛盾や不自然と判定した事柄も、どうやら筋道は通るやうだ。そこで僚友と色々論議し檢討修正を加へ、その儘上司に進達する事になつた。幸ひに事件はその儘スルス

ルと部隊長の考への通りに濟んだ。その後或機會に、その部隊長に、有りの儘その事を話したら、部隊長はニッコとして、「さうだつたか、全く事實は君等の最初の判斷の通りだつた。流石は將軍だ、チャンと俺の腹を見透かして居られたのだ」と述懐されて、將軍の統御振りに感激された。

成程他人の云ふ事を善意に解する事は、大事な處世の要訣の一つである事を悟つた。爾來今日に至る迄出来るだけこの心構へを忘れなかつた積りだ。蓋し、善意に解するといふ事は、結局人を信用するといふ事になり、親切を盡すといふ事に歸結する。過去を振りかつて、人を信用した爲めに、損をした事は、數ふる程しかない。つまり瞞されたり、無駄をしたり、若干物質上の迷惑を受けた位で濟んでゐるが、善意に解する、即ち人を疑はぬといふ事が、生涯を通じてどんなに、麗かな氣持に成り得たであらうか、常に明々朗々の心境を持して居る幸福は、一々猜疑の心を以つて對處する不愉快に比すれば、欺されて幾許の損をした位は殆んど云ふに足らぬ。この信條が、今日迄筆者をどれだけ、幸福に且つ愉快にして

くれたかは、筆者自身にしみんゝと感じさせるのだ、重ねて云ふ「苟も他を疑ふ勿れ、我人を欺かず彼豈、我に背かんや」と、御目出度い人間だと笑ふ人は笑へ。

名譽射撃

名譽射撃！ 明治、大正時代の老歩兵には、恐らく忘れられぬ思出であらう。全師團四十八ヶ中隊が、銃は歩兵の生命なりとの誇にかけての負けられぬ競技であつた。秋季演習最後の突撃で、名譽旗を先頭に押し立て、中隊長は殺氣に充ち審判官に、己の中隊は名譽中隊だ、射撃威力は對手に倍すと威猛高になつて勝利を主張したと云ふ笑話もあつた位だ。

聯隊長も大隊長も當の中隊長は云ふ迄もなく、全員異狀の緊張で、その苦勞も並々でなく、年が年中之が準備に汲々し、射撃教育は微より細に互り訓練され、銃の整備、氣象、終には、人事を盡して神明に祈願し、某々神社の護符、朝參り、標的射場に注連繩迄は未だとして、色々の小細工や姑息の遣り繰りも相當深刻で、

期日が近づくると他の教育を一切中止して、朝から晩まで射撃の一點張。實は筆者の如きは内心名譽射撃廢止論の急先鋒で、中、少尉時代は、中隊の異端者であつた。さて自分が中隊長になると變なもので、矢張り敗れたくない氣持に押されて自然に渦中の人と化し、朝から射場に頑張り通して、その日／＼の成績表を手にして畫策に没頭するに至つた。もうこの季節になると射撃の上手な兵は、チャホヤ持てはやされて得意満面肩で風を切つて幅を利かす、これに反して平常は模範兵として崇敬せらるゝ者でも一向的中せぬ劣等射手は、小さくなつて見るも氣の毒な程に消沈、夢中になつてゐる班長や幹部迄が「亦零か貴様の爲めに班の成績は滅茶々々だ」などと痛罵を連發する。そこで愈々心の平靜を失し、焦れば焦る程眼心指の三位一體どころか、反對に眼は血走る鼓動は昂まる、全身は躍動すると云つた調子で、治痕桿（零點の表示）の續出、かうなつては腕に覚えのある者でも、逆上し易い程だから堪らない。可憐なる此等屠所の羊は、射場では怒鳴られ、中隊に歸れば厭味を聞かされ、恐らく終夜マンチリともせず、寂しく更かす事も多

からう。中隊長は此處に氣が着いた。教ふべき形而下の技術は、殆んど盡して居る、要は本人の心の平靜を保つ事だと悟つた。そこで此等札付の不良射手を集め一弾毎にその缺點を指摘し、從來の統計を基礎として某は一發平均二點、某は三點とその最大限の得點を要求し、更に説明して曰く、中隊長の希望は中隊の一人一發平均點は……點だ。之に達すれば、名譽旗を獲得せずとも満足する。汝等十餘名が今示した要求限度の得點をなせば充分だ、其他の連中で優に不足を補ふ自信を有す、これ以上は儲物だ。これ位は一發黃旗（五點以上）が出ればそれ迄だ。平氣でやれと激勵し敢て彼等に多くを求めぬやう意示を明確にし、一方班長に嚴重に訓示して、氣の毒な彼等を同情の念を以て遇する様注意を倍加させた。實際射撃のみが能ではない、未熟の責任は寧ろ幹部に存する、心の平靜を得ずして何處に百發百中を求め得ようか。精神の安定を缺いて硝煙彈雨の戰場に一彈一敵を期し得べきぞ。要は全能を傾注して剩すなくんば、命中點の多少の如きは枝葉末節のみ。然るに熱々の極單に射撃の巧拙のみを捕へて劣等兵視し、彼等の自信を喪

失せしめ、朗かなるべき兵營生活の一日を不快に費さしむるが如きは將に幹部の不明と云はねばなるまい。之に氣付いた中隊長の腦裡には、一抹の悟道が萌芽して濶然とした。唯可憐な兵の心情に同情し、之を慰藉し激勵して、少くも焦慮と苦惱を除去する事に心を砕いた。さて其の結果は………名譽旗などは勿論及ばぬ高嶺の花であつたが、幸ひに劣等中隊の汚名は立派に返上する事が出來た。間もなく射撃教範が改正せられて、名譽旗制度が撤廢されたが、制度其の物の本質が悪いのでなく、運用を誤り本を忘れて末に走り、従つて種々の弊害が醸生する結果となつたからだ。

斷髮と粗食

同期生の某大佐、佛蘭西陸軍の最高學府を卒業して歸朝した。髮を七三に撫で、指には金色燦然、颯々として陸大で、蘊蓄を傾けて、最新の兵學を講じ名聲嘖々、定期異動で北鎮兵團の某部隊長として赴任、瀟洒たる姿は依然として異彩を放つ

た。時の兵團長は筆者が大佐と同窓の故もあつたらう「大學校の兵學教官なら差支へも無からうが、部隊長の長髪は具合が悪からう。何とか忠告して斷髪させよ」との仰せであつた。兵團長は嘗て陸大の校長で某大佐も一時其の配下であつたのだ。筆者は大佐の性質を知つて居つたから、大佐も必ずや何か期する所があるだらうし、又一旦かうと云つたら挺でも退かぬ男だから、暫く靜觀を持した。一ヶ月……兵團長からは夫れとなしの督促、二ヶ月、三ヶ月筆者は一言も大佐に頭髪の事は云はなかつた。ところが某日大佐がヒョッコリ來た。ナント昨日の美髪は影もなく、一分刈のクリ／＼坊主、指間の金色また痕もなし。

後日大佐述懐して曰く「北鎮に行つたら、キツと第一に兵團長から、斷髪令が下るだらう。糞ッ斬るもんかと豫期して來たら、一月経つても二月経つても一言なした。とう／＼敗けたよ」と哄笑した事があつた。何でも無い笑話に過ぎぬが噛みしめると、何かの味がする。

話は全く別だが、〇〇元帥が工兵監時代、某工兵隊の檢閲に來られた、名に負

ふ工兵の神様の如き兵監だ。隊長以下内心ビク／＼、將校集會所で、將校と會食、隊では下手に御馳走などしては又雷が落ちる。勤儉質素の實を示してやれと、殊更でもあるまいが至つての粗食、隊長は寧ろ得意氣に質素の釋明、聴くも終らずドカン大爆彈「工兵は緻密な頭腦が必要だ。コンな不味い物を食うてゐるから良い計畫が出來んのちや」とデロリとハイカラ姿の青年士官をひと睨み、流石は神様と今でも工兵隊の一つ話。

男の意氣地

某部隊に△△と云ふ有爲の若者が居つた。ところが部隊長の代る度に、問題となつた。彼は西伯利亞事變に従軍し、赫々の武勳を樹て、拔群の恩賞に預かり目出度く凱旋した。英姿颯爽短軀だったが、苦味走つた好男兒、氣前はよし、戦地で餘つた小遣ひに不自由なし、三拍子揃つた男前、忽ち深間に落ちこんだ。問題は即ちそれなのだ。どの部隊長も彼の材を惜しみ、將來を考へ絶縁を勸告した。これ

が當然の處置と云ふべきだ。これに對し彼は常に立派にこれを奮ふのであつた。併し實際は依然として國交は斷絶して居らなかつたのである。

やがて新進氣鋭の部隊長が新任して來た。一日部隊長は當時人事に興つて居た筆者に相談に來た。部隊長の意見として寧ろ相手の人物が確かりして居たら、斷然結婚させた方が得策ではないかと云ふのであつた。ソレカラ諸方面に涉り相手の人物、性行等の調査を進め、殊更に機會を設けて種々の席上で彼女にも逢つた。大した美人と云ふ方でもなかつたやうだが、溫和で、諸藝に長じ、品格もあり、話も判り、如何にも利發者らしく、別段兎角の浮評も聞かなかつた。父は士族で、色々の商賣に手を出し、一時は請負業者として成金の部に入り、彼女の幼時は相當豪奢の生活をなしたが、多額の負債を残して妻と少女を、浮世の怒濤に投げこんで逝つた。途方にくれた未亡人は、手職などして糊口を過したが、終には幼時習はせた遊藝が物をいうて、水商賣の手に移されて今日に及び、今は彼との間には既に歴とした子供もでき、彼等社會では、品行方正で通り、母と子供と三人暮し

で、清らかな生活を送つてゐる。勿論彼から月々若干の補助はあつたのだらう。之を綜合判斷すれば、現在の職業は素より香しからぬが、身分、人物、才能共に合格點で、この種婦人でも心掛次第では或意味に於て却つて内助の功の著しい例も尠からず、要は彼の決心如何に存すると云ふ事に意見が一致した。

僕は部隊長に條件を示した。「彼は彼女と結婚すべきである。然し現役としては不可、須らく武人としての御奉公を止めて、他の方面で働く事である」と、部隊長は奇怪の顔をして現職を退くなら何もコンナ心配は不用であると。尤も千萬だがあるが、ソレでは男が立たぬ、そんなケチな考へを持つ人間なら、風上にも置けぬ奴だから斷然處置すべきである。然し彼が、かう成つた上は、不忠ではあらうが、潔く喜んで手鍋さげると決心するなら、假令ソレが善いか悪いかは別として、男としての軌道を外れて居らぬから將來を見てやる價值があるではないか、女の方から別れ話が出たら勿怪の幸だが、今の處、彼女にはそれだけの覺悟が無

い以上出来ぬ相談だ。ソコで先に述べた條件だ、チト意地悪のやうだが、一つテストをやつて見たらどうだ。その上で更に御互に彼の爲に最善を盡さうぢやないかと。部隊長は原案の通り、彼に嚴かに説いた。所が彼は豫々熟考して居つたのであらう。言下に「誠に長い間御迷惑を掛けて済みませんでした。私として一婦人の爲めに、現職を退く事は恐懼の至りでありませんが、今更彼女を捨てる譯には参りません。どうか御暇を頂かさせて下さい」と流石に暗然として決意を表明した。

事件は急テンポに進捗した。表面彼女を辯護士たる知人に情を明けてその養女とし、職業は遊藝の師匠と云ふ事にして書類を作成して、有耶無耶の裡に、手續を終つた。併しこの土地にそのまゝ勤務する事は他に對して都合が悪いので、部隊長の骨折で、遠い西國の部隊へ轉任させ、彼地で天下晴れて一家庭を形成せしめた、無論母も引取つて。

新生活に入つた彼は、全く蘇生したかの如く潑刺たる服務振りで、又主婦としての彼女も申分なく、一家和合との報にホット胸撫でおろして彼等の前途を祝福

したのであつた。

私共の採つた處置は確かに權變の道であつて、上司の目を潜つた事は、重々恐縮し、また相當議論の餘地は勿論あらう。然し結果的に觀れば、彼はその後順調に地位を進め、夫人もまた立派な主婦として體面を汚すやうな事はなく、内助の功を樹て今は某地に安穩の生活を營んで居る以上、自分も當時の部隊長も、内心では決して悪かつたとは考へて居らぬ。是乎、否乎。

母 性 愛

チト毛色の異つた話一つ。

K君は片田舎の部落の旦那様格の主人、兩親晩年に出來た一粒種、目の中に入れても痛くない程の鐘愛、我儘氣儘は云ふに及ばず、風にもあてず、水にも入れぬ温室育ち、小學校を卒りてお定りの東都遊學、早稻田邊の中學校も半途で錦衣歸郷？ 既に老父逝きて母一人、息子は大學者にでもなつた位の氣持、嫁も貰ふ、

子供も生れるK君も一廉の若旦那、やがて心ある近親の忠告も馬耳東風、縣下始めての少壯村長などと新聞に書きたてられて、本人は天晴新進氣鋭の名村長氣取り、役場では好きな將棋と酒盛りが常仕事、チヨイ／＼役場の用事で町へ出かける、と待つて居ましたとばかり常連の取巻共に誘はれて茶屋酒の味忘れ難く、愈々發展の一路をたどり待合泊りも數繁く、妾狂ひは勿論、近所の温泉等への豪遊も度々、その内に政治ゴロの口車に乗せられいつとなしに政黨に足を踏み入れ、郡某派の青年政治家次回の縣議候補者折紙付きなどとはやし立てられて本人は有頂天、脱線に次ぐに脱線、かゝる状態では高が田舎の小旦那様、だん／＼借金も嵩み、多少の自棄氣味も手傳つて、悪友の甘言に迷ひ、祖先傳來の動産不動産一切を處分して東京で一旗揚げると云ひ出した。親族共も捨てては置けず、色々と勸告もしては見たが、我儘一杯のK君何んで聞かばこそ、果ては無理難題を吹きかけて、一番煙つたい嫁を追出し、終に正式に最後の親族會議と云ふ段取りとなつたが、唯一人頭の上らなかつた嫁の父親も、離別とあつては席には居なかつたが、分家や其他は一

致して、不動産と家屋敷は先祖の手前、賣却せぬやうにとの意見であつた、その時老母は最後に親族一同に向つて「Kは私の一人息子今日の今日まで何一つ彼の意に逆つたことはない、假令どんな事に成つても絶対に息子の意志に反對はしたくないから、萬事はこの母に、最後まで子供孝行を全うさせてください」と、

勿論萬事はK君の思ふ存分に處理され、田も畠も山林も、家も屋敷も、實に綺麗サツパリと賣拂つて、妾と數人の子供を携へ、數萬金を懷に上京したのであつた。結果は云はずとも明々白々。

母性愛と云ふ言葉が、數年前から色々の方面に取沙汰されて一種の流行語となつたこともある。Kの母の考へ方は、一體母性愛の眞の姿であらうか。子に逆はぬ、子の云ふ通りになる其の事は勿論小乗の母性愛であつて、大乘の見地から觀れば首肯し難い。我國傳統の家族制度の觀點に立つてKの母の採つた處置は、佛教の「愛見の大悲」では無いのであつて千代萩の政岡と比較の俎上にしては、敢へて異論もあらうが、一步踏み込んで、單的に人間と云ふ角度から考察すれば、母

の子を愛する赤裸の情の發露として、之を繊細な描寫をした小説が西洋物にはチヨイ／＼ある程であるから、従つて又異つた批判も相當あるだらうと思ふ。

渺たるK氏及びその一家の出來事に過ぎぬが、今日日本精神とか西洋道德とか、喧しく論議されてる場合、日本婦人の母性愛と云つた觀察に、一つの示唆を提供した所以である。之と對蹠的の一例とも云ふべき小話を序に一つ照會しよう。

某醫師あり愛娘を近隣のS家の息に嫁した。その家は相當の資産家で、而も徹底した愛金主義で有名なものであつた。結婚後若夫婦はその勤務地たる外地に別居して居た。やがて懷妊、分娩期も近づいた。某醫師は産科を得意とし、殊に沉んや愛娘の初産だ。飛んで行き度い氣持は山々だ。ところが、その醫師も拜金主義では、S家とは好一對、考へ抜いた揚句、S氏に對し旅費を出せば多忙ではあるが、初産の事でもあり、遠き外地で、親味の人とて無く心細き次第なれば、見舞に行つてやつても宜しいとの意圖を洩らした。ところがS氏の返事は簡明「行きなければ勝手に行けば宜しい、敢へて旅費まで出して頼むにもあたらぬ」と某醫師

も即座に「ソンナラ行かぬまでだ」と娘の初産が氣に懸つてならぬ父親、遠く若夫婦を異境に送つて居る父親、子に對する心境に相通するものは必ず人情として存在すべきに、旅費の一事で萬事を解決したのだつた。子に逆はぬと云ふ信條で祖先傳來の財産を捨てて顧みぬ母親。僅かの旅費で可愛い娘の見舞を止めた父親。斯うなると人情とか、情愛とか云ふ本體も、不可解のものとなるやうな氣がする。哲學とか、心理學とか、宗教とか、隨分難解の理論を究明せば、所謂悟道の境地が拓けるだらうが、悲哉我々凡俗には、高邁深遠の教へは、なか／＼物に成らぬが、世間に有り觸るゝ程のツマラヌ事實が、時として、高僧哲士の講義よりも、ヒシ／＼と身心に徹する事があるのではなからうか。

義理と人情

不粹の筆者には不似合の話だが、義太夫が好きでと云つて自分で唸る程では勿論なく、唯聴くだけに過ぎぬ程度、併し義太夫の本は片端から讀み耽つた。時々

兵に精神上の話などする時、義太夫を引例すると妙に兵が朗かになつて、理解に頗る効果があるを知つて、愈々その熱を上げたもんだ。今でも記憶するが、千代萩が最も好きで、政岡の心境に、無限の讚美を捧げたものだ。一介の若年武辨が、怪し氣な程度のその方面の知識を以てして、縦横？に解剖して、忠義の政岡、武士の妻としての政岡、母としての政岡とかに分析したりして、これを五ヶ條の勅諭に一々歸納せしめ、一廉の史家氣取りで、好んで兵に聞かせたものだった。今日之を追懷して、千代萩禮讚は毫も減つて居らぬ。

鎌倉武士の間に發達した武士道に於て、克己制我の思想、即ち、名譽の爲に、仁義の爲に、一切の個性を抑制し、喜怒哀樂また極端にその容を變化するに至つて、自ら日本精神にも、多大の影響を及ぼした事は、贅言を要せぬ。即ち公益とも云ふべき義理の前には、私益である人情を無視する行爲。近松は好んでかゝる題材を劇化して今日なほ、多くの渴仰者を有して居る。就中、千代萩に現れた女丈夫政岡の如きは、武士道の感化が、躍如として我々の心を衝くのである。愛兒

の慘死を眼前に涙一滴見せず。頑是なき幼君の空腹をジツト見守つて甘き顔を制した健氣の彼が、母としての切々たる苦衷を告白して死ぬるを忠義とする武士道に母親らしき血を吐く嘆を洩らすに至つては、將に高潮の極に達し、自ら興奮を禁じ得ぬのである。義の爲に私情を制する思想を、利の爲に他を顧みぬ習性と對比する時、偶々所謂自由主義的經濟觀念と國家的統制經濟思想、民主主義と全體主義等々の根本問題に共通のある物を發見せざるを得ぬのであつて、之により新秩序建設の偉業を双肩に擔ふべき我大和民族の、社會觀、人生觀に、一の動向を示すべき大なる示唆を與ふるものが存するやに思ふが奈何。?!

山川先生

男爵山川健次郎博士は、御承知の如く、長く東京帝大、京都帝大等の總長の職にありし、我教育界の長老で、生粹の會津武士、國士の典型とも云ふべき人格者だった。晩年武藏高等學校長時代に、筆者も偶々同校配屬將校として服務したの

で、親しく先生の警咳に接して教へを享けることも多かつた。

先生は會津藩士で、戊辰役には、年齢の関係で白虎隊員ではなく、別の少年組であつたので、幸ひに飯盛山の土とならず直ちに米國に留學物理學を専攻して歸朝せられ、以來大學教授、又は總長として殆んど一生を捧げられた。「國民皆兵」戊辰役の體驗の結果であつたらうが、先生は常に之を力説せられ、一步進んで、日本國民は男女を問はず悉く小銃射撃を習得するを要件とすると云ふ御持論で、學生の射撃教育には非常の關心を有せられ、東都學生射撃聯盟の元締であつた。戊辰役に、會津藩士は、老も幼も、男も女も、悉く第一線に立ち、而して國亡びて山河在りの境地に育ち、幼心に之を目撃否參加せられた先生の腦裡には、深刻に國防の本義が、焼き付けられて居たのであらう。有史悠久嘗て外國の侮を受けぬ我國民、一度瞑目して興廢治亂戰禍の數々に遭遇しある幾多の東西諸國の蒙つた敗戦の苦味、現に波蘭や芬蘭の國民の上に思ひを馳する秋、特に山川先生の國民射撃論を追想して感慨切なるものを覺ゆるのである。

『日本精神の基』 我國傳統の日本精神、大和民族の國民性、此等の教養は素より脈々たる我々の血液の中に流れて自然に享有せらるゝのでもあらうが、併し何千年以來如何にして培養し、教育せられたのであらうか。學校の設備も不完全、僅かに聖賢の書に依りて啓蒙自得するに過ぎなかつた時代に、果して何人が國民教育の任に當つたのであつたか、先生は之に就き次の如く説へて居られた。

會津藩に於ては、家庭の士女の教養は一切擧げて母親の任であつた。而して母親が士女を教へ養へるには、別に論語や四書五經や、日本書紀ではなく、日常家庭の行事が、總て活きた教材で、むづかしい理窟もなく説法もなく、正月やお盆、法要、祝言、祭喪等に於ける家例、藩公への勤め、上役、同僚、親族、近隣の交際、一家内に於ける長幼、上下の行儀等々その日の出來事に對し、母親は時と所を問はず、或は言葉を以て、或は實行に於て、自然々々の間に、子女に日本人としての進むべき道を明快に教へ育てたので、父親の如きは日夜藩の勤務以外殆んど家庭の事など我不關焉であつた。先生の意見に依れば民族意識、又思想

の根柢は、此等家庭の行事に一々表現せられて居るが故に、この風俗習慣の正しき認識と理解に依り培養せらるゝのだ。然るに今日の女學校には何等此等の施設なく、従つて日本人の家庭はどんなものか一向知らぬ婦人が、一家の主婦となる有様では心細き限りだ。今からでも遅くない、なほ年齢七十才の老媪は、確かに昔のかうした家庭の経験者であるのだから、此等の人々の中から適任者を聘して、女學校の教師たらしめ、昔の儘の日本武士の家庭の躰を復活すべし、云々、誠に卓見と申さねばならぬ。

社會様式が封建時代と著しく變つた今日と雖、先生の家庭教育論には何等變化は認めぬ。試に今日の女學生に家庭とは何ぞと發問したら、何々女史式に滔々と色々の理想は聽かるゝであらうし、クリスマスや茶話會、舞踏會の團樂はよく知つて居るだらうが、果して日本の元旦、除夜、節分乃至盆、鎮守祭の真相を知つてゐるだらうか、學校を出たばかりの若夫婦の新家庭、今日は元日だ。國旗を掲げる位は世間なみ、主人はドテラでお雑煮を頂き、それ〴〵の式に出懸けて仕舞ふ、

夜はカルタ位が正月の行事だと心得てゐる組が殆んど總てではなからうか。筆者の體驗するところによれば、日本國中の借家で、神棚の位置をさへ設けてる家主は何人あるだらうか、勿論祠やその他の設備は借家人思ひ〴〵の考へで、調へるだらうが、大神宮様を安置する棚の設備すら施してなく、東京郊外の新住宅で、神壇のなき新家庭など、今日崇拝神の熾んになつて來た時代でも果して皆無だと誰が云ひ得るか、借問す學校教育家乃至知識階級の若夫婦諸君、山川先生のお説に忸怩たるものなき乎。

『篤學』 某日宮中賢所參拜の折、學校から先生の自動車に同乗を許されて、江古田から宮中に向つた。目白邊までは色々の雑談を交したが、やがて話も中絶すると、老先生は、何やら懷中から取出されて、熟讀を始められた、如何なる雜誌ならんと、傍見した。その時筆者は全く愕然とした。それは米國の先生の母校で發刊する物理學の雜誌であつた。先生が理科の教授として物理學を講義せられたのは恐らく數十年以前の事であらう。今日に於ては専門の學問などは殆んど直接

干與して居られなかつたのに、今日なほ寸暇を惜んで研究を續けらるゝ先生の態度には、自ら頭の下るを禁じ得なかつた。今日悠々閑居の筆者、衷心先生の篤學に對し汗顔赤面の限りだ。

『人徳』 學校長としての先生は、文字どほり全學校崇敬の的であつた。偉大なる教育家として、高潔なる國士として、その風格徳望斷然一世に冠たる所なるは敢て贅言を要せぬ。學校長として先生は敢て教授會やその他で、名論卓説を吐かゝるゝでもなく、黙々として衆の意見を聽き必要の最小限度の裁斷を下さるゝ位で、我々には何所がソナナに優れて偉いのか判らぬ程であつた。學校で一年に一回學生を海外視察に派遣する時の送別會には、職員、生徒の賑々しい送別の辭の最後に校長先生の訓辭があつた。神仙その者の如き壇上の先生は諄々として壯行の辭を述べられた。語る所は「到る所で其の土地の繪はがきで父兄に消息を忘るな」「風土の變化に氣をつけて病氣にかゝるな」「努めて肌衣を洗濯せよ」等々平々凡々とでも云ふか、何等格別清新の事柄は一つも無いが、併し此等のお定りの云はば

子供臭いやうな事が、一度先生の舌端からシンミリと吐き出さるゝと、言々悉く金科玉條、滿場森として水を打つたる如く、生徒の席からは、感激の嗚咽すら洩れた。嗚呼これが即ち眞の人徳だ。先生の人格の反映だ、今なほ耳朶に残る。

果 し 状

昭和〇年の某地方で行はれた特別大演習に参加前に、自分は同期生の某大尉――當時某騎兵旅團副官――から、物騒な手紙を受取つた。その内容は要するに大演習に相見る機會に於て、必ず貴師團司令部を徹底的に馬蹄に蹂躪するから、豫め通知すると云つた一種の果し状であつた。筆者には何が何やら一向合點がゆかぬが、然し騎兵旅團を向ふに廻す以上は、これ位の事は素より覺悟の上だ、ヨシやるならやつて見よと、早速「確と承知した」旨挑戦に應じた。

然し考へて見ると何んだか仔細あるらしき模様であつたから、同僚に話したが、同様その眞意は依然不可解だつた。兎も角、司令部を襲撃さるゝなどは、甚だ醜

體であるのと、又從來の大演習の講評には常に幕僚勤務の不充分を指摘されてあつたから、司令部陣中勤務を充分訓練し、大演習に遺憾なきを期する爲め、參謀長の意圖を體して、「幕僚」演習間の司令部要員「下士官」等を專習員として數回に亙り各種の演練を重ね、就中對騎兵團に對する警戒には、ウンと力を入れ、特に司令部位置の選定、警備に就きては、主任副官及び衛兵長に徹底的に研究訓練を命じ、出發前には、之れ位なら大丈夫と云ふ自信を持つに至つた。

愈々、待望の特別大演習の幕は切つて落された。果せる哉司令部が稍長く駐止してゐる所へは必ず敵の騎兵將校斥候が、恰も豫知して居るかの様に出沒する。勿論これに對する警戒は、決して怠つては居らぬが、位置の選定、就中夜間の宿營地は單に對騎兵のみならば極く簡單だが、作戰上の諸要件が絶對である以上、相矛盾した條件があるので、可なり苦心した。第一、第二日も事なく經過して愈々最後の日が來た。當の騎兵集團は師團の左翼前に集結し在り、恐らく虎視耽々たるものがあつたらう。況んや彼にして見れば、今日まで機會を得ず、剩す所今夜

のみとなつては、是が否でも、司令部襲撃を決行せねばならぬ土壇場に立つたのだから、寸時の油断も出來ぬ。戦況は刻々進展し、漸く暮色迫る頃、今まで戦場の要點たる隘路口の某要地の中央に位置した司令部を、急に其の前方の水田中の小部落に移轉し、舊位置には軍司令部が進出して來た。突如夜半近く、軍司令部から電話があつた。曰く「軍司令部は目下敵騎兵の夜襲を受けつゝあるも、所在の歩、工兵に依り防戦中なり」と、ヤツタナーと思つたが、機を失せず、軍司令部所在地に残した師團の總豫備にこれが撃退を命ぜられた。師團長は直ちに、御見舞の爲め若干の護衛に衛られて、軍司令部に出頭、軍司令官宮殿下に伺候された。

鞭聲肅々、千載の好機を握り意氣軒昂、軍刀一閃先頭に立ちし襲撃隊長が殿下の軍司令部と知つた刹那、恐懼と失望に長蛇を逸して、悄然兵を收むる胸中を察するとき、ホット一息つくと共に、しみぐくと弓矢取る身の衰れを感じた。實際畏れ多き次第だが、軍司令部が我が司令部の身代りの苦杯を喫した譯で、その裏面の真相は知る人ぞ知るである。かくしてマシマと全演習間終に彼に一指も染めさ

せずすんで、果し状の手前聊か鼻を高くしたが、今日に及んでも、當時の苦心が並々ならなかつた事をつくづく思ひ出す。演習終つて御賜宴場で、當の發頭人たる騎兵旅團の副官と、手を握つて光風霽月苦心談を交換し哄然呵々大笑した。「一體何の爲めにアンナ馬鹿氣た事を企んだ？ 如何に騎兵集團とは云へ、良くも常に師團司令部の處在を適時搜索し得たか？」

「最後の軍司令部襲撃の裏は？」

第一次歐洲大戰後、兵學界には、各種の革新意見簇出し、騎兵の任務、用法、裝備等に對しては、可なり深刻な論争が展開せられ、極端なる論者は騎兵全廢論とまで發展したものだつた。

當時の我師團長は有名な獨乙通で、當時中央部の某要職にあつた。その頃の偕行社記事——將校の唯一の兵學研究機關誌——に中央部某部長の名を以て騎兵に關する一論文が掲載せられ、相當突込んだ革新論であつた。サア騎兵科の連中カンカンに怒つた。ソレかアラヌか某騎兵旅團長は正裝の儘遺書を認めて任地に於て割

腹された。噂に依れば、騎兵擁護の爲め身を以て反省を促されたのだと流布された。かゝる経緯から師團長は騎兵科の狙はれ者だつたのだ。さても執念の深き事かな。そして割腹された旅團長の副官たりし某大尉が、豫備役となり、演習當時は背廣に自轉車と云ふ瀟洒な服裝で常に我師團司令部の附近に彷徨し、附き纏つて居つたとか、成程これで讀めた、神ならぬ我等は、かゝる名スパイに毫も氣がつかなかつたのだ。愈々最後の夜、そのスパイは司令部が薄暮に乘じ、突如位置を變更した頃、恰も連絡に行つたため之を知らず、テツキリ先の位置と信じきつて居たのであつた。又この演習間騎兵團では、我が師團司令部襲撃専門の小隊を、各聯隊に三箇宛指定し、特別任務を與へて居つたと云ふ事だ。なか／＼用意周到さすがは騎兵だと敬服した。コンナ稚氣漫々たる兒戲的行爲が、大演習の間に行はれて居るなどは、今の青年士官には、豫想もつかぬ事だらうが、昔はこの種裏面の出來事もあつたと云ふ事を笑ひ話として紹介するのは、かうした意氣地から、自ら演習その物に一種の眞劍さが加つて、非實戰的と云つて仕舞へばそれまでだ

が、併し兵馬倥傯の間に必死の努力を傾倒したものだと言ふお恥づかしい偽らぬ告白にすぎぬ。以て他山の石とならば望外の幸である。

序に體力の限度と云ふか、睡眠の及ばず影響と云ふか、この演習間偶然に體驗した事を一つ附け加へる。

平素明朗和樂を以て誇として居つた我司令部は、どうした事か、この大演習間は終始重苦しい雰圍氣に包まれ、幕僚相互顔見合はせては苦笑を交すと云つた、頗る感心の出來ぬ状態の下に置かれてあつた。之には明確なる理由が存在するが、今これを公表する事は筆者の忍び難い所であるから、何にも觸れぬ、就中最後の夜の如きは、寧ろ凄慘その物であつた。既に軍の攻撃命令が下達され、各隊命令受領者は、張り切つて待つて居るが、なか／＼師團命令が下達されぬ。奥の間では、師團長、參謀長、作戰主任が鼎座して作戰を練つて居る。時刻は刻一刻と經過し去る、依然として颯爽たる參謀長は姿を見せぬ。第一線諸部隊は今から命令を受けて實行に移るまでには最小限度の時間を要する。ところが今や將にその

刻限に迫らんとしてゐる、我々は氣が氣で無いがどうすることも出來ぬ。ソツと作戰主任を呼び出して、その旨を耳打ちしたが、彼は唯困つたと云ふ表情以外に、何等の返事もせず、黙々として再び奥へ引き返すのであつた。命令受領者は焦り出す、不平の聲も洩れる、今や絶對絶命だ。背に腹は換へられぬ、後方主任參謀と相談し、一切の責任を負うて軍命令をのみ取敢へず傳達し、言外の意味を兩旅團副官に暗示して命令受領者を一と先づ歸した。勿論後から師團命令は下達されたが、夜は殆んど明けかけて、第一線では既に砲聲が殷々として火蓋を切つて居つた。こんな状態に加ふるに前述の如く對騎兵團の心勞等で、三晩四日間全然一睡もせず、しかも終日乗馬で戰場を東西に驅馳したのだ。經驗上三十分でも、假眠すれば餘程違ふが、之れすら求め得なかつた。最終日の如きは、心身困憊の極とも云ふか、口を利くすら、懶かつた。愈々演習が濟んだ。豫め司令部は、某市に二日滞在全部汽車輸送の事になつて、別に行事もなかつたので、右の如く幕僚以下へトへトに疲れてゐるので、參謀長の内諾を得て司令部の宿舎には、歸還輸送

の主任幕僚と関係者のみを泊らせ、その他は分散して成るべく電話の無い宿舎を選定するやう管理部に要求して居つた。蓋し、一切の累から免れて、心ゆくまで休養を求めんと欲したからだ。

御講評を拜し、參謀長の指示が終るや、一目散に迎への馬丁に案内せられて、宿舎に入つた。宿舎と云ふのは、江戸前料理の看板と云へば豪勢だが、繩のれんの一膳飯屋だつた、勿論電話は無いから條件に適してゐる譯だ。靴を脱ぎ、ヤツト望遠鏡だけ外した儘ゴロリ。起されて目が醒めたのは、ナント午前二時、折角主人夫婦の真心込めた江戸前料理も、お風呂も、オヂヤン、空腹も疲れも、熟睡の快の前には、馬に小判。その代り、漸く生氣付いて一と風呂―幸ひに向ひに錢湯があつた―浴びての一盃、天下何れにか、コンナ御馳走があらうか！

爰で筆者の云はんとする所は、人間の體力の限度である。當時は四十歳の働き盛り、確かに、人間は三晝夜も一睡もせず、心身を最大限に活動せしめても、之に堪へ得ると云ふ自信を得た事だ。砲煙彈雨の戦場では、不眠不休幾日と云ふ事

事もあるが、實は忙中閑ありで、假寢の夢を故郷に走らせる位の機會は必ず存するものだ。全く一睡も出来ぬ事など、先づ無いと云つてよろしいと思ふ。この時に得たこの自信力は、自分としては眞に一生を通じて貴重のものであつた。世の中は何處に禍福の神がひそんでござるか判らぬ。成程人間萬事塞翁の馬かなだ。

百萬長者の香奠

滿洲事變の初期、〇〇旅團に屬して出征せし、某一等兵が戦死した。實に聯隊としての最初の犠牲者だつた。何分事變の當初で、國民は興奮の坩堝に在り、世間の同情も厚かつた。聯隊長は聯隊區司令官や地方長官と能く連繫を保持し、葬儀萬端將來の先例にもなることとて、慎重なる考慮を拂つて、盛大にと云つても、専ら精神的に、華美を避け、莊嚴を主とし、就中遺族の待遇に最も心を砕いた。

遺族と云ふのは、片田舎の貧困な百姓で、父親と兄夫婦だけで、本人は入營前長く北海道・樺太方面に浪々の勞働者で、殆んど音信を絶つてゐた程で、經濟上に

は實際何の役にも立つて居なかつた。親は赤貧の小作人で、借財の爲め傳來の家屋敷も人手に渡り、今は某林檎園の片隅の、掘立小屋に嫁と共に居住し、惣領は年中旅から旅へと出稼ぎ、細々と漸く糊口を支へてゐる程の哀れな家庭であつたが、二男坊の戦死に依り、一時賜金を除き、同情金だけでも二千餘圓に達し、物質的には家族共の夢想だもしなかつた大金が懐に入り、夫れに御下賜金や扶助料を加へると、一生樂々と暮せる身分になつたので、遺族は涙を流して悲しみの中にも君恩の宏大と死せる子供の孝行の徳を讃へるばかりで、聯隊長としても聖恩の優渥と、世の同情の温さを染々感謝した。ところがフト副官から、變な噂を耳にした。隣村に某百萬長者があつたが、遺族はこの長者に千三百圓の借金があつた。長者は遺族が澤山の金を貰つたので、その一部で借財の返済を要求したと云ふのである。貸した金の返却を求むるは當然だが、百萬長者ともあらう者が、どうせ取れる當ての無かつた貸金を、今さら賜金や香奠が澤山あつたからとて催促するにも當るまい。殊に況んや、世間は擧げて事變に最大の關心を捧げ、戦死者の待

遇や遺家族の救護に上下最善を盡してゐる眞最中に、百萬長者が貸金の督促とは怪しからん。之は決して單なる一遺族と債權者との問題では無く、國民精神の動向に關係する事重大であると考へて時の聯隊區司令官及び憲兵分隊長等と色々協議を重ねた結果、先づ郷土出身の某少佐を長者の許に遣はして、説得せしめた。曰く「貴下の債權を快く死者の香奠として靈前に捧げては如何、貴下としても、恐らくこんな事がなければ、返済など當にはして居られなかつたであらう。今や時局は多事、國民擧つて分に應じ夫々國家に貢献し、身を削つても十錢、一圓と獻金をしてゐる現状だ。此の際貴下が、どうせ取れぬ貸金だつたと思へばそれ迄ではないか。之れが世間に知れたら何人が貴下の義擧を讚美せぬ者があらうか、延いては世の富豪に絶好の垂範となつて、世道人心に與ふる所極めて甚大である」云々と、對手は名代の金貸、若し拒絶でもしたら、コチラでも第二段の處置を採る積りであつたが、流石に相手も百練千磨、案外アツサリ萬事圓滿解決。

斯くして千餘圓の借金證文は、黒水引も恭しく、禮服いかめしき長者の手か

ら、感激の涙にむせぶ遺族の前で、靈前に手向けられた。聯隊長は聯隊區司令官、縣學務部長と共に長者を訪問して、讃辭と謝意を表し、縣下各新聞は一齊に、筆を極めて長者の美譽を報道し、今迄長者一家に加へられた兎角の評は、スツカリ吹飛んで仕舞つた。嗚呼一片の死證文が、長者を一舉にして花も實もある仁者と仕上げたのであつた、これも日本人なればこそだ。

八甲田の弔行軍

白雪深く降り積る、八甲田山の麓原……の軍歌で有名な青森聯隊の、大隊長山口少佐以下二百有餘名の雪中遭難も、はや三十周年を迎へんとする年に、偶然にも懐しき青森聯隊長の大命を拜した。筆者は實に士官候補生としてこの聯隊に育ち、小隊長としてこの軍旗の下に、日露戦争に従軍した。云はば生れ故郷に、再び軍旗を仰ぐの光榮に恵まれた。赴任翌々日師團長に申告の初對面に、イキナリ師團長は「明春は八甲田遭難の三十年忌に相當するから、弔行軍を実施する豫定だ、

宜いだらうな」と殆んど決定的の如き調子であつた。刹那に自分は先輩の英靈の長恨を電光の如く胸裡に浮べ、責任の重大を直感した瞬間肚がきまつた。「承知して居ります。然し、私は當の聯隊の出身である先輩の英靈を慰むるは、當然後輩たる私の責務と信するから、是非共之を執行して、三十年の恨をはらさねばならぬと覺悟してゐるが、着任早々部隊がこの壯舉に對し如何なる程度に準備を整へてゐるや一向不明である。若し萬一失敗を再びするが如き事あらんか、國軍の名譽は勿論先輩の靈に對し、弔どころか却つて之を惱ます結果となる事を恐るゝ、私としては明春迄に精魂を盡して準備訓練をなし確信を得れば、勿論譬へ御命令がなくとも進んで之を執行する。不幸にして若し自信を有するに至らなかつたら更に一ヶ年訓練を續行し、明々春の滿三十周年の當日を期し身を以てこれに當りたい。乞ふ、かすに以上の時日を以てせられたし」と答申した、師團長は案に相違と云はんばかりの御様子だつたが、着任早々當の責任者の意見を無理に斥ける譯にも行かなかつたであらう。その儘黙認の形ですんだ。

實際自分も苦しかった。後輩としての情誼からしても生死にかけても実施したい心は山々であつたが、然し前述の如く、若し萬一失敗即ち一兵でも損じたら、何の顔があつて先輩の英靈に對せられようか、どんな事があつても全員無事で八甲田を踏破せずんば目的は達せられぬのだ。これを思ふと、ジツと逸る心を抑へて、師團長に猶豫を求むる辛さ、自分が聯隊出身であるだけ尙更切なかつた。

遭難の原因は既に研究済みだつたが、更に慎重を持してS中佐を首班として適任者若干名を以て準備委員として、あらゆる角度から検討し對策を樹て、着々準備の訓練を計畫し、その冬は雪中に於ける各種の情況に應ずる試練をなし、或時の如きは、天候突然悪化し、猛吹雪と化し氣温又低下し、突然遭難當時を彷彿せしむるが如き状態となつた。この好機を逸してはと、夜間官舎を飛出し、緊急集合を命じ、闇と吹雪に寸前も辨へぬ夜に、行軍を実施した事もあつたが、將兵共に欣然としてこれに従ふ程の緊張であつた。

斯の如く上下擧げて眞劍その物の如き氣合は、又軍隊鍊成の大眼目たる團結

を鞏固に導く絶好の訓練となつた。軍旗を捧する聯隊長の心を心とし水火も辭せざる部隊を鍊成すべき大任務を課せられた責任者としては、將に天與の好機で、三十年間無限の恨を八甲田の麓に留むる先輩の志を貫徹するは、後輩の當然の義務であるとの信念を先づ肝銘させる事が絶対の要件であると考へ、これに對しあらゆる努力を傾注した。

S中佐の周到なる計畫に基き着々諸準備を実施し、大體の見透しがつき十二分の確信を有するに至つた。そこで師團長に對し更めて滿三十年に相當する明春一月二十三日の當日を期し、當時の演習計畫をその儘實施すべき報告を呈し、之を一般に発表した。隊内の緊張は、己惚であつたかも知れぬが目立つて來た。もうかうなればしめたもので、弔行軍の成功を斷じて疑はなかつた。

然るに豫期せざる滿洲事變が突發して、聯隊からも精銳を集めて一部隊を派遣する事になつて、その影響は行軍隊の編成にも及ぼし、殆んど參加豫定員の大部分は出動して仕舞つたので、止むなく當時の隊の實況上、許すべき最大限を網羅し

て新編成に着手したが、その人員は當初の計畫の殆んど三分の一程度に減少し、加之、從來の骨幹とも云ふべき幹部の大多數は出動部隊に加はりし爲め、新たに訓練を行はねばならぬ窮境に陥つたが、然し自分は、信念を以て可能と信じ、今迄の研究を基礎として再訓練に精進した。ところが、或日師團司令部に出頭の車中で、司令部所在地の某新聞に、物々しく青森部隊の弔行軍は事變の爲め中止する云々の記事が出た。怪しからん事だが、師團で或は事由があつてやつたのか知らんなど考へながら、師團長にお會ひしたら「雪中行軍は矢張りやるのか、事變の爲め種々支障が起りはせぬか」との御尋ねなので、言下に「別に中止するなどは考へた事もありませぬ。着々準備を進めて居りますが、編成は残念ながら縮少の止むなきに至りましたが、勿論決行する豫定です」とキツパリ申し上げたら、師團長は非常に満足げに「さうかソレデ安心した。實はこんな情況になつたので、聯隊では随分色々の方面に多事となつて、困つてゐるのではないかと心配して、若し無理が出来るとやうでは遺憾ながら中止せねばならぬかとも、考へて居つた處だったが、

今聯隊長から斷乎として所定に邁進する、と云ふ堅い決心を聞いて、師團長として満足する、是非申す迄もないが、準備に遺憾なきを期せよ、出來得る限り援助する大いにやれ」と激勵して下さつた。當時師團長は更迭された西義一中將であつた。

訓練も豫定の如く進捗し、一切の準備は完了して、今はたゞその日の來るのを待つばかりとなつた。所が變な噂が耳に入つた。ソレハ近來兵へ父兄親族の面會人が激増し、中には参加者と親子が、ひそかに水盃を交して別れを惜しんでゐるものもあると云ふのである。十二分の確信を以て居るのに、水盃とは何事だ。兵はソナに迄成功を危ぶんで居るのか!? これでは駄目だ。必勝の信念なくして、いかで、豫想も出來ぬ天の試鍊を乗り切り得よう。嗚呼一年間の訓練も、結局は龍を畫いて晴を點し得なかつたのだ。誠にお恥づかしき次第、だが最早期日も近づきつゝある。なんとか絶対の安心を與ふべき急場の必要に迫られた。しかし今更名案も無い、S中佐と顔を合はして智慧を絞つた。

さて参加者一同を集めて、S中佐から詳細に、行軍の計畫、各種の情況に應ず

る準備等につき説明し、如何なる困難に遭遇しても、何等不安なくこれを克服し得べき旨を力説した。最後に聯隊長は「行軍に對しては絶対の自信を持つ、又三十年間永い恨を残された先輩の英靈を安んずるのは、我々後進の當然の義務である。今や滿洲事變は漸次擴大し我等の戦友は、砲煙彈雨の境に、生命を投げ出して聖戦に従うて居る、それに比すれば、猛り狂ふ雪魔位がなんだ」と叫び、「併し安心せよ、隊の先頭にはこの俺が、汝等と共に行進する、血氣盛んの汝等と、最早五十のこの老人とは、體力に比較がならぬ。だが今度は聯隊長は乗馬でないぞ、この老人が出来る程度の行軍なら、汝等には恐らく朝飯前の行事だらう。要は肚のきめ方次第だ」云々。

冷静に考へて見れば、平素馬に乗つてゐる聯隊長でさへ徒歩だと云ふのに、血氣の若物には何んでもない譯だと、説かれて見ると、心なしか、兵の顔色が、明るくなつたやうにも窺はれた。

愈々その日が來た、八甲田山雪中遭難満三十周忌一月二十三日!!

營内外は見送人の旗で埋まつた。やがて幸畑の陸軍墓地で祈念祭が嚴かに施行された。この弔行軍の發案者で當時の師團長、今は第一線を退かれて千葉縣で閑居されて居られた三好一中將が、遙々壯行を祝する爲めに參列された事は、將兵に深き感動を與へた。西師團長は明治、大正兩天皇の侍從武官たりし頃、皇室に於かせられて、痛く當時の遭難には大御心を注がれ給ひし有難き思召の謹話に、一同の血は油然としては燃え上り、今更ながら大御心の優渥に感涙滂沱たるものがあつた。又遙々宮城、岩手の奥から馳せ付けた遭難生存の廢兵が、家族に扶けられて、兩脚又は兩手を失うた痛々しき姿の裡から、何物かの希望を期待するかの如き輝かしき眸を投げつけてゐるのは、切々として我等の胸を衝き感激なくして正視出来なかつた。「シツカリやれ」と勵まされつゝ待望の行軍は、雪を驅つてスタートを切つた。「誓つて成功する、キツと三十年の恨を晴らすぞ」と全員期せずして心中深く決するものがあつた。

小峠や大瀧平や賽河原の遭難地に差しかゝると、流石に凄慘の感に打たれて、

全員期せず黙々、やがて正午頃、第一目標たる馬立場の記念銅像下に達し、皇居を遙拜し、二百の英靈に黙禱を捧げ、天皇陛下の萬歳を三唱す。何ともわからぬ涙をどうする事もできなかつた。

小峠より馬立場に至る約十吉米の地區こそ、當時行軍隊が三晝夜に互り死の巻を彷徨せし魔の難所、幸ひに當時とは、うつて變つた上々の快晴、仰げば八甲田の靈峰、屹としてその雄姿を雲間に現して、莞爾として我等を招くが如く、俯せば蒼々青森灣の水は、指呼の間にハッキリと眼界に入り、魔の駒込の溪谷も、千仞の雪壁に圍まれつゝ我等の行手を指圖してゐるやに見える、恵まれたる天候！何んだか先輩の英靈の加護がヒシ／＼と身に迫り、自然と勿體ない心地さへしたのであつた。第一日の最大難所は斯くして全員歡笑の裡に難なく踏破し、薄暮豫定地たる田代迄、身も心も軽々と、一氣に進んだ。當時の述懐

三十とせの思は今やはれにけり

雪の田代にあがるかちどき

嗚呼、當時我等の先輩は、荒れ狂ふ大吹雪と闘ふ事三晝夜、精魂盡きて尙且つ目的地たる田代に到着し得ず、萬斛の恨を八甲田山麓に残して茲に三十年、今幸に其の壯圖の大半を何等の故障なくして達成し、こゝ田代の假寢に折しも隙間渡る皎々たる明月に對す、眞に感慨無量、先輩英靈の加護を重ねて祈念して、いつしか夢を明日の雪原にはせた。

第二日も亦昨日に劣らぬ快晴、豪快なる八甲田の靈峰指呼の間に迫り我等を抱くが如く、皚々たる一面の雪山、巨然たる枯木のみ點々として其梢のみを見せ、滿目蕭條の間に一ぱいに旭光を浴び、塵一つとめぬ純白の、處女雪を踏んで勇み立つ一隊の意氣は、流石に晴れ亘つて、既に八甲田を呑み、軒昂たるものがあつた。夕暗漸く逼まる頃既に難關を踏破して、目指す三本木平野の溪谷に達し、出迎の在郷軍人の教導を受けつゝ谷間の諸部落に宿營して、茲に八甲田突破は達せられたのである。一時に張りつめし氣も弛み、にはかに疲勞を感じたが、流石に夢路は圓かだつた。

第三日は歸營の日だ、宿營地を出立して三本木町に入るや驚いた。全町舉げての歡迎者の人垣、萬歳の聲を浴びつゝ設けの式場に入った。西師團長、三好前師團長、青森縣知事等々御歴々の御出迎へには全く恐縮し、感激の極みだった。數々の歡迎、又は祝辭は面耻くもあつたが目頭の自ら熱きを感じた。

夜に入り汽車は衛戍地に着いた。之亦全市を舉げて恰も凱旋將軍を迎ふるが如き騒ぎであつた。光榮と云はうか、双肩が一時に軽くなつた。

翌日早速幸畑墓地に到り、英靈に報告し其加護を拜謝し、茲に八甲田遭難滿三十周年弔行軍の幕は閉じた。行軍間事故皆無を附記す。

二日間の雪中行軍、濟んで仕舞へば何んでもないが、因縁付の行軍だ。天候の急變は人力の如何んともすべからざるものがある。滿一ヶ年の準備、確信は微動だもせぬ筈だが、責任者の身になつては矢張り最後迄心の奥の心配は耻しいが掩ふべくもなかつた。目的地に達する點に就ては何等の疑懼はなかつたが、萬一人でも不祥事があつたら、弔行軍には成らぬと云ふ一事が、ヒシ／＼と絶えず心

を悩ますのであつた。思へば二百の英靈が、三十年間恐らく一日として、我々を現地で迎ふる機會を待ち詫びて居つたに相違ない、精銳なる我軍隊が、雪の障礙を克服し得ぬ道理なく、否な必ず之を排除せずんば雪中作戦には役立たぬと云ふ事になる。況んや其の聯隊に育つて光輝ある軍旗を捧ずる身には、思うて茲に至れば、全身の血管一時に躍如たるを禁じ得ぬのであつた。二百の英靈の加護を享けて、茲に多年の宿願を達成した時の感慨は眞に無量で、讀者の御想像に任せるのみだ。

墓前報告の直後に、荒川河畔に老を養ふ慈母に「母上の御信心に依り無事行軍を終る」と打電した。

(四十一) 軍隊と胸膜炎

陸軍程胸膜炎（肋膜炎）に對し眞剣な努力を拂つて居る處は無からう。蓋し嚴密な體格検査で、選り抜かれた甲種合格者の集團たる、軍隊でも年々疾病に依り

中途除隊を餘儀なくさるゝ氣の毒な兵士の數は尠くないが、其の大部分は實に此の胸膜炎患者である事實に鑑みれば、軍隊の必死の關心も當然と云はねばならぬ。

事變以來徵兵の要員が、多くなつた結果、恐らく體格の低下は免れざるべく、沉んや近時國民體位の趨勢は、憂ふべき方向をたどり、就中呼吸器系統の疾病異狀が、激増の状態に於て、今や上下擧げて、之が矯正向上に躍起となりつゝある際、何等かの參考ともなれば仕合の至りと、此の一片を加へたのである。

士官候補生として生れた部隊に、再び十幾年目で聯隊長官舎に第一夜を明かして、近く思出の起床喇叭を聴きつゝ、デット兵營の方に耳を傾けたが、豫期した憧れの響は耳に入つて來なかつた。由來此の隊は傳統的に劍術が熾んで常に覇を制して全國的にも有名な存在であつた。毎朝起床と殆んど同時に全中隊競うて間稽古と號して、銃劍術の猛練習を行ふのが不文律となつて居つた。彼は實に此の懐しい勇壯の掛聲を樂みに期待して居つたのが、スツカリ裏切られて不審の思と共に、一沫の寂しさを禁じ得なかつた。

早速聯隊附中佐に質したら、一昨年以來胸膜炎患者多發の結果、上司の注意により間稽古を禁止して居る事が判つた。

陸軍では胸膜炎調査委員が常置され、數年來銳意之が研究を重ねつゝあつたが、未だ的確の正體を捉へ得なかつた。従つて之が豫防法も區々で、其時の軍醫部長とか前任軍醫とかの意見で指導されて居る有様であつた。然し統計的に觀察すれば、大體結核菌に對して殆んど處女に近き山村漁村の最良の體格の持主が割合に罹病率多く、従つて體格の優良なる師團が、東京・大阪の如き大都市を擁する師團に比し胸膜炎患者が多發する事は明かであつた、恐らく都會人は幼兒以來之に對する抵抗力が自然的に強くなつてゐる位の素人觀はあつたが、要するに、其の最大の原因は心身の過勞、即ち精神的肉體的の疲勞の累積に存すると彼は其の永年の經驗から殆んど信念的に堅く信じて居つた。そこで醫官や其他の幹部と共に先づ此の胸膜炎退治に乗り出した。衆智を絞つて漸く生れた對策と云ふと大袈裟だが、一言にして盡せば「疲勞を速かに恢復せしむる」と云ふに過ぎぬ。相手は

全國中でも折紙附の優良體格の壯丁である。どんな過激な運動を課しても屁古垂れる様な者は居らぬ。先づ銃劍術の間稽古を復活せしめた。今迄は幹部が既にビク／＼物で猛烈な演習や夜間行軍は勿論銃劍術迄が畏ツカナ怯ツクリの氣分に支配されて、申さば胸膜炎恐怖病で、意氣銷沈所謂戰々競々たる状態であつたから、先づ猛訓練實施を宣言した。胸膜炎が恐しいと云うて、軍隊に課せられてある必要の訓練を行はぬ譯にはゆかぬ。之が爲めの若干の犠牲は悲むべき事ではあるが目を閉ぢねばならぬ。併し、如何に猛烈なる訓練を實施しても、適當なる對策を以てすれば、決して該病誘致の原因とはならぬ。即ち速かに其の疲勞換言すれば精力の消耗を補給すれば斷じて恐るゝに足らぬ所以を反覆説示し、俄然眠れる獅子は立ち上つたのだつた。劍術の如きは隊長以下夏冬連續稽古をすると云つた變り方で、お蔭で立派な道場も出來た。各中隊は特有の粘りある猛演習を始め出した。某大隊は全く不眠不休で三晝夜の連續演習をやる、某大隊は一週間晝夜轉倒晝は寝て毎夜ブツ通しの夜間演習を計畫する、某大隊は毎週一回二十四時間連續

強行軍を實施すると云ふ調子で、軍醫が心配し出した程の大活躍が展開された。それを次から次へと視て廻る隊長がへト／＼になる位であつた。其の代り一方に於て、充分の睡眠時間と適度の榮養食の支給に萬善を期し精力の補給に努めた。隊長は日課として毎日一回は必ず炊事場を巡視した。處が妙なもので、隊長が毎日行くと云ふ事夫れが、炊事下士官當番兵に一種の緊張と、自尊を與ふるかの如く、彼等も眞劍になる。従つて兵食は着々量に於ても、質に於ても、技に於ても改善されて中隊から満足の聲が起きた程に進んだ。先づ榮養の補充はどうやら心配がなくなつた。

軍隊生活は能く知つて居らるゝ筈だが、寒地の軍隊では、冬季温食給與と云ふ事が、大變やかましかつた。即ち寒中には出来るだけ温い食物を攝らせる事だ。之が御互の家庭ならばなんでもない事だが、大勢の軍隊では種々の關係で中々困難な問題で、色々と創意工夫を凝らし、どの隊でも多大の經費を投じて、保温設備の特種の容器や戸棚を備付けたりしてゐるが、偕て其の實績は中々甘くゆかな

かつた。研究の結果、それは食需が炊事場から兵の口に入る間の時間を可及的短縮すると云ふつまらん事に歸着することが實驗的に證明されたのだ。別に大した特別の施設を全々必要とせず、立派に温食給與の目的は達せらるゝのだ。

今迄は炊事の分配時限が定められ、炊事場で各中隊一齊に分配する。中隊では更に各内務班に分ける、内務で漸く各自に配膳して食卓につくと云ふ仕組であつたから折角炊事場で温食を分配しても、中隊では行事の都合で直に食ふと云ふ具合に行かぬ事が、可なりある。其間にスツカリ冷めて仕舞ふ。そこで全中隊統一分配主義を改めて、中隊各箇式にしたのだ。即ち炊事場では分配開始時限のみを定め、中隊は自分の演習等の都合を考へて炊事場から受取つたら最短時間内で食事を始め得る頃合を見計つて炊事場に行く、炊事場では其の都度大釜から移す。中隊へ分配するには熟練な當番兵なら五分もかゝらぬ。之を中隊に持つて行つて“分配”と叫ぶと、内務班は首を長くして待つてゐるのだから、問題なくスル／＼と運ばれて行く、唯特に勤務等の爲めに一般と食卓を共にする事の出来ぬ者の爲

めに、内務班毎に若干の特種の容器を備付ければ足りる。さあ斯うなると中隊では大喜びだが炊事場方面は大不平だ、其の筈である。従來はさつきと分配を終れば一段落であつたのが、今度は中隊が各箇バラ／＼に来るんだから、中々仕事のケリがつかぬから堪らない譯だ。然し食需に最善を盡すべきは炊事場の全任務である。自分の仕事は他にお構ひなく自分だけ良いでは済ませられぬ。その代り休む暇がなかつたら差支ない範圍に於て、炊事下士が隨時休憩させればよい。必要止むを得なければ當番の増加も敢て辭せぬ。そこは所謂國策に副うて進まねばならぬ道理が解れば、不平など云はれた筋でない、追々と彼等も自覺して來た。一事が萬事だ。斯うした協力一致によつて兵食の格段に改善されて行くのが、隊長には一の樂みであつた。

一方醫務室の診断にも出來得る限り顔を出した。さあさうなると大隊長も來る、ともすれば中隊の月例の身體検査にさへ他の行事に追はれて臨席しなかつた中隊長も參列すると云ふ鹽梅で、醫務室は大繁昌、定めし軍醫連は厄介な隊長だと五

月蠅がつたであらう。

斯くして二年の月日は夢の如く過ぎて、隊長は幾多の未練を残して他に轉任したが、恐るべき胸膜炎は激減又激減、師團中の最も少い部隊と變つた。勿論一に軍醫の献身的努力と、中隊長以下の適切な指導の結果に他ならぬが、うんと劇働し、うんと寝て、うんと食ふの三要素が與つて力あつた事と確信する。

今や國民體位向上が、國運進展の爲必須の要件となり、多發する呼吸器系統の疾患の豫防撲滅に躍起となりつゝある秋、胸膜炎が疲勞の累積に依る過勞が發生の一原因であり、精神的慰安と睡眠と食需に依つて、之を豫防し得ると云ふ實驗談も參考とするに足ると思つて此一篇を草した所以である。

軍隊慰問の今昔

今次支那事變に際し各方面より、現地の軍隊慰問が相當に行はれ、將兵に絶大の慰安を與へつゝある事は、誠に欣ばしい限りである。而も之に依り慰問者側の

現地認識を新たにし、延て東亞新秩序の建設に寄與する所も決して尠からざるべく、將に一石二鳥の効果がある。

滿洲事變當時、河北戦線終了後、暫く山海關に駐屯して居つた頃、内地から色々の慰問團が殺到した當時の懷顧談も、敢て徒爾でないと思ふ。

内地から某々慰問團一行が來ると云ふ通報がある。部隊は、諸所に分駐して居るので、勤務の許す限り、其慰問團に特に縁故深き地方の出身乃至特殊關係者等を、山海關に集め、何かと萬端の準備を整へて鶴首して居ると、やがて奉天發の列車で夕刻過ぎ到着する。ソレ入浴、食事と云つた具合で、夜は遠慮なく更けて祿々將兵に接する機會も無い。

翌朝になると早々先づ争ふて、萬里長城天下第一關の見物、それが濟むと代表者とか云ふて若干の人々が、司令部に來て丁重なる挨拶、午前中の汽車でサヨウナラだ、慰問さるべき我々は狐につまされた姿だ。折角方々から兵士を集めて置いたから、緩つくり逢つて下い”と頼むと、洒々乎として曰く”日程が定まつ

て居るので、最早時間が無いさ」と開いた口が塞がらずだ。抑も日程とは何んだ。自分達で慰問團として都合良く勝手に決めたものでないか、肝心の慰問に割く時間を持たぬとは、一體何の爲の旅だ。見物なら見物となぜ判然せぬ、堂々と軍隊慰問と云ふ觸込みだから、こちらでは、懐しさと感謝の念で、兵馬倥傯の間誠心誠意出来得る限り慰問の目的に副ふ如く色々配慮して居るのに、夜遅く到着、早朝名所見物に多大の時間を割きながら、肝心の対象たる兵士には、申譯的に僅少の時間で對面、ソコソコに退散だ、癪にさはらざらんとしても得べけん矣。

又部隊としては、山海關の如き鐵道沿線の都會に駐屯してゐる者は、衣食住に大した不自由がない、之に反し山間の陬地に、狹隘不潔なる支那家屋に住み、物資としては一々山海關より補給を受け、何一つ慰安とでもなく、加ふるに敗殘の兵匪に對し、片時の油斷を許さぬ小部隊こそ、内地の慰問團でも其奥地を訪れて呉れたら、それこそ兵士達の歡喜は想像に餘りあるものがある。そこで司令部ではトラックに必要な護衛兵を附し、絶對危険や不安は保證するから、行つて見たま

へと慫慂しても、例の如く日程の一點張りで容れて呉れぬ。斯うなると我々には慰問團の目的が分らなくなる、斯る事が度重なると、將兵は却つて慰問團に反感さへ起るのである。終には痲癩玉が破裂して、軍に對し、慰問團の來訪は謝絶すると、啖呵を切つた事もあつた。之には勿論、相互の事情不明の原因もあつたらうが、多くは此類であつた。

之も昔の物語となつて、近來は軍部も地方も能く連繋が採れて、眞に慰問の實を收めつゝある事は、往事を追懷して、特に欣ばしき限りである。序に某師管で管内各縣の部長、縣會議長、町村長會長、在郷軍人會幹部、新聞記者等各層の指導階級を網羅して、北滿の郷土部隊を慰問した。一行は先づ各關係部隊長を巡訪し、最後に其地方毎に、郷土部隊の最前線に勤務する兵舎に、兵士と二夜寢食を共にし、具に郷土の物語に耽り、充分慰問の目的を果たし、各箇に豫定の集合地に再び會する間を、夫々の私用を達し、相携へて歸國した。此の慰問團の日程こそ、殆んど理想に近き行動として推賞に値す。敢て遅まきながら紹介する次第で

ある。

又慰問品としては、郷土旬報と云つた様な郷土町村内の一切の出来事、死亡、出生、婚縁は勿論、家畜の動靜に至る迄細大洩さず記事としたもので、之は小学校の生徒から材料を集め、役場か小學校の適任者が編輯に任じたら、大した困難なしに實行し得ると思ふ。斯る慰問品は、どんなに兵士達に歓迎さるゝかは、苟も一度經驗した者の、均しく首肯し得る事と信ずる。敢て銃後の各機關に提唱する。

實 戰 談

少し理窟ッばいが、軍人の實戰談に就て、所懐を忌憚なく開陳して見たい。よく軍人だからと云ふ譯で實戰談を聞かせよと頼まれる事がある。之に對し筆者は終始一貫御斷りをして居るのだ。軍人同志間の意見發表は別だ。別に大した理由のある譯ぢやないが、大した材料を持たぬのが第一で、次は實戰の經過となる

と、どうしても自己に關する事が主となり易く、同時に他人に關する批判乃至是非に言及せねばならぬ事となる。事實を有の儘述べるのだから自己であらうと他人であらうと、敢て忌避すべきでないが、併し、自己讚美も心苦しく、況んや他人の攻撃？も感心せぬ。所が此二件を抜けば所謂骨抜きも同様で、興味も熱も起らず、官報週報の戰況發表同様となるは己むを得ぬ所だ。こんな無味乾燥の實戰談では依頼者の期待に背く次第である。ざつとこんな考へで一切やらぬ事にして、けれども個人の美談とか云ふ事は別問題で、寧ろ一般に紹介して教訓に資すべき事は勿論である。

之に關連して、今次事變以來、新聞其の他で、「人情部隊長」と云ふ名稱が頗る目に付く恐らく日清日露兩役當時は勿論滿洲事變でも、殆んど斯んな表現は無かつたと記憶するが、筆者は何んだか此名稱が氣に喰はぬ。何も人情部隊長が悪いと云ふのでは毛頭なく、誠に嬉しい事であるが、抑も日本の軍隊は、傳統的に「將卒苦樂を共にする」のが常道で、之が又日本の軍隊の強い一要素である。古來武

將は皆此心標へで、支那の「一將功成萬骨枯」なんと云ふ熟語は日本武人としては寧ろ其の誇りを傷くるものである。従て部下並に戰爭に關係なき者に對して人情味を發揮するは、部隊長としては當然の事で、敢て特に舉げて云ふべき筋合ではないのだ。反對に、部下に對し又敵に對し、人情に背く冷血の部隊長が存すとならぬ。之は武將たる一資格を缺いた人だと斷じて憚らぬ。尙一つ注意せねばならぬのは、人情だ人情だと云つて、徒に部下に勞苦を要求せぬが如き事があつては大變だ。誤つた兵力愛惜は兵家の嚴に戒むべき鐵則である。若し戰機が之を要求するとせば、不眠不休は愚か、激働過勞の爲め落伍者が續出しても、心身の最大限度の努力、即ち倒れて後止む位の決心を以て、部下を驅つて水火に投ぜねばならぬ。然るに、これではあんまり可愛想だ、少しは休息させてやらうなど女々敷哀憐から、戰機を逸した實例は東西古今さらにある。斯る場合、指揮官は毅然として心で泣いて、叱咤奮勵死地に活を求めねばならぬのだ。判り良い例を云ふなら、古來「追擊」の敢行は難中の難事で、之を古今の戰例に徴しても、兵學の

要求するが如き徹底した追擊の戰例は、十指を屈するにすぎぬ。勿論其の原因には肝心の彈藥の補供が續かぬとか、其他色々あらうが、其の主なる原因は、敵を突破する迄の死闘の慘烈と、勝利の満悦とが知らず知らず、追擊の出足を鈍らす事に存する。蓋し頑強なりし敵は已に退却し、銃砲聲次第に衰へるや、曩には萬死を期して生還を思はなかつた者も、今や再生の喜悅禁じ難く、極度に緊張した身心は臆て極度の疲勞と化し、隊伍の混亂、親愛せる上官同僚の陣歿等と相待つて、指揮官に對して、既に氣息奄々或は疾呼して救を求むる部下を措き、僅に傷を包んで己に従ふ者を、再び馳つて生死の巷に投ずる事は、情に於て忍び難き者あるが爲めに、終に果敢なる追擊を躊躇するに至るのであるが、こゝは指揮官として眞に鐵石の心腸を要する所であつて、三軍の將は須らく眼前に於ける部下愛惜の情を抑制し斷々乎として、過劇の勞働を要求することを躊躇してはならぬのだ。獨逸某少佐は奉天附近の露軍退却状態を實見して「退却部隊ハ大河ノ決スル如ク、城外一面ハ見渡ス限リ軍隊、行李及輜重ノ各種車輛、徒歩者、乘馬者、又

遁走スル露支ノ商人、果テハ狂奔セル鷄、犬ノ類ヲ以テ充滿シ、混亂ヲ極メツ、
間斷ナク北方ニ向ヒ退却セリ。時ニ日本騎兵來ルノ喚聲傳ハルヤ、筆紙ニ盡シ難
キ恐慌ヲ惹起シ、有ユルモノハ狂亂シテ前方ニ押合ヒ、乘馬者ハ疾驅シテ他ヲ追
越エ、輸卒ハ手綱ヲ切ツテ馬ヲ驅リ、兵卒ハ失神セルガ如ク、自軍ノ輜重ニ彈丸
ヲ集注セリ」云々と書いて居る。斯様な好機は一戰鬪中二度と掴み得ない。即ち
皇軍の標榜する捕捉殲滅の唯一の好機で、一度之を失つたら最後、今愛惜慰藉し
た數多の部下の生命も、再度之を犠牲にしなければならないのだ。換言すれば追
撃に在りては殆んど一兵を損せず、敵を殲滅し得るにかゝわらず、一旦此の好機
を失へば、虎口を脱した敗敵は、再び抵抗を試み、之を撃破するには、多大の犠
牲を拂はねばならぬ事となるのだ。

以上に照らしても、部下の愛撫も、時に依りては、心を鬼にして冷眼一過する
事が必要で、やがて之が最小の犠牲を以て、最大の効果を齎す所以で、斯くてこ
そ眞に部下を愛惜すると稱し得べきであつて、唯人情人情では通せぬ場合が多々

あるのだ。此の要諦を忘却して、婦女子の愛の如き態度を以て徒に、部下に安逸
を與ふるを以て能くするが如きは決して眞の人情部隊長ではないのだ。と云ふ根
本を理解して、通信なり、報道に當つて記者連が、人情部隊長と敬稱したもの
なら、筆者は双手を舉げて、其部隊長に敬愛を表するものである。若し夫れ誤つ
た兵力愛惜を以て人情部隊長と云ふなら、之は寧ろ日本武人の徳操を冒瀆し、却
つて測り知れぬ禍根を植付くるに至る事を衷心恐るゝのである。筆者は事變以來
應召將校の指揮能力、就中部下の統御に就て、種々の批評を耳にし、一昨年親し
く北支蒙疆方面を視察して、不幸にして風評を裏書する様な實例、特に寛嚴其要
を誤まる姑息の統御振りの數々を見聞して、慄然長大息を禁じ得なかつた。然し
之は決して應召者其人の故でなくして、實に制度其物の罪であつた。換言すれば
豫備將校の養成訓練の不徹底なりし當然の歸結に外ならぬ。幸に今では根本的に
之等の禍根を是正し、劃期的改善が具體化し、着々實績を擧げつゝあるから、將
來幹部候補生の自覺と相俟ちて、再び斯る悔を招くが如き杞憂を斷つに至つた事

は眞に皇軍の爲めに慶祝に堪へぬ次第である。

飛んでもない長談議で聊か恐縮の至りであるが、宣傳萬能の時代色に乗り出すやうな戦争談に對し、老婆心の發露として言外の筆者の意を汲んで頂けば幸甚である。

味 覺

決して料理通の向ふを張るなど云ふ大それた考へは毛頭なく、勿論柄にも無き次第だが、題して味覺といふ。果して瓢箪から何んな駒が出る事やら!!

幼少兄弟が次から次へと生れるのと、代々の慣習で、六歳の時、山形縣の山の奥の伯母の許に育つた自分には今日尙其の當時の食物の嗜好が儼として變らぬ。笑談で無いが、羊かんは隅が白くなる位のカチ／＼の堅いのが好き、刺身よりは乾物が所望と云ふ具合だ。思ふに之は味覺と云ふよりは「習覺」とでも云ふのが適當かもしれぬ。田舎の事として當時に在つては、羊かんは最上等の菓子で、年始

や中元の恒例の贈答品で、竹の皮に包まれた其儘土藏の奥深く收められ、お客でもあれば其時に使用する位で、中々子供などに、柔いものなど廻つて來なかつたもので、稀に口に入る時は、それこそ微が生えぬ程度、堅き事申す迄もなし、夫れが子供心には、一番上等の菓子であつたのだ。又時々生家から鮮魚など送つて來るが、何分にも海岸から十里も距つた山奥の事として、大概は煮たり鹽したりしたもの、殊に鮭は其頃荒川では盛んに漁れたもので、川煮と云つて、舟から川岸に投げるのを、其場で、胴切りにして味噌で煮いたもので、之はチョット風格のあるものだが、今以て新鮮な生鮭よりは此の川煮が好物なんだ。之も恐らく右羊かんと同一筆法に過ぎぬ。一事は萬事、食物の味など、斯うした何かの思出によつて著しく其嗜好を左右される事が多分にあるやうに思はるゝ。

舌で食物の味を判然區別する事は、嚴密に云へば中々困難な問題で、其境地に達するには餘程の修練と經驗とを要すべく、加ふるに、贅澤な有閑階級でなければ六ヶ敷、それよりは前述の如く習慣とか、又は耳覺とでも申さうか、名物だと

か何んとか宣傳されると、美味しく感ぜられたり、又視覚とでも云ふべき、器物や形體で、視て食欲をそゝる物も決して尠くないと思ふ。我々でも能く話題に、何所の……は美味いとか、何處の……料理は好いとか云ふが、苟も味覺即ち舌に關する限り、私などは何等の自信を持たぬ。大和田へ行けば夫れが養殖たると、本場物たるを問はず、美味い様な氣がするのだ。誠にお耻しい次第だが、料理を精確に味ひ分ける程舌覺が敏感でなく、又洗練されて居らぬのだ。

之につき一笑話。

岐阜へ行くと、鮎は長良川の鵜飼物が日本一だと計り殆んど其他の産など問題とせぬかの如く自慢する、清泷下越一と云はるゝ荒川の鮎に三ッ兒の折から馴染んで居る自分には、岐阜人の自慢が聊か癢に觸り、長良の鮎決して日本一ならずと、餘計な減らす口で對抗した。某日鵜匠頭の例の山羊鬚の山下君から招待を受けた。

錦華山の麓、長良の清流を前にして、岐阜隨一の納涼所の清楚な一室、會する

者は、在郷軍人の御大栗田老と小生と主人公の山下君の三人、程なく同じ様な鮎の鹽焼に一々番號を付けて八番迄八皿が銘々に配せられた。偕て主人公の挨拶に今日は各國鮎の試食會だ。一番美味と感じた番號から順次に投票せよとの事であった。之は珍らしいと計り、大に舌覺を活かして食へ競べて、夫々等差を付けて愈々開票すると、所謂長良の鵜飼物が、期せずして斷然他の産を壓し、勝敗は決せられた。主人公得意の山羊鬚をしごきながら、如何です、之れでも長良の鮎が日本一と威張つて不可ですかと、流石の小生もグーの音も出ぬ程完全に參つた。成程斯うして食べ競ぶれば、嚴密に云へば新鮮度の相違はあらうが、とも角も美醜の差が判然する。同時に自分の舌の不敏感の正體をハッキリ自覺した。

因に、岐阜に住んでも鵜飼の鮎は滅多に口に入らぬ。蓋し鵜匠の漁獲品は殆んど其の場で氷詰になつて宮内省其他東京、大阪の定連の下に送られて、地元では鵜匠と特別關係以外には殆んど手に入らぬのが實相である。論より證據、岐阜驛の統計に依れば、鮎の季節には岐阜驛へ各所より入荷する鮎と、他へ出荷する

物とは、殆んど同量である。岐阜へ鶺鴒の観光客は、異口同音流石に長良の鮎は日本一だと随喜渴仰熾んに禮讃を浴せるが、豈計らんや前述の如く其の殆んどが他國からの輸入品なのだから罪な話だ。

最後に不思議なのは、荒海の魚は美味しい、鯛は玄海に限るとか、やれ越後の物が一番だなど云ふ人が澤山ある様だが、之れは變な話で、荒海と云うても夫れは海表面だけの現象で、深い所には影響せぬ。常に海面に浮んでる魚なら筋が通るが、鯛の如き海底魚には非科學的の迷論だと思ふ。要するに魚でも獸でも、其飼料如何が大體其味を左右するのであるまいか。三重縣や滋賀縣の食牛の旨いは、旨い物を食せた上に可愛がつて育てるからだ。東京灣の鰻や車海老や穴子が珍重されるは、畢竟東京灣には之等の魚の食料たる色々の魚介が澤山繁殖してゐる爲めではなからうか。長良の鮎は長良川に多い硅藻を食べるから美味だと學者は云うて居る。然し季節の寺泊邊の鯛は旨いと思ふ。

上の好む所

「下剋上」とか厭な字句が流行しだしたが、之れとは正反對の「上剋下」も大に心すべきである。十數年目で、思出の官舎住居、間もなくフト氣が付いたのは、其頃殆んど全國的に影を隠した婦人の日本髷が、官舎の老若奥サン達に多い事だつた。流石は時代にかけ放れた東奥の僻境には、未だ日本趣味が颯爽としてヤンキー型を尻目にしとる哩と、飛んだ處で意を強うして居ると、燈臺の下は暗かつた。愚妻はどう云ふ譯か、若い時分からズット日本髷で通して居つた。勿論新婚當時此處の官舎に二三年居つた頃も。はてなと氣が付いて市中を散歩しても、花柳界以外には稀にしか日本髷などにお目にかゝらぬ事實を捕へた。こりやいかんと早速妻に嚴命下達、日本髷は禁止した。果せるかな何日となしに官舎地帯の日本髷は、一人減り二人減り。

幸か不幸か官舎生活が多かつた、中でも旭川は約七百戸の大世帯で、宛然一城

廓を成した別天地であつた。所が面白い事には婦人會の行事が、會長夫人の交代毎に變つて行くのであつた。料理講習から編物裁縫へ、書道から長唄、謠曲へ、舞踊から座禪へ、育兒から慈善へと、而して其の傾向が、はつきりと會長夫人の私的趣味に添うて遷つて行くのだ。上が下を誘ふのか、下が上に迎合するのか、やる事其の物は別に害のある譯でないから敢て反對するではないが、斯うして變轉する動機に、義憤でもあるまいが淺間しさを感ずるのだ。否其間には恐らく迷惑をして居る者が自然に澤山出來て、ともすれば牝鷄晨をつぐる結果となるのは官舎生活の體驗者には、誰しも納得する處であらう。獨り旭川計りじやない、高田でも、N將軍時代には隨分婦人達が泣かされたと云ふ話は餘りに有名である。獨り女に限らず碁が好きな長官があると碁が流行る。謠曲、宴會、撞球等々悉く然りである。人間何人も趣味がある以上止むを得ぬと云へば夫れ迄だが、軍隊とか、役所とか、會社とか集團社會では、上に立つ者は下僚の前で自ら自己の趣味をさらけ出す事は餘程其邊の消息を一考する位の心構が必要だと思ふ。どうして

も上の好む所に寄つて來るのは決して不純の動機でなくとも、人情の自然である。なに劍道とかスポーツとか讀書等の趣味なら大にやつたが宜しいと云ふ議論もあらうが、碁や將棋より勝しかも知れぬが、然し考へねばならぬ事は、多勢の中から、性格的に好き嫌は免れぬのだから嫌なグループに何んとなく大勢から遠ざけられたと云ふやうな逃避的氣分を生ぜしむる事だけでも決して良い現象とは云はれまい、蓋し其最も好む道には自然之と同趣味の一部が接近し易くなるのは自然で、長たる者は之が最も警戒を要する點で、接近者側の情報が自然多く耳に入るので兎もすれば判断の正鵠を逸したり、極端になると部下に疑心暗鬼を生むやうな結果を招來した例は自分の知るだけでも多々ある。結局は、自己の趣味を部下に現はさず不偏不覺何れにも八方玲瓏か乃至超然たる事が一番無難と思ふ。人情は人情だ、人間の長所であると共に又弱點ともなる。大都會に分散してゐる住居なら大した問題と成らぬが、官舎や高田の如き小都會では其の影響は前述の如しだ。能く／＼心すべき事と思ふ。

東北の人は鈍重であるとは一般の定評だが、確かにさうだ。之は色々の原因もあらうが、爰で之を探求するのは止める。筆者が部隊長として勤めた地方は、東北の最北端で、兵士も勿論土地の傳統其の儘で、敏捷で無い點では敢て他の東北地方の何れに比べても、遜色がなかつた。戦闘は軍隊に最高度の敏活なる行動が要求せらるゝのだ。獨逸軍の電撃作戰も、畢竟するに電光石火端倪すべからざる其機動力の發揮に外ならぬ。従つて軍隊が鈍重では役に立たぬ。話は他所に外れるが、世人稍もすれば獨軍の餘りにも鮮かな勝利を觀て或は支那に於ける皇軍の行動が獨逸の夫に比して、物足りなさを嘆するやの口吻を洩らす者なきにしもあらずだが、思はばるも甚しと云はねばならぬ。蓋し文化の最も發達した中歐、坦々たる鋪裝道が乃至鐵路が縱横に蜘蛛の巢の如き交通網に依り、完全に機械化した軍隊を以てする作戰と、支那の如き交通の最も劣悪な而も險峻南畫其の物の如

き山地と、無數のクリーク又は原始的の河川の相交錯する地形に於ける作戰行動とを比較し、假に今次獨逸軍隊を以てして、皇軍の地位と代らしめば如何、恐らく彼等は手も足も出でぬであらう。論より證據伊太利軍のアルパニア山地に於ける現下の有様はどうだ。閑話休題、行動の敏速を要する軍隊が鈍重であつては困るが、然し箇人の機敏性と、團體の機動力とは別問題である事を知らねばならぬ。一人々々が如何に敏捷でも、軍隊としての行動が不活潑では何にもならぬ。早い話が、急速の事態に對應すべく部隊に、高度の敏速なる機動を要求されても、指揮法が拙かつたり、行動の基調をなす行軍力が之に伴はなかつたら、いかに地團太を踏んでも戦機はさつとと逸し去るのである。勿論箇々の兵も敏捷であり、其の部隊の行動も快速であれば満點だが、而も前者の短を容易に矯正する事は出来ぬが、後者の條件は訓練次第で、之が向上を期し得るのだ。

此所の兵はのろ／＼して居るから、大に機敏性を養成する必要があると號して之が欠陥の是正を目標として訓練に臨む隊長も少からぬが、敢て不適切と云ふ譯

では無いが、何千年來の血液の傳統が、そんなに容易に矯正され得ると考ふる事は認識不足と云はねばならぬ。手段が拙いと、角を矯めて牛を殺す逆効果となる恐が多分にある。自分は任官以來能く其の地方の實情には自信があつたから、兵に機敏性の要求などはしないで、反對に鈍重結構、遅くとも構はぬ確實に與へられた職分を遂行するを第一義とする方針を示し、個々の兵の鈍重は、幹部の適切な指揮を以て補ふ可しとなし、幹部には、高度の機敏性を要求した。蓋し氣の利かぬ者には、幹部が親切丁寧に、豫測し得べき情況の變化に應ずる判断を下し先手々々と必要な指示を兵に與ふる事に依つて其短を或程度迄は充分補ふ事が出来るとの信念からであつた。東北の兵は成程鈍重で、判断力が乏しく、獨斷專行などは不向の欠點はあるが、體格強健能く困苦に克ち、實行力が確實なるの長所を有す。不眠不休能く數日間の強行軍に堪へ、而も命ぜられたる事は、死を堵しても實行する粘着力に富む事は、恐らく全軍中でも傑出して居る。箇々の鈍重など深く意とするに足らず、即ち幹部の適切なる指揮統御が之を補足して餘りあるに於ておや、部下たる兵士は唯黙々として如何なる困苦にも堪へ得る性能があれば足る。要は幹部次第であるから、幹部の訓練には全力を擧げて猪突した所以であつた、

であつた、

某秋季演習の旅團對抗の第一日聯隊は前衛の任務に服した。恰も敵は長隘路を進出して來る情況であつたので前衛は旅團長の意圖に基き、一步でも隘路口に近く敵を撃つ必要が生じたので、出發點から何里でも構はぬ、一時間六軒の急行軍を命じた。二時間や三時間なら問題で無いが、中々敵と衝突せぬ。黙々として重き負擔に肩の痛さを忍んで、險惡なる道路を、急速の歩度で無休憩で進む眞劍の態度を、馬上で悠々？直視するに忍びず、心やすめに坂路には自分も下馬して徒歩した。又少し隊伍が亂れかける様な場面には、道路の側の小高き所に立つて、ヂツと隊の後尾迄見守ると、彼等はニッコと笑を浮べて疲れ切つた脚に活を入れて元氣を出すのであつた、目頭が自然に熱くなる。某中隊長は、演習前約一ヶ月程入院して居つたが、是非にと云ふので、演習に参加させたのであつたが、

餘程辛かつたらう。齒を喰ひ絞つて、中隊の先頭に立つて強行軍を續けて居る。子の顔を見るや、隊長殿此の通り元氣です、御安心下さいと」と空元氣を示して呉れるのも染々嬉しかった。斯の如くして約六里餘を一氣に突進し完全に敵の大縦隊を隘路内に蓋をして有利な戦機をつかんだ事があつた。自分をつくづく今更ら兵の偉大なる行軍力即ち艱苦を克服する體力と精神力に驚嘆したのであつた。落伍兵が、洒々として、電車に鈴なりになるのに比較する時、斯る優秀なる部隊を指揮する幸福を心から、感謝せずには居られなかつた。

人間には必ず長短がある。長を活かし、短を矯め得れば申分ないが、其の實行は容易な事でない。況んや多數の集團に於てをや、能く其の長短を呑み込んで、充分其の能率を發揮せしむるのが大切だが、我々凡人にはどうも其の短所のみが映つて知らず／＼長所をも没却して棄て、仕舞ふ事が多いのだ。之等が因となり果となつて、材所を得ず多くの不平兒を産み不幸なる輩を出す事になる、能く／＼心すべき事だと思ふ。今や新體制漸く成らんとして、未曾有の大變革に直面す、

其の施設には欠陥もあらうし、不平も出るだらうが、今は一々之を論議して彼此理窟を云ふてゐる秋では斷じてない。一切を擧げて當路の指導者達に信倚し、我々は黙々として實行の一點張りでなければならぬ。論議には倦き／＼した。望む所努むる所は唯一實行あるのみだ。御互に此の心構えが所謂新體制に即應する無二の信念であらねばなるまい、飛んだ所へ練練して恐縮々々。

〔附〕本章に於て筆者は、東北出身兵の短所として其の一の鈍重を擧げ、部隊長の教育方針として、鈍重の矯正に過度の關心を拂ふよりは、寧ろ之を其の長所たる體力の強健の強化、服従心の向上に努力すると云ふたが、誤解があつては困るから、更に附言する。現代の戦争否戦闘技術は、駿々たる兵器の進歩と共に、刻々變化して居る、實際今日は歩兵でも其の使用する兵器に於て既に隔世の感がある。由來佛蘭西兵が優秀であると定評せられたのは、箇々の佛兵が、其の判斷力其の臨機應變の獨斷能力と精密なる兵器の使用に熟練し、分隊長や小隊長が居らなくとも、兵が適當に情況を判斷して、立派に分隊の能力を發揮し得たと云ふ點

であつた。今日の軍隊では、指揮官がなくとも、命令がなくとも、其の時の情況に應じて適當に動作し得る軍隊でなくては、精銳とは云はれぬのだ。唯體力が旺盛である計りでは、最早時代後れであるから、東北地方では、小學校、青年學校で、充分其の欠陥の矯正に努力せねばならぬと思ふが併し、世界に於て優秀と折紙つけられた佛國軍隊の、今次戦争に於ける彼の醜體は何たる事であらうか、畢竟千古を通じ軍人の最も尊ぶ所は其の精神力、我々は之を軍人精神と云ふ所の物夫れが軍人の生命である魂を失ふた佛國軍人、如何に伶俐で機敏であつても所詮案山子同然であるのは何等不思議とするに足らぬ。

一步の明

前歐洲大戰に日本軍は、獨逸が最新の設備を加へて難攻不落を誇つた、青島要塞を攻圍した、東京朝日は殊勳の勇士として感狀を受領した海軍陸戦隊の某海軍三等兵曹の、偉勳を掲げた、之を讀んだ村人達の血は湧いた、我村の勇士として

恰も我事の如く喜んだ。戦地へ祝電は飛んだ、小學校では、絶好の教材として全兒童に訓へた、村人は兵曹の兩親を主賓として、祝賀會を催ふす段取となつた、處で此所に一つの難問題が横つて居るのだつた。兵曹の父は好人物であつたが大酒飲で酒癖が悪く鎮守の祭禮、元旦の祝には、必ず泥酔して誰彼の差別なく喧嘩を吹きかけ、多年何かと争のもつれで或時、本家の旦那に暴行を加へたとかで、終に部落制裁を受けて、祖先代々の村を追はれて。川向に移住して今日に至つた。そこで近來は彼も年と共に亂暴も穩かになりつゝあつた事として、此機會に彼を本家に陳謝せしめ従前通り部落の交際を復活せしむべく斡旋する人があり、本家も今度の兵曹の勳功に免じ快く承諾したので、すらくと祝賀會が運ばれた。席上村の長老は、染々と彼に向ひ、「お前も若い時は随分亂行も重ねたが、今度息子がこんな立派な手柄を樹て、日本中に有名になつた以上は、子の名譽の爲にも自分の行を反省して、世間に指差されぬ覺悟が必要だ」云々と噛んで含める様に懇々と説諭した。鬼の目に玉が宿つた、彼は唯ハイハイと頭を下げる計りであつた。

果然牛に曳かれて善光寺参り、悴の殊勳は美事父親を救つたのだつた。孝行の功德眞に顯著なりと謂ふべし。

却説之から本題に入り、彼兵曹を語らん、彼の生家は予の隣家であつた、前述の如く父親がスツカリ家産を飲んで仕舞つて、赤貧のどん底に陥り、小作田の大部も、取り上げられ、馬車輓や、日雇や、炭焼に辛うじて其の日を支へたが、父親の酒は減る所か、増える計りで、長男も愛想をつかして、樺太地方へ飛出し彼は尋常小學校を卒るや、一心に家業を扶けねばならなかつた、予の父は常に彼の人となりに矚目しせめて高等科を終らすべく彼を勵まし其父親を説得して漸く承諾せしめ、彼は欣々として再び通學を開始したが、學業の暇には一心不亂に父を扶けて家業に精進した。漸く宿志を達し高等科を優等で卒業するや、傍目もふらぬ働き振りは優に大人の二人分だと村人賞讃の的であつた。殊に彼は鱒採りの名人であつた、鱒採と云ふのは、荒川の深淵に、箱すかを咬へて潜り入り之を刺して浮び上るので、彼は殆んど百發百中の名手として今尙語草に残つて居る。やがて適

齡に達するや、海軍兵を志願し爾來其日に及んだ、此間彼は其給料の大部を割きて、両親に送つた、彼の父は、正月には菰被りを座右に備へて來る客に、之は彼からの年玉だと紹介して、無上の悦に入つて居た。

海軍に入つた彼は軍務の餘暇に柔道を練習して、除隊後は柔道教師たらんと志した。青島戦役後除隊した、當時は二段であつた、其頃の二段と云へば鱗々たるもので、中學校邊から教師の口も相當あつたが、彼は考へた、柔道教師も寄る年波には克てぬ四十か五十歳が關の山だ、偕ともてソレからがどうなる？ 況んや二段位では未だ不安心なるに於ておや。彼は猛然として某々中學校の招聘を斥けて、上京した。

詳しく彼の決意を聞いた予は、幸に某柔道塾を知つて居つたので、早速情を具して依頼し、彼は其塾の學僕として寮の炊事場の雜役に服しつゝ餘暇を以て柔道の鍊磨に精進した、一念は巖を貫く、彼は此處にも非凡の活動をなし、間もなく三段に進んだ。柔道教師としても最早充分だ。彼は更に熟慮し、接骨術を修習す

べく決心し、晝間は依然寮の雜役と柔道に汗みどろになり、夜間は塾の大学生等につき接骨術試験に必要な學科を勉強した、塾の人々は彼を不死身だと云つて其活動に驚嘆した。後年彼は當時を追懐し其一年間は毎夜二時間しか眠らなかつたと。努力は酬いられて其年末には美事に試験に合格して、天晴柔道整復士の免許を勝ち得たのであつた。

小成に安んずるは人情の弱點である、然るに彼は決して吳下の阿蒙に甘じなかつた、見よ海兵時代に柔道を修め、更に之が向上に猛進した、次に彼は晩年の處世對策として接骨術を習得して之に備へた、少くも彼は一步前の先見者であつて而も非常な努力を傾注して所信に忠實であつた。

以上は其半生涯に於ける血と汗の足跡である。桃栗三年柿八年、既に果實は結んだ。併し彼の向上心と先見は、決して之に安じなかつた。某日彼は江古田に予を訪ねて、今後の方針に就き意見を求めた。兩者膝を交へて検討に検討を重ねた結果。將來は勿論接骨醫として立つも差當りの急務は實地の修練にある、此間中

等學校の柔道教師を主とし、副業的に開業すると云ふ事に兩者の意見が一致した。次は場所の撰定であつたが、接骨の患者の多き事が第一の狙所ならねばならず次には學校も出來得れば二校位兼務を希望してあつたから、色々と勘考の結果、函館を第一希望地とし小樽を第二と定めた、蓋し港であつて、市街に坂が多いと云ふ事が主なる理由であつた、幸に函館には官廳、實業界方面に知人が多かつたので、話は急テンポに涉り、中學及商業の教師を拜命し、埠頭に近き松風町に居を定めて接骨師の看板を掲げた、開業に際し予は彼に一要求を提出した、それは治療費は一回五十錢とする事と云ふのであつた、當時予が彼に説明した理由の骨子は、曰く「接骨術の如きは何よりも經驗に依る、修練が大切であると共に、信用を得る事が絶対要件だ。而して折骨捻挫の如きは勿論治療保護も必要だが、要するに時日が大半之を解決するのだ、而も患者の大部分は下流階級に屬する、當時函館には七八名の同業者があつたが、何れも怪氣な連中で、正式の修業を積んだ人は殆んどなく、無免許の者すらあつて。治療代は一回一圓が掟であつた。貧乏

人には到底二月も三月も醫者に通ふ事は至難であるのが實情だから、大概の者は未完治の儘で治療を中絶する、而も之等の連中は十中八九は其接骨醫は下手であるから治らないと云ひふらすが通例である。彼は云はゞ斯道の新參者で勿論修業時代である、敢て多くの収入を望むべきでもないから此際専ら社會奉仕の積りで治療代を半額の五十錢とし、可成患者を長く通はせる様に仕向ける、即ち他の接骨醫に一ヶ月かゝる人が、コチラでは二ヶ月治療出来る譯だから、成績の擧るのには自明だ、完治せば次から次へと一文も費はずに宣傳せらるゝのだ、前途は遼遠で大成を期する素地をウンと築かねばならぬ、況んや肩書は中等學校の教師として社會的地位は、他の同業者と比較にならぬ優位にあるから、數年の間は収入の多少等は問題とせず、専心技術を研磨し、信用を獲得する事を開業第一歩の要諦とするに在り云々」と云ふ趣旨であつた。彼は唯々として忠實に之を實行した。開業半歳予も任を旭川に奉ずる事と成つたので、函館に出張する機も多かつたから其都度彼の居を訪うて激勵した、其當時既に患者門前市をなし、朝早くより夜

半まで、殆んど食事を攝る暇も無き程の繁昌振りであつた、而も彼は其頑健無比の體力と、旺盛なる向上心に依つて、全力を擧げて治療に従事し、一方外科醫と密接なる連繫を保ち且指導を仰ぎ研鑽怠らず、予が旭川に滿四ヶ年を送り、東京へ轉任の節には、彼の名聲は既に北海道を壓し、遠く樺太に及び青森地方に及ぶ躍進振であつたので、大に彼の成功を祝し最早一人前に成つたのだから治療代半額の要件は自然其目的を達したから普通の一圓に値上げを勤告せしに、彼は依然從來の半額を堅持して更に、精進せんとの牢乎たる決心であつた。

彼の親孝行は勿論依然變化なく、今でも村人の均しく賞讃する所である。

斯くして彼は技能も進歩し、今日相當の産をなし、先づ成功の部類に伍すべき人物となつた、彼の夫れ迄の足跡を検討して成功の素因を検討すれば、第一は常に先へ先へとの先見の明と、之に伴ふ努力である、予は郷黨の青年に、常に彼を模範とすべく推賞して今日に及んで居る、彼とは函館市堀河町平田接骨醫院主動七等功七級平田庄藏氏其人である。

以上は今夏歸省の際、彼の長男で目下某醫專の學生が、墓參の序に訪問して來た折に、父の名を辱めざる様囑望し物語つた概要である。

金溜め道樂

黄金に縁なき軍人にも型破りの者も居る、某准尉、臺灣歩兵部隊に勤務以來頗る貯金熱を昂め、毎夜就寢の節貯金通帳を眺めニッコロと獨り悦に入らねば眠れぬ迄に進行しそれが隊内の評判であつた。數年後朝鮮駐屯平壤の北の片田舎の守備隊附として例に依つて營々として毎夜貯金通帳の慰安を享けつゝあつた事は申す迄もない。某日彼は血相を變へて中隊長室に飛び込んで、大變だ〜と獨りで喚き立てるので、中隊長も何事か出來せしやと質しても、相變らず太息つき唯口惜い〜とのみ、愈々唯事ならずと聊か語氣を強めて「准尉何事だ」と叱り付ける様に訊せば、漸く我に歸りていかにも残念相に、一日千秋首を長くして待望せし、勸業債券の割増金が發表せられ、彼の所持せる額面番號……二〇然るに參千

圓の當選番號……一〇。中隊長殿口惜いですが、僅か十番達にて、參千圓を逃がした、全く残念で諦めがつきません、あゝたつた線一本の十番達、口惜くて〜堪りません”と、呆氣にとられながら中隊長、眞面目になりて“それはお目出度十番達でこんなに残念がるなら、一番達だつたら、死んで仕舞ふ所であつた、よかつた〜”と准尉は何か吐きながらふら〜と出て行つた。丸で落語の様な馬鹿げた話だが眞正銘の實話だ。

金に對する愛着心と云ふ奴は、世間にもざらにある伊勢屋氣質、貯める一方、世人から指彈されつゝも當人は馬耳東風、高利貸でも何んでも手段を撰ばずに蓄財に凝り固り、巨大の財閥となつた例も澤山にある、我々の如き金に縁なき者は、どうも此種金持の心理が分らぬ、財を蓄ふる事は決して悪い事ではなく否賞むべき事である、財産家となる事は恐らく人間共通の願望であらうが、然し蓄財を利用する欲があつての話、即ち能く公共の爲めに散ずるとか自己の趣味に投ずるとか、金殿玉樓に豪華な生活を樂むと云ふなら、理窟が通るが、例の伊勢屋流で

唯産めよ殖せよ式の、蓄める一方の連中は、眞逆棺桶に黄金を入れて、冥土の土産にするに云ふ譯にも行かぬのだから、果して何の爲めに蓄めるか。我々貧乏人には頓と合點が行かぬ、所が准尉には極めて明確な理由があつた、彼の言に依れば、金を貯へて何に使用するなどは末の問題だ、そんな事は未だ考へて居らぬ、准尉には金の増殖する事が天上天下唯一無上の娛樂である、他人が酒色を楽しむ、讀書を楽しむ、音楽を楽しむ等と何等變つた心理では無い、然るに稍もすれば、金をためる趣味を目して、彼此非難がましき事を耳にするは、不可解千萬だ、自分の道樂は金を溜めるにある。即ち金が殖えて行く程愉快な事はない、何に使ふなると云ふ事は敢て問題にあらず云々と。

成程一應尤もと思ふ節がある、貯金すると云ふ事が一の趣味であり道樂であるとするれば、第三者が彼此是非すべき限りでない、況んや何等他人や社會に迷惑にならぬ事なるに於てをや、拜金屋とか何んとかケチをつけたがるのは、或は我々貧乏人の負惜みから生ずる一種の嫉妬でなからうか！彼の自ら頭を百遍も下げ

て高利貸から借金しながら口汚く高利貸を罵る輩と、一脈の相通する物を感じさせられて忸怩矣。

金溜話と並べては甚だ相濟まぬが、二、二六事件の巻き添へで兇刃に斃られた渡邊大將閣下があの讀書家であられた事は有名であるが、全く大したもでの物凄位位であつた。專屬の副官は新刊書の注文や撰擇が一仕事であつた位、片端から讀破され、就中、歴史物が好まれたやうだつた、其中には獨乙の兵書や雜誌もあつて、有益な記事は自ら翻譯されて部下に頒たれた、而も其讀書速度の早い事と記憶の精確な事は全く敬服の外はなかつた、閣下は新聞の三面や、雜誌等は我々の如く行を追ふて一字宛讀むやうな事はなく、項を斜に目を通ふされ即ち斜讀でスウ／＼と判るのだからスピードの勝れて居る事も明かな話だ、兎に角寸時も本を放たなかつた程の讀書家で、讀了の本は、幕僚に讀めと云つて分けらるゝ、併し我々は中々簡單には讀まぬので、時折「君あの本は讀んだかネ」と督促されて皆頭をかくのであつた。師團長として初度巡視には必ず各將校集會所の備付書籍

に目を通され、其藏書の貧弱に呆れて居られた。良書があれば盛んに之を紹介せられ、部隊は勿論北海道管内の中等學校や圖書館に寄贈せられた事も少くなかつた、實に閣下は偉大なる讀書家であつた。

前述の如く幕僚連中は、閣下から渡さるゝ讀書が次第に増す計りで其要點を晝食の際など一般に紹介せよと云はるゝには實は閉口する程で、參謀長も手古摺つて居られた。閣下は、讀書位よい趣味はない、敢て他人に迷惑もかけず、隨時隨所に簡單に出来る、コンナ面白い事を、何故やらぬのかと不審がつて居らるゝのだ。

御互に不勉強連が、ストーブを圍んで、閣下から讀書の催促を何んとか緩和する方法がないかと、怠け相談の結果、貧乏籤があたり某休日に官邸へ訪問した。にこくと色々な話をして下さつて例に依つて「君達はそんなに忙しいのか、あんな面白い本を讀む暇が無いとは云々」筆者は得たり賢しと眞面目になつて、「閣下夫れは無理です、閣下の讀書は、我々が旗亭で氣焔を擧げると同様の一の

道樂です、自分の道樂を他人に強ゆるのは如何なものでせう」とやつたら、閣下はさも不思議相に「そうか道樂カナ！」と頭を傾けられて、大笑された。笑話は偕ておき、實に大將の讀書力は、我々の如き怠け者から觀れば神技に近く驚嘆すべきものであつた。今や其偉人無し、追慕を新にするのみ。感慨無量。

惡 伯 樂

千里の駿も良伯樂に會はずんば空しく槽檻に朽つ、謹で此一片の懺悔を故中佐の英靈に捧げて不明を謝す。

中佐とは將校團を同うし、而も候補生及見習士官時代には教官大尉時代には聯隊長たりし間柄であつて、中佐の考科に就ては、十分の自信を有した積であつた。

例年の通り、將校の淘汰を必要とする時機になつた、全く隊長としては厭な行事の最たるものだ、大尉若干名を割り當てられた、學校配屬將校を合すると二十數名の大尉の内から、是が否でも選定せねばならぬのだ。未だ充分將校の性格識

能を判定する丈の自信もなかつた、況んや學校配屬將校の多數は一年に若干顔を合はせる程度の人も尠からず、思案投首詮衡に當つたが中々最後の決には入らぬ當時中佐は先任中隊長で磊落な豪傑肌で、自ら將校團の生え拔を以て自任し、能く部下や舊知の世話をしたり、衛戍地の古顔で地方にも相當の交友があり所謂重寶な方だつたが、短軀肥滿長途の行軍に堪へず、秋季演習には止むなく乘馬職の機關銃隊長で參加させた、士官學校の成績は下位であつたが、相當の能力を有し、中々理窟も云ふ一言居士で、部下の統御など、一見粗豪の様であるが、微細の注意も認め得たが、中隊一般の成績は中以下である事は、定評であつたであらう。聯隊長は彼の長所も短所も知つて居た積りであつた、愈々決心して彼に白羽の矢を立てた、ソコで彼を招き内意を打明けた。大尉なら昔からの戰友だ、誰か一人は選ばねばならぬが、未だ充分知らぬ人もある、大尉は先任でもあり、舊友でもある、聯隊長の心を汲んで呉れ”と肚を割つた。大尉は事もなげに例の呵々大笑”當然の順番です決して御遠慮なく”と思はず互に堅く手を握つた。

翌年彼は少佐に進級して待命となり、郷里に居を定めた。此人事は自分としては決して不當とは最後迄も思つてゐなかつた。つまり中佐の運が悪かつたのだ。支那事變に召集され某特設部隊の大隊長として、勇躍征途に上る際、元氣の挨拶を寄せた、北支に轉戦する事一年有半、終に壯烈な戦死を遂げた。戦地に於ける彼に就ては殆んど其消息を詳知しなかつたが、やがて論功行賞が發表せられ彼は拔群の偉功を認められ、武人の最高名譽たる殊勳甲を以て功三級を授けられた。自分は新聞を見て實は愕然としたのだ。早速所屬部隊の編成地に赴き中佐の戦場に於ける數々の實話を聞くを得た、大隊長としての統御は堂に入つたもので、戦場に於ける指揮も卓抜、其動作は勇敢、模範大隊として、中佐の令名嘖々毎戦偉功を挙げた、就中其最後は實に壯烈の極であつた。能く寡兵を以て數十倍の敵に對し、右に左に變幻の妙を發揮し、徹頭徹尾攻撃に次ぐに攻撃を以てし、戦機熟すと見るや敢然として率先僅少の手兵を提げて、突如敵の虚を衝き、陣頭に立ちて將に突撃の間一髪、白刃を手にした儘萬事休焉、全軍中佐の偉勳を絶讃す。

嗚呼思はざりきく、斯る傑出の將校とも知らず早まつて淘汰の臺に送りし不明省みて冷汗背に徹し懺悔措く能はず、親しく中佐の墓前に額づき涙を以て陳謝し染々と自分の淺墓な、誤つた判断に耻入つた。傍の遺族に對し實に面をあげ得なかつた。嗚呼一言不平がましき態度も示さず、唯々飄々として郷里に歸つた彼の姿を想起して、今更肅然として襟を正さずには居られぬ。人を觀る事の容易ならぬのは誰も承知だが、候補生以來親炙した人に對してすら如斯、今にして思へば職務とは申せ堂々と考科表などを認めた事が空畏しい心地がする。
英靈よ天心に住して庶幾不明の我を笑へ。

不 平

幼年學校時代に石黒閣下から色々と教訓を享けた事は既に御紹介した筈だが、尙一つ「不平」に就て閣下の達觀を追懷する。

「人間誰でも不平はあるよ。然し不平をならべても一向得にならぬのみか却つて損をする事が多いもんだよ。若し不平を鳴らして儲かるなら俺などは、毎日々々不平ばかり云うてあるくよ。」と呵々哄笑さるゝのであつた。成程不平を云つても儲からぬ!! 全く達語だ。人生航路の眞髓に觸れた含蓄の深い言葉で、石黒閣下ならではと、染々感心する。

實際人間には事の大小は別として何につけ不平は誰でもある。胸中の鬱勃たる不満を爆發させる事は、流飲三斗で痛快此の上もないが、畢竟自己満足か自己宣傳以外には、徒に淺薄な胸中をさらけ出して物笑になるか、他の鑿感を買ふに過ぎぬ。不平の内でも自分の身上に關する事は一番聞き苦しい。軍人に例を求むれば、年々澤山の元帥の卵が少尉として巢立ちするが、元帥や大將がソンナに必要ながないのは當然だ。役人や會社員にしても、誰も彼も大臣や重役になれる道理がない。軍隊の人事の取扱は、他に比すれば最も公正に行はれてゐる事は決して過言でない。昔は長の陸軍、薩の海軍とか派閥的時代もあつたかも知れぬが、そんな事は昔の物語だ。然し人間には己惚と面子をてらふ習性がある。そこは凡夫の

悲さだ。人事行政上當然の詮衡で淘汰されて現役を去るとなるとか文句を並べ、甚しきに至りては、「自己の硬骨が上司の怒に觸れたとか」、「人を見るの明を缺くとか」、「情實だとか」、愚にも付かぬ不平を憶面もなく放送する輩も無いではない様だ。勿論人事を裁く人も神でない限り稀には見損じもあるかも知れぬ。又運命と云ふ不可避の浪に捲かるゝ事もあらう。例へば短所のみを知られ、長所を發揮する機會を失ふ人もある。其の時々の人事の都合で組合せの不利な順番にあたる事もあらう。當局の人事方針の轉換で幸不幸を招く事もあらう。部下運の良否も少くならし、豫期せぬ責任問題の突發もある。算へ来れば自分の力でどうする事も出来ぬ因も決して尠しとしない、しかし夫れが所謂運命だ。天を呪ふ以外誰を恨む譯にもゆかぬのぢや。況んや人各々賢愚優劣は免れぬ。みんなが師團長に立身する譯には參らぬのだから、夫々の所で、退却するのが當然過る程當然であらねばならぬ。中には實際氣の毒な籤を引く人もあらうが、之れとても滿更理由なしに捨てられる譯がないのだから、そこで石黒閣下の道破せられた「不平は得

にならぬ」と云ふ平凡の眞理を篤と腹の中で勘考してみたら、心境打開に何よりの妙藥だといつゝ考へさせられる。

自分は今でも好んで三國志を愛讀する。彼の蜀の趙雲が、主玄徳の幼君を懐にし、梨花紛々唯一騎曹操百萬の大軍を蹴散らし、亂軍の間に、名ある大將五十餘人を打取り一身に洒く血は泉の湧くが如く、重圍を破つて、辛うじて玄徳に會し甲を解けば阿斗よく寢入りて未だ醒めず、玄徳之れを取つて地上に投げすて睨りて「汝が如き核兒の爲に、己に股肱の大將を失はんとせり」と、趙雲涙を流して再拜し「某肝腦地に塗るとも、此の恩を報じ難し」と玄徳の知遇に感ずるの一節を愛誦する。世人若しこの玄徳となりこの趙雲とならば人生何處に不平あらんやだ。

鈴木大將と郷土愛

鈴木大將が急逝された。昭和十五年二月二十日午後二時半迄の大將邸よりの電

話で愕然として身も心も空で駆けつけたが、同日午後一時半、溘焉として天上に歸元せられた。

十四日には米内首相の在郷軍人會審議員の晩餐招待に會老として出席せられ、側近者も從來嘗て見ざる程の上機嫌にて、首相對手に種々諧謔を交へての交歡、歸宅の自動車内で、同乗の柴田少佐に、今夜は非常に愉快だったと語られたさうだ。十八日には御家族と軍人會館で撮影せられ、十九日は將軍の誕生日で、其晩は一家陽々たる團欒の裡快く祝盃を重ねられ、翌二十日朝近所の理髮店に自ら行かれて綺麗に散髪されて午前九時半頃、歸宅後間もなく急に胸部の激痛を訴へられたので、家人は驚き早速醫師を招き手當を加へたる結果、小康を得、醫師も安心して正午後辭去し、家人も漸く安堵の胸をなでおろした。かくて將軍はすやくと快眠を續けられたが、午後一時半頃、突如全身をがた／＼と躍動し、うーんと呻きを發せられた瞬間萬事終焉、何の苦惱もなく、斯くして大往生を遂げられたのだ。原因は狭心症。

あまりの呆氣なき御名残り、生けるが如き温顔に、最後の別れの際でも、夢の如くどうしても死なれたとは思へぬのであつた。嗚呼、我等の慈父は逝けり、萬感交々錯綜云ふ所を知らず。武將としての將軍に就ては、敢て予の如きの領域でない、他に其人あるべし。爰には筆者の知れる範圍に於ける、郷土人としての將軍の一側面を偲びたい。

新潟縣出身陸軍將校を以て組織する六花會と云ふのがある。初代の會長は石黒子爵、當時の軍醫總監、二代が實に將軍で、此會創設の肝入人で、爾來十年一日の如く、後進を扶掖誘導せられ、將校生徒の卒業祝賀には殆んど缺かせられず、今日籍を陸軍に有する將校は、悉く閣下育英の息のかゝらぬ者は無いと云ふても決して過言でない。

將軍は御承知の如く、參謀總長を最後として現役を退かるゝや、近親知己の反對を斥けて東都生活をさらりと捨て、郷里三條市木場小路に質素の邸宅を營まれ夫人と共に閑居された。將軍の錦衣歸郷は三條市は勿論、全縣を擧げて歡喜隨仰

してお迎へしたのだつた。想ふに將軍の歸山の眞意は斷じて閑雲野鶴ではなく、實に身を以て後進を扶掖し、郷土の福利増進に餘生を捧げんとの堅き決意の下に決行せられたものである事は、將軍の自叙傳に明記されてある所である。所が將軍の門前は、徳を慕うて教を乞ふ人々に依り市をなし、指導に講演に揮毫に全く寧日なく、之には流石千軍萬馬を往來されて綽々たりし名將も餘程閉口された様だつたが、その後樞密院顧問官、在郷軍人會長の職は、三條に安住する事を許されず、再び上京牛込に居をトせらるゝに至つた。

越後に關する事は、餘裕の許す限り、直接間接に熱心なる援助を惜まれません、最近は羽黒山後援會長を快く應諾せられたのでも、以て全般を窺ふに足る。就中三條市の社會事業は勿論市民の生活の問題に至る迄、非常に盡力せられた事は三條市民の均しく忘るべからざる所だらう。其一例として予は「三條市は、將軍を酷使す」と迄市の某有力者に極言した事があつた。實際何んでもかんでも將軍を煩はしたものだ。或時餘りの事に將軍に諫言した事もあつたが其の都度將軍は「三

條の事は、どうも頼まれるれば、斷はる譯には行かんで”云々と洩らされるのであつた。三條市民たる者は以て肝に銘すべきである。宜なり將軍の三條市葬は、名實共に誠に立派なもので參列の人々を深く感激せしめた。即ち當日自宅より市葬式場に到る沿道は、偉人を慕ふ老幼男女の市民を以て充たされ、各の職場にある人々も皆夫々軒下に列んで、仕事衣の儘敬虔なる態度を以て靈柩を拜した事だけでも、筆者は未だ嘗て見ざる眞摯にして莊嚴の限りであつた。

將軍の揮毫は將軍一流の豪快雄渾奔馬の如き筆勢で、御自身で莊六流など、仰つて居られた既に一家の風格を成して居つた。苟も新潟縣下の神社佛閣、學校、團體の依頼であれば、快く受諾せられ、一日多きは六、七十枚に達する有様で就中炎暑の候などは、流汗淋漓、傍に觀てゐる者でもハラ／＼する位の過勞にも窺はれ、時には保健上の理由を以て、中止を具申した事もあつたが、將軍は「否とよ、揮毫は精神を統一するので、身體の爲めには、頗る適當の保養になる」とて聽き入れられなかつた。最初は個人の依頼は謝絶する方針であつたが、晩年には

知遇を辱うしてゐる者の懇請に對しては、如何はしき部類にあらざる限りは需めに應ぜられた。今次事變に三條市の戦病死者の遺族には、必ず一枚宛贈られ其數は夥しき數に上るだらう。

以上は筆者の直接知つてゐる二、三の例に過ぎぬが、要約すれば晩年の將軍は、公職以外の全精力を、郷黨の爲めに傾倒せられたと云つても、決して過言で無い。互尊社の反町君などは恐らく數限りなき程將軍の此等に關する御盡力の如何に甚大であつたかを、能く知つて居られる筈だから更めて聞く事にしたい。

嗚呼皇紀二千六百年二月二十日、我等の慈父は、溘焉として上天せられた。暗夜に燈を失うた我等は、唯茫然たるのみ。從來難問題にぶつかり何んと處理すれば良いか判断がつかず、困り切つた時、一度將軍の嚴平たる風貌に接すれば、無限の力強さを覺え、勇氣百倍、自信を取戻すを得たのに、今や將軍亡し。複雑怪奇の國際情勢に在りて、千古未曾有の偉業に邁進しつゝある國家の現況は、偉人に待つ事頗る大なるを思ふ時、吾人は更に更に將軍の長逝を痛惜して已まない。

又郷土としての損失を省みれば頓に寂寞と哀愁を深うするものもあるのみ。然れども偉人の巨大なる印蹟は眞に千古不滅也、將軍の形骸は天に歸せども、魂魄は永へに越佐の上に止まりて我等を照鑑す、奮起一番將軍垂範の教訓に酬ゆるの誓を新にするのみ。

床間生けるが如き肖像と、示訓の軸に對し、冥想、謹て將軍の知遇を肝銘し、冥福を祈りて筆を擱く。(二月二十三日告別式の前夜認む)

父 と 母

無味乾燥にして淺薄極まる思出の記も、だら／＼と回を重ねる事爰に五十、そそ／＼石頭ストーンの内には、思出の材料も乏しくなり之以上に各位を惱ますに忍びずこゝらで永らく讀者の目を汚せし事を詫びつゝ、一旦筆を休める事とする、最後に今日迄の御好意に甘え暫く筆者をして我親愛なる父と母を讚美するの我儘を許されたい。

時と場合を問はず我としての最も愉快なそして楽しいのは、折に觸れて父母の追想に耽ける間である、思を一度彼の山高く水清き荒川の畔に、靜かに老を養ひつゝある老母に走らす刹那、自分ながら恍惚として羽化仙極樂淨土に逍遙するが如き陶醉に魅せられるのである。以下此の心境に浸りながら陶然としつゝ筆を進める、どんな事を並べたとしても、心中何等の屈托も蟠りもなく有の儘の感想を憶面もなく赤裸々に書き連ぬるに過ぎぬ、如何にも心臓が強いやうで唯單なる一家の私事に就き各位に見ゆる事は恐縮の至りで忸怩たるを禁ぜず、然れ共希くは筆者の心境を諒察されて、之を寛容せられん事を呉々も御願する。

清冽荒川の流に添ふ一連の高臺、遠く雄大なる飯豊の連山を前にし、近く靈峰光兔山^{こうさき}を背にし、奇屹南畫の如き湯澤山と藥師山が屏風の如く左右から迫り、銀蛇の如き荒川を中心に關郷の谷地眼下に展く、眞に山紫水明風光頗る明眉四季折々の眺め、各其秀を競ふ、嘗て野田九浦畫伯來り遊び、其雄大にして變化ある美に打たれ、絶賛の餘り終に筆を投じて唯嘆聲を洩らせるのみ、我常に郷土の風光

に對し厭く事を知らざるは敢て我田引水に非らざる也。

父は確に當時に於ける革新的先覺者であつた。若し今日にして在らしめば恐らく典型的大政翼賛會陣營の格好の適材であつたらう。五尺六寸二十餘貫の堂々たる偉軀、銳意舊體制の打破に努め、産業の革新に、交通の整備に、教育の振興に率先身を挺して郷黨を率ゐ、今日尙其實蹟の存するもの尠からず、即ち、高等小學校の創設、縣道の開通、下關市場の開設、水田及桑園の改善、高瀬の開墾等々之が爲め殆んど東奔西馳席温かならず、自ら先進地方を歴訪して實施に研究を重ね、諄々として保守一點張の村民を説得して改善を圖り、孜孜として倦まず、遺澤今日尙嚴として郷黨に輝く。然れ共斯くの如きは當時幼少にして何等の記憶なく、後年多くは之を人に聞きしに過ぎず、親しく深刻に肝銘し感謝措く能はざるは我々子女の教育である。當時は學制布かれて日尙淺く、尋常小學校が漸く市町村に設置せられるに過ぎず、高等小學校の多きは岩船郡にては郡役所の所在地たる村上町に唯一校ありしのみ。然れ共其内容は充實し堂々たる寄宿舎を有し、共

程度も相當のもので、恰も今日の中學校に匹敵し、其卒業生は郷黨に於ける一廉のインテリを以て自他共に之を認め現在の中學卒業者以上の聲名を保有し、従つて中學校に入學するが如きは田舎にありては實に曉天の星の如き感ありし時代であつた。斯の如き環境に拘らず我々多數の同胞が悉く少くも中等學校以上の學校に學ぶを得たりしは、當時の郷閭に於ては破天荒の異例であつた。長兄が高等科を卒業せし頃下越方面には唯一新潟中學ありしのみ、然るに父は俚言の「新潟ハ男ノ子ト杉ノ木ハ育タヌ」として之を忌避し、當時名教育家として令名噴々たる中原貞七氏を校長とする隣縣の山形中學を選んだ。山形市と我家とは何等の交渉もなく、縁故もなく、交通機關皆無の頃とて米澤街道を徒歩で三泊以上を要した遠隔の地であつた、其關係で筆者も兄の後を追うて山形中學に入つた、姉は嘗て反町氏が紹介せられし如く、山口權三郎氏經營の縣下唯一の長岡の實業學校女子部に笈を負うた。爰に當時の風潮を物語る一挿話を掲げん。

長兄が中學校を卒業するや更に仙臺の二高を志願し造船科を専攻すべく熱望し

た。さあ大變、越後の片田舎の酒造家の相續人が、造船を學ぶと云ふのだ、第一に溫厚なる母が大反對、其理由は學業終るも歸郷して父祖の業を繼ぐを得ざるに至るべしと、當時の風習としては正當なる主張で又卓見であつた。然し此強硬な反對にも係らず父は唯一言本人の希望に任せるとのみと、母も一旦云ひ出したら退かぬ父の氣性を知つてか、之以上に意見を固執せられなかつたので、兄は喜び勇んで其志望に邁進するに至つた、之には他に種々の經緯もあつたが餘談に亘るから省略する。こんな話は今日の人達には恐らく夢想だもせざる處で、數世紀以前の昔話としか考へられぬであらうが、片田舎にありて上級學校に進む事が、如何に面倒であつたかの一端を語つた次第である、長兄が大學に進んだ頃は、同時に少くも三人位が次々と、中等學校に在學した時代であつた、殆んど半官費にも均しき陸軍地方幼年學校ですら、一ヶ月の學費は平均十五六圓は要したと記憶する。筆者は實に仙臺地方幼年學校の第一期生である。之を今日に換算すれば恐らく其數倍で、加之尙親戚の男女數名を師範學校に入學せしめ、女子の方は更に高

等師範に進んだ者もあつた。素より大した餘裕などあるべき筈なき家計では、此教育費は經濟的に容易ならぬ過重の負擔であつた。父は實に之が爲め日夜如何に心を碎かれ、苦勞せられたかは今に及んでハッキリ其並々の努力でなかつた事が判つた。嗚呼何にも知らずに人並顔に便々として過した學生時代を顧みて誠に感慨なるものがある。

我々同胞は實に何んたる幸福者であつたらう、今日のやうに教育の普及せる時代の人には、前述の如く想像もつかぬ程、進學の困難であつた越後の僻陬に生れ勿體ない程の教育を授けて下さつた父の恩を偲ぶ時に、眞に偉大にして崇高な仁慈の溫容が、歴々として眼底に彷彿し力一ぱい縫り付きたい氣になる。

父上逝きまして爰に二十有六年、嗟、子養はんと欲すれば親待たず、目瞑合掌靈嘯院虎岳勇猛居士の唱名を念じて、六十年の歲月を追懷する毎に、宏大無邊の父の慈愛が、しみぐと骨身に徹し、追慕感謝の念を次第に深うするのである噫。

皇紀二千六百年の佳節に、我慈母は、十一人の子寶功勞者として厚生大臣から

表彰せられた。

多數ノ子女ヲ育成シ國本ノ培養ニ資スル所尠カラズ仍テ茲ニ之ヲ表彰ス

八十有七歳の母を圍んで、外地にある四名を除き、長兄以下七名の子女と、十數名の孫や曾孫達の、心の奥から湧き出る歡喜の聲は、何んと形容してよいやら全く其言辭を知らぬ。六十四の長男から十一人の子女は敢て珍とするに足らぬかも知れぬが、末子の四十歳に至つては厚生省の調査に依れば實に他に比類なしとの折紙である。勿論母の腹を痛めた十一人が悉く健在であるのは申す迄もない。日本一だ!! 日本一だ!! 堂々たる日本一の我等の子寶部隊長だ。長兄が恭しく表彰狀を捧げ、母を中心に父の墓前に菩提寺住職の司會で報告祭を施行した。其刹那に捲き起つた感激の嵐は、歡喜と幸福感を最高潮に押し上げ、感極まつて涙自ら滂沱たるを禁ぜず嗚咽の聲さへ洩れた、恐らく生涯を通じて到底忘るゝ事の出來ぬ印象が一同の頭に深刻に焼付けられた。其夜は水入らずの内祝、母の嘉例の松坂節に和して、あらん限りの聲を張りあげ一家を靄然たる瑞雲に包んだ何ん

と云ふなごやかな情景であつたことよ。母は早く嫁ぎ主婦として田舎に通有の相當厄介な環境に在つて、活動家であつた父に後顧の憂なからしめ、其間次から次へと我々十一の子女を完全に育てあげたのだ。

何んと云うて母を描寫してよいか、良妻賢母とか淑女とか貞婦とかそんな表現に超越した崇高なる「善の權化」、「慈愛の結晶」であり、其日常の行爲其物が菩薩其儘であると云ひたい、恐らく母は今日迄苟も省みて疚しい行などは斷じて無かつたと信する。其惡を憎む心は善を讚する行と共に極めて強く、勤勞を愉みて倦まず遊惰の風などは微塵も味つた事がなからう、隨て近親と云はず他人と云はず使用人と云はず、常に春風駘蕩慈愛に富み能く人情を體し義理に厚く、玲瓏玉の如き母の人格に接した者は何人も母の讚美者となり所謂ほめ者であつた。善の權化と云うて決して過言でない事を確信する。〇〇の活觀音いっくわんのんと云つても一寸解らぬだらうが、今では近所近在では誰一人知らぬ者がないさうだ、夫れは村人達が母を呼ぶ通り名であるとか、以下少しく觀音信者としての母を眺めん。

六十歳頃から母の健康が思はしくなかつた。何分にも數多の子女や孫の育成に又十數人の大家族の外可なり人の出入繁き家事一切を司る事數十年、其間の恪勤努力は疲れを知らぬ人とすら云はれた程に、母は殆んど僅少の睡眠時間の外は孜孜として寸暇を空費せず働いた。

此過勞も一原因であつたらう、終に心臓を害して永く藥餌に親み、加ふるに腎臟病をも併發し、長く病床の人となつた。母の宿願の一つは父と相携へての西國三十三番巡禮であつたが、父の在生中終に其機を得ずに間もなく病に臥すに至り殆んど此望は遂げらるべくもなかつたが、幸に病稍小康を得るや、願望は猛然として擡頭した。當時交通機關が今日の如く開けず、相當大旅行で主治醫は全然問題とせず、之に同意しなかつた。然し母の初一念は鐵石の如く牢固として何物も之を阻むを得なかつた。母はよし參詣の半途に斃るゝも寧ろ本望であると迄決心してゐるのであつた。斯く迄の信心なら寧ろ其意に任せたが宜からうと評議一決幸に當時長兄が大阪に居住して居たので之を根據として長兄家族や弟達が交々御

供して待望の旅に就かれた、母は隨喜の念に満ち／＼和歌浦から船で第一番の紀州熊野の那智靈場に始まつて二番三番と順を追はれた、懸念した健康も按ずるより産むが易く、至極元氣であつたが、半頃に至り一寸脚部が腫れ出し終に若干休養を餘儀なくされたが、幸に大した事もなく、再び勇氣凜然終に第三十三番岐阜の谷汲寺を最終として首尾良く一生の念願を果たされたのであつた。母の欣びは想像に餘りある。當時自分は東京に在勤四谷見付の寓居に歸途の母上を御迎へした。病氣などケロリとどこかに吹ッ飛んで實に健々しく元氣に充ちた温容に接した時は、思はず觀音様に合掌感謝の念に胸一杯であつた。

爾來觀音に對する信仰が彌が上にも昂まると共に、心臟病など全く忘れた様に再び舊の如き健康體に復せられたのである。人間の精神力の偉大さよ!! 百の靈藥より信仰の力が肉體を左右する大なる神秘さを染々と實感した。將に醫藥萬能論者には好箇の參考資料であらう。斯うした奇蹟的の西國巡禮以來母自身が觀音菩薩の如き現示となり、一も觀音二も觀音、温泉郷湯澤の松岳寺境内に三十三觀

音建立となり、觀音講の先達として善男善女に觀音の功德を施し、將に近隣を風靡したものだ。我子の病氣平安の祈願の爲め、深更門前に活觀音にお百度を踏む人すら現はるゝに至つた。嗚呼廣大無邊自在神力なる觀世音を念ずる敬虔なる母の姿の神々しさよ、八十七歳の今日尙毎日の勤行を欠かさず一心に御詠歌を唱す一點の我慾なく邪念なく、常に正を履んで誤らず、恩を天に謝し、仁愛を普くし、眞に明鏡止水の境地に在り、活觀音に非ずして何ぞ。

由來身を持する事嚴にして人に施すに寛、勤勞を尊び無爲を忌む、働く事が唯一の樂みであり慰安である、之が即ち母が八十餘年を一貫した習慣にして信念である。一日の徒費は母の最も苦手とする所、老來家事を姉に委して所謂樂隱居となりても終日針を棄てず、縫ふ所の雑布は悉く我々の家庭に惠まる、然るに晩年再度腎臟の大患に見まはれ、生死の巷に彷徨し、流石母の體内の變化は知り盡してると確信する齋藤主治醫も殆んど匙を投げたに係らず、之又奇蹟的に快癒するに至りしも、以來雑布刺は筋肉勞動的に過重となつたので之を廢して、糸結びに

轉じ、常住坐臥今日に至る迄終日休む事なく斷片の屑糸を克明に繋ぎて一束となし、之を以て紬を織り子女に頒ち今や順次孫に及びつゝあり、今日迄既に數十反に達す、勤勞の崇嚴さも爰に至つて極まると謂ふべく、同時に我々には絶好無二の記念品である。

次に身を持つるの儉なるに至つては始終一貫して變らず、各自歸省の折々に、老體なれば幾分なりと輕き召物寢具などを心して贈るも、勿體ないとして平常身に着けず會々予等の歸省の報あるや、急遽衣替をなし寢具や坐蒲團などを更めさせ曰く「着ないと又叱られる」からと蓋し折角の好意を無にせざるを子女に示さんとの心遣なり、以て萬事を推すに足らん乎。

北は滿洲北海道より、南は臺灣の間に散在しある子女共よりの、四時折々の粗末な贈物は、好むと否とに係らず心から感謝の念を以て賞味せられ、自ら彌勒の世と稱して満足せらるゝのみならず、親戚知人に頒ちて樂まる。

母の山好きは相當なもので、就中秋の茸狩は恐らく一年中の唯一の行樂であつ

た様だ、殊に家政に遠ざかりて以來は、秋晴の日は殆んど日課の如く、夕方歸宅獲物を展げて一々始末する事が如何にも樂しげで、爐邊物語は其日の茸狩の實況が話題の主であつた。晩年は妹が必ず同伴する事に極めてあつた。病後は體力が之を許さなかつたが、季節になると、之への憧が終日家居に堪へず、母の外出用にと特別に工夫を凝らした乳母車に乗り妹や孫共が押して山に入り、車の上から指圖して搜がさせてせめてもの満足を充たされた。彼の秋晴の陽光を浴びて居間の椽先から、馴染の山々をヂツと憧憬の眼ざしを以て、恍惚と見入る母の姿が、繪のやうに浮びあがる。

近年に至り又一の新たな趣味？が加はつた、訪問又は歸省する孫や曾孫共が、膝下を去る際餞別の如き意味で金一封の祝儀を與へらるゝのだ、稀に訪るゝ者は勿論、新潟や新發田等に寄宿しある學生連が、一日の休日を利用して歸宅する毎にも必ず其都度一々自ら祝儀袋に入れて親しく與へらるゝのが、何んとも云へぬ程の満足を感ぜらるゝらしく、何分にも數が多いので一年を通すれば相當の額に

達する譯だが、面白い事には、姉や嫁からは家計に幾分なりと影響があるならんとの細き心遣から補充を受くるを欲せられず、我々が省歸の折々に差上ぐる御小遣が全部之に充用せらるゝのである。世間には往々老人が臍繰を蓄める例はあるが、我が母に至つては鑑一文の死藏もなく實に恬淡其ものである、

最近に於ける母の一日を描けば、朝は四時既に目覺め、女中達の起きるを待ち兼の有様で、通常夏は五時、冬は六時頃に離床、洗面の後服装を整へ、概ね掃除の終つた頃を見計はれて茶の間に出られ、次で神棚に禮拜祈念の後、佛間に入り讀經御詠歌を唱せられ、祖先代々の冥福と遠隔の地に在る兒孫の名又は年齢を擧げて一々其健康と併せて家運の隆盛を祈願せらる此間約四十分、之が毎朝の勤行である。一同の朝の挨拶を受けて朝食、佛壇に其日の茶を供へる迄閑談、食物は獸肉以外は何んでも欣んで攝られ、且毎食後必ず乾海苔を自分で火にかざして玩味さる。其他は多く居間に退き、丹念に糸繫に精進殆んど手を休めず、此間必要に應じ茶間に出で、來客に辭儀を缺かさず、大意後夜の佛間の勤行を朝に代へて

以來四時頃居間に端坐觀音を禮拜祈念す、夕食後四方山の話に興じ、入浴通常八時前後に就寢。入浴は非常に好きにて醫師から止められざる限り一日も廢せず、慣習として入浴後は嚴冬と雖も肌褌袴一つになりて團扇にて身體を冷し體熱の醒めた後床に入る。一風變つた癖であるが、或は之が皮膚の自然の鍛鍊の重大役割を果たしてゐるのかも知れぬ、次が大變なのだ、老後夜食として鶏卵大の握飯二ヶと果物を殆んど欠かした事がない、母の傍に伽をして夜半目を覺ます毎にいつも此夜食に口を動かして居らるゝには驚かさるゝ、菓子のカステラ位にて餘り口にせられぬが、果物に至つては無二の嗜好品で、一年を通じて之を備へる事は田舎では相當の困難であるが、幸に各地に分散してゐる兒孫達が、季節の折々に地々方々の産物を心掛けてゐるので殆んど事欠かぬ。以上が規則正しく繰り返へさるゝ母の日課である。外出としては春秋の彼岸に寺詣でと母の生家の墓參、鎮守の祭、其折々の墓參、稀には湯澤の三十三番觀音詣位のもので、例の乳母車で四方の風光に、若き日の思出に浸りながら、樂みの一つとして出かけられるのである。

最後に十年一日の如く母に常侍其保護に専任しある、妹に就て語らざるを得ぬ彼女は若齡にして親戚にあたる同郡内の〇〇家に嫁し、數人の子女を育て、夫に死別し、長男は軍人他は各或は嫁し、或は獨立成業するに至り、長男の許に在りては勤務の都合にて、轉々知らぬ他郷に住まねばならぬ事を忌み、寧ろ實家にて母の世話に當らん事を望みありしを幸に、長男の諒解を得て一切母の世話を依囑する事とし、十數年來母の身邊を離れず、母又妹に對しては何等の遠慮も氣兼ねなく、恰も幼兒の親に駄々をこねるが如き有様で、妹は母の一顰一笑一舉手一投足に依り、其心理健康状態を判断して誤らず従つて痒い所によく手が届く譯で、眞に求めて得べからざる適役である。家族は云ふ迄もなく、遠く膝下を離れある我々としても此忠實無類の名保護者の存在に絶對の信頼を傾倒して何等の不安を感ぜぬのである。彼女は其惣領の許にありて孫の世話位に安樂を求め得る境遇を自ら棄て、現在の如き地位は誠に氣の毒の感なきにしもあらねど、明朗圓滿にして母に似て仕事好きな性格は、家族一同にも好感を以て調法がられ、彼女自らも

常時母の膝下に在るの幸福を心から喜んで居るので、我々は母を思ふ毎に彼女に衷心の感謝を捧げずには居られぬ。實際今日母が米壽の齡を重ねんとし尙矍鑠たるは、妹の此献身的の奉仕が與つて大なる力である事は均しく認める所である。従つて今日に於ては彼女は母には無くてならぬ存在であるのである。希くは彼女の將來に幸多かれと祈る。

常に喜心を懷にして専ら法縁に樂み、一點の邪念も一沫の不安もなく、活觀音と崇められ、とも角も十一人の子が今日尙健在奉仕しある満足感に浸り、精神的に何等の惱を有せざる事が母の健康の唯一の原因であるらしく、老來益々健かにして僅に耳が遠くなりし代りに二三年前より老眼の視力が完全に復活して以來眼鏡を要せず、今日は針の溝すら自ら易々として糸を通ふし得るに至りたるは、醫學上の一驚異たるを失はぬ。斯くして明年は待望の八十八の賀を迎へんとしつゝありて、米壽祝賀の諸準備も内々着々進捗し、一日千秋其日の來らん事を渴望してゐるのである。

「母の健在」之が我々の唯一の光明であると共に偉大なる發憤の起動力である、同時に一家親和の中心である。此意味に於て母の長命は單に母其人のみの問題ではなく、十一人の同胞の欠くべからざる支撐點であり、支柱であり靈藥である。我々の健在も又母に大なる悦を供すると同様に、母の長壽が亦我々には何よりの糧であり榮養である。勝手な理窟かも知れぬが此意味に於て母とは連環的にながつちりと一體をなし、不即不離の關係にある。筆者が今日でも出來得るだけ度々歸省する所以は實に爰に存するのだ。母の膝下に在る時は勿論、之を偲ぶ間の私は最も幸福なる時であり、最も愉快なる歡樂の境地である。故に親を讚美する心持は絶對無我無罣礙なり、心平かならざる折に思一度慈母に走れば、豁然として一切を忘れ、恰も陽春に會ふが如し。此意味に於て自分は實に恵まれたる幸福者である事と心から感謝せず居られぬ。庶幾各位も老母の健康に一片の祈を賜はらん事を切望して爰に秃筆を擱く。

昭和十七年十二月一日印刷
昭和十七年十二月五日發行

(五、〇〇〇部)

定價金壹圓參拾錢
送料十五圓

武士根性

著者

平田重三

東京市日本橋區久松町一三番地

田中貫行

大阪市東區西國手町一〇三三番地

印刷者(西大光)岩岡忠一

東京市神田區淡路町二丁目九番地

日本出版配給株式會社

出文協承認
ア 170344



配給元

發行所

東京市日本橋區
久松町一三番地

鶴書房

出文會員番號 一一八〇一五
電話 西花 67 五一六番
振替東京 八二三三五番

957
E 17

中野正剛氏著

世界維新の嵐に立つ

B 6 二四〇頁
價 一・五〇
千

世界の維新は遂に來た、地球をゆさぶる大嵐の中にすつくと立つた日本の勇姿、今こそ我等日本人は世界を動かす力となつたのだ、革新政治家の第一人者中野正剛先生が愛國の叫びは凝つてここに一卷となつた、一億國民老年も壯年も青年も讀め、しかして著者の氣魄に觸れ、一人々々悉く世界を動かす力となれ。

情報局情報官 藤田實彦氏著
陸軍中佐

髯はほ、笑む

B 6 三四〇頁
價 一・八〇
千

髯の戦車部隊長として勇名を轟かした藤田中佐が、その後北支に中支に活躍、歸還されて忽ちその名髯が描き出す數々の悲喜劇がユーモアたつぷりに筆をはしらせ、御難つゞきの髯が何故剃れないかについて、北支に於ける歸順工作宣撫工作中佐が支那服に身を隠し、挺身匪賊の大軍の中に突入してこれを説得して、數々の血沸き血躍る苦心談が名文以上の名文となつて紙上に躍る。

鶴る贈に世てつもを信自

書房二大新刊

終

鶴書房刊

● ¥1.30